

て、本来の面目を丸出しにしたからである。

「秩序」とは、ギゾーの戦ひの叫びであつた。秩序！と、ギゾー一派のセバスティアニは、ワルソーがロシアに割かれた時に叫んだ。秩序！と、カヴェニアクは、フランスの國民議會の、そして共和黨系のブルジョアジーの反響を叫ぶ。秩序！と、この將軍の霰彈は、プロレタリアートの肉體をつんざいた時に唸る。

「一七八九年以來のフランスのブルジョアジーの無數の革命のいづれの一もが秩序への襲撃ではなかつた。といふのは、それはその階級の支配をそのままに残し、労働者たちの奴隷状態をそのままに残し、若し屢々その支配とその奴隷状態との政治的形態を變へたにもせよ、ブルジョア秩序をそのままに存続せしめたからだ。六月革命はこの秩序を襲撃した。六月革命は禍ひなるかな！」

臨時政府「二月革命直後——引用者」下に於ては、寛宏なる心の持主たる労働者たち——官邊の幾千もの掲示の上に特筆されてあつた通りに、三箇月の貧困を共和國の祭壇に捧げた労働者たち——に向つて、二月革命は労働者たち自身の利益のために起されたものであり、且つ二月革命に於ては問題は何よりも殊に労働者たちの利益に繋つてゐたといふことを説教して聞かせることは、體裁のいゝことであり、それどころか必要なことではあり、同時にま

た得策でもあり、巧みな煽てあげ方でもあつた。次で國民議會開始以來に至つて、人は散文的になつた。それでも問題はまだ大臣トセラが言つたやうに、たゞ労働を二月革命前の諸條件の上に復舊することに繋つてゐただけであつた。かくて、労働者たちが、二月革命に××を取つて起つたのは、徒らに、一の産業的危機の中に投込まれるためにすぎなかつたのだ。

「國民議會の仕事は、二月革命が——少くとも労働者たちのためには——起らなかつたと同様にし、労働者たちを舊時の諸關係の中へ引摺り戻さうとするにあつた。しかし、それすら註文通りに行かなかつた。といふのは、普遍的性質の一産業的危機に向つて、恰度この限界まで来い！(そこで止れ！)と呼びかけるやうなことは、一個の×の權力を以てしても、一個の議會の權力を以てしても、共に出来ない相談だからである。否、國民議會は、小癢に障る二月革命式の物の言方の息の根を止めて呉れようとの、その野獸的熱狂を充すためには、二月革命前(七月王政時代——引用者)の諸關係の基礎の上に可能であつた諸方策をすら講ずることが出来なかつた。そこで國民議會は、十七歳から二十五歳までのパリーの労働者たちを軍隊に強制編入し、しからざれば彼等を舗道の上に投出した。國民議會はまた、外國人たちをパリーからソローヌへ、路用の金さへも支拂はずに追放した。成年のパリー人たちに對



しては、國民議會は軍隊的に編制された工場に於て、お情けのパンを暫定的に保障したが、それも彼等が如何なる公衆集會にも参加しないと云ふことを、換言すれば、共和國民であることを止めると云ふことを條件としての上であつた。センチメンタルな二月革命流儀の修辭を以てしても不十分であり、五月十五日に倣つた野獸的立法部を以てしても不足であつた。事實的に「カづくで」一切が決裁されなければならなかつた。貴様たち瘦犬どもは二月革命を貴様たちのために起したか？ それとも俺達のためにか？ ブルジョアジーはこの問ひを、勞働者たちが六月に榴散弾と防塞（バリカーデ）とを以てそれに答へなければならぬやうに仕向けて提出した。

『それなのに、六月二十五日には、一代議士が言つた通りに、全國民議會が失神状態に陥つた。彼等は、問ひと答ひがバリーの舗道を血で浸した時に、固くなつて物が言へなかつた。一部の議員たちは彼等の幻想が硝煙濛々の中を駈廻つたが故に茫然自失し、他の一部の議員たちは如何に民衆が純然たる彼等独自の利益を獨立的に代表するが如きことを敢てしたかを理解することが出来なかつたが故に茫然自失した。ロシアからの金が、イギリスからの金が、ボナバルトの驚（註一）が、百合（註二）が、等々各種各様の呪符が、世にも合點の行かぬこの事件に關する彼等の理解を助ける媒介物とされなければならなかつた。いづれの議

員たちも、しかし、一の不測の深淵が彼等を民衆から引分けてゐることを感じてゐて、さて誰もが民衆のために敢然として起たうとはしない。

〔註一〕 當時雌伏の野心家ルイ・ナポレオンがナポレオン一世に倣つて用ひてゐた一家の徽章。（引用者）

〔註二〕 當時復讐を圖つてゐた二派の王黨中の所謂正統派によつて推戴されてゐたアルボン王家の旗じるし。（同上。）

『失神状態が一過するや否や、噪狂の嵐が卷起つた。そして、全院の多數が、當然にも、尙ほ依然としてフラテルニテを、友愛を、口にするが如き時代錯誤をやつてゐる憐むべき空想家たちや、偽善者たちの發言を口笛で葬つた。今こそ問題は、この空想と、その漠然たる意味の裾のうちに隠されてゐるあらゆる幻想とを一掃することの上に繋つてゐるのだ。正統派所屬議員で騎士的情熱家であるラロッシュ・ジャ克蘭が、熱辯を揮つて、『敗北者こそいざまだ！』と叫ぶ人々の愧づべき態度を攻撃した時に、全院の多數はタランテル（狂暴なる狼の一種——引用者）に襲はれたやうに亂舞の状態に陥つた。彼等は、勞働者に對して、『いざまだ！』と叫んだ。彼等は、『敗北者』は彼等自身以外の何人でもないことを隠さうがために、さう叫ぶ。今や彼等か、しかざれば共和國かの、何れかゞ没落しなければならぬ。さ



ればこそ彼等は狂氣の如く吼へる、共和國萬歳！と。  
 「我々の足許に口を開けた深淵、——それが我々デモクラットたちをして、國家形態を中心としての闘争が無内容であり、幻想的であり、虚無であると妄想せしめるやうなことがあつていゝものだらうか？」

「たゞ軟弱怯懦な心の持主たちのみがこの點に疑問を挟む。ブルジョア諸國家の諸條件そのものから起つて来る軋轢衝突は、戦ひ抜かれなければならない。それらは空想裡に葬り去られる譯には行かない。最良の國家形態は、その内部に於て社會的諸對立がうやむやに糊塗彌縫されてゐることのないやうな、強力的に、換言すればたゞ人爲的に、換言すれば見せ掛けだけに、阻止されてゐることのないやうなそれである。最良の國家形態は、その内部に於てそれら社會的諸對立が自由なる闘争にまで、従つて解決にまで來ることが出来るやうなそれである。」

「人は問ふであらう。國民の狂亂のために、戦死した犠牲者たちのために、國民警備軍、別働警備軍、共和派警備軍、常備軍のために、我々が一滴の涙をも、一回の溜息をも、一句の言葉をも持たないか？」と。

「國家は彼等の寡婦と孤兒とを扶助するであらう。布令は彼等の榮譽をたゞえ、盛大なる葬

列は彼等の遺骸を土に埋め、官邊の機關は彼等の不朽の生命を宣し、ヨーロッパの反動派は東のはてから西のはてに至るまで彼等に禮讃を寄せるであらう。

「しかし、平民、——饑飢によつて嘔なまれ、新聞紙によつて侮蔑され、醫師たちによつて見放され、縉紳君子によつて泥棒と罵られ、放火犯人、大罪人として爪弾きされ、その妻子は底知れぬ貧苦の淵に突落され、生き残つたものゝ中で最も幸運なのは海外に放逐されるのが落ちである平民——彼等の悲痛にも暗い影のさす額に月桂冠を捧げることこそは、民主的新聞紙の特權であり、正當の權利である。」

——以上——

本文の筆者は初め若干の辭句を断片的に引用する積りであるが、結果に於ては、極めて小部を削つた以外は、殆ど全文を譯載したことになる。だが、讀者諸君のすべては、筆者がさうしないで居られなかつた氣持を諒解されることであらうと思ふ。誰が會て、上掲のマルクスの言葉以上に、ブルジョア國家の内部に於ける「友愛」の諸相の上に、水もたまらぬほどの鋭き批判のメスを加へたか？そして誰れがまた會て、そのやうに、泡立ち、光り輝く革命的情熱を以て、ブルジョア・デモクラシーの現實の姿態の最も重要な一面について不可抗の科學的論理を堂々と進めたか？更にまた、そこにはブルジョア・デモクラシーからプロレタリア・



デモクラシーへの必然の過程の闡明が既に用意されてゐるではないか？ かうした諸點は、幾分か長すぎるやうにも見える上來の引用をジャスティファイするに十分であらう。

## 八、自由と平等——矛盾する二つの命題

「ブルジョア・デモクラシーは、中世紀に對してこそは一の強大なる歴史的進歩でこそあれ、恒久にそして資本主義の下に於て必然に、狭く局限されたる、虚偽の、偽善的な制度であり、富者には天國として、被搾取者には、貧者には、陥穽且つ欺瞞として現はれざるを得ない約束のあるものだ」(レーニン『背教者カウツキー』)

「自由・平等・友愛」の輝ける歴史的スローガンを高く掲げた第十八世紀末のフランス革命は、永き過去の神祕的傳統の奇しき光に包まれてゐた×・貴族・僧侶の特權——近代絶對××の形態にまで發展した封建的大地主の支配の實體およびその象徴——を正面の敵として生死の闘争を戦ひ抜き、異常の勝利的成功を収めた。

この××を通じて反抗階級の闘争武器としての役割を演じ終ふせたデモクラシーは、今や新たに支配階級の地位に据つたブルジョアジーの政治的支配のジャスティフィケーションを供給すべき新使命を負はされることになつた。



さうしたデモクラシーが一切の具體的現世的階級的利害關係を超越した絶對的存在たる理性の命令の反映だといふことは、換言すれば「純粹デモクラシー」であるといふことは、畢竟するに一場の幻想にすぎない。それは初めから、獨自の具體的な、現世的な、——實にその核心に於て經濟的な——階級的利害關係を以て社會進化の流れの上に打つて出た新興ブルジョアジ—の物質的福祉への奉仕者であつたのだ。

近世紀の經濟的發達——殊に通商、航海、技術、自然科學、等々の進歩と相互に相關聯して急速に増進した資本の蓄積——の產物として擡頭した近代ブルジョアジ—は、更にそれ以上の發展のために、封建的大地主の支配下のあらゆる社會的經濟的政治的束縛桎梏から離脱しなければならなかつた。それはまた、通商交通の發達と共に、地域的にも封建的經濟の窮屈な限界を突抜けて、より廣潤なる國民經濟の領域に進出しないで居られない内的衝動を感じた。更に封建的支配形態が、絶對國家の支配形態にまで併合擴大されてゐる處に於ては、ブルジョアジ—は、その絶對國家が彼等の上に掲げてゐたあらゆる苛斂誅求、束縛抑壓の網の目を突破しなければならなかつた。かうした様々の必要に應じて、デモクラシーは、理性強調のドクマの下に、傳統的權威の上に立つ封建主義、絶對主義の不合理性を白日の光に暴露することによつて破壊的事業を遂行し、更に人民主權の立場から國民主義の原理をも導き出し、(その一端は「人

權宣言」の上に反映されてゐる。) 經濟關係の國民的規模への擴大の要求に相應する政治上の中央集權主義の理論的基礎を築きあげた。フランス革命が封建主義の覆滅の遂行と共に、既に絶對國家の下に於ても着々實施されつゝあつた中央集權の完成をも、その意識的目的の下においた事實は、ブルジョア・デモクラシーが如何にナショナリズムにも不可分の關係を持つてゐるかを雄辯に物語るものである。そして、この點に於て我々はまた、封建主義の下に生れてナショナリズムにまで高潮して行つたブルジョア・デモクラシーが、ナショナリズムの下に起つてインターナショナルイズムにまで進展したプロレタリア・デモクラシーに對比して、如何に顯著なる一個の對照を示してゐるかを見ること出来るのである。このことは、デモクラシーと帝國主義との交渉の闡明に對して、一重要項目をなすものである。だが、それを今問題にしては餘りに議論を多岐に互らしめる處れがあるから、それは茲ではたゞ如上の示唆に止めておくことにする。

だが、これらのことをすべて考慮のうちに入れても、ブルジョア・デモクラシーが中世紀に對して一の強大なる歴史的進歩をなしてゐるものであることは、自明の眞理だ。何よりも殊に、封建主義が一切の社會的諸關係を固定せしめることによつて歴史の車輪の一步の前進をも執拗に停止せしめてゐた際に當つて、ブルジョア・デモクラシーは壯烈にもそれに不可抗の動



力を加へて、それをして俄然大音響を立て、強力に進轉せしめたのだ。  
それはまことに、歴史上の一偉觀であつた。あらゆるブルジョア革命の最大のものであつたフランス革命が、單に當時の全民衆を熱狂せしめただけでなく、今日なほ人の眼を眩まし血を沸かせる力を失つてゐないのは、決して偶然ではない。

更にまた、それは次の一歴史的眞理を最も鮮やかに具現した。「歴史は教へる。未だ曾て如何なる被抑壓階級も、××の一時期を潛り抜けることなくしては、換言すれば、政權獲得の一期、すなはち、倒された搾取者たちによつてなされるところの、絶對絶命的な、極度に野獸的な、如何なる犯罪にも尻ごみすることない反抗を強力的に壓服する時期を潛り抜けることなくしては、權力に到達したことのなかつたことを。かの「獨裁一般」への反抗を公言し「デモクラシー一般」に身も心も打込んで渴仰する社會民主々義者たちによつて、現在その支配を擁護されてゐるブルジョアジーそのも、かつては文明諸國に於て幾多の反抗および××により、×の支配や封建的奴隸所有者やを強力的に××し、また彼等の再起計畫を抑壓することによつて、その權力を戦ひ取つたのだ。」(レーニン『デモクラシーおよびイクタータールに關する諸テー

セ』尙ほ以下ブルジョア・デモクラシーの批判に關聯して再三この文書を引用するであらうが、その際は單に引用符を附するだけに止めて、一度々々その出所を特記する煩を省くことにする。)

だが、それだからといつて、ブルジョア・デモクラシーが持つた新時代創造力を今日眼前の社會的的局面に於て期待して、それを純粹デモクラシーの名に於て禮讚しようとすることの如何に時代錯誤的であるかは、改めていふまでもないことである。それはデモクラシーの本質に對する意識的或は無意識的の盲目を表明するものでもあれば、同時にまた環境の變化に對する無關心を反映するものでもある。それは過去をして現代を支配せしめようとするものだといふ點だけから見ても、未來をして現代を支配せしめようとするプロレタリア運動への反逆である。

「第十九・二十世紀の歴史は、既に大戰以前に於てすら、この頃盛に吹聴されてゐる「純粹デモクラシー」が資本主義の下に實際果して何を意味してゐるかを示した。マルクス主義者たちは常にかう主張して來た。デモクラシーが發達すればするほど、即ち「純粹化」すればするほど、階級闘争が益々赤裸々に、益々尖鋭に、益々無慈悲にその面目を發揮して行き、資本の壓迫とブルジョアジーの××とが益々純粹に表面に現はれて來た。」我々は既に、上に引用したクルクスの一文を通じて、自由・平等・友愛の叫びがあげられた本場であつたフランスの共和制下に於てさへ、その革命後僅かに半世紀を経たばかりに、ブルジョアジーが自己の地位の上に多少の脅威を感じた場合には、勞働階級に對するその壓制を如何なる程度にまで進め得たかを見た。しかも、さうした情勢は、時と共に益々進み、益々擴つた。「共和制のフランスに於



けるドレーフス事件、(一八九四年から多年間に互リユダヤ系のドレーフス大佐が人種的憎悪の犠牲となつて、國事犯、軍機漏洩の捏造された罪名で投獄された事件——引用者) 自由かつ民主的な共和國アメリカに於ける資本家たちによつて武装された雇傭軍隊の罷業労働者たちとの流血的衝突、かうした百千の似寄りの諸事實は、ブルジョアジーが如何に努力しても隠蔽し切れない眞實を即ち民主的な諸共和國に於ても實際にはブルジョアジーのテラーと××とが支配してゐて、資本の権力の足許が危ぶなかく思はれる時には何時でも公然とその姿を現はして來るといふことを曝露するものである。」

更に、ブルジョア・デモクラシーと歩調を揃へて進展した國民主義の名に於ける海外發展、その下に於ける植民地・半植民地・未開國・屬領地の民衆に對する母國の壓制——その最も露骨にして殘虐なる表現は、野蠻人に對する所謂「文明人の權利」の上に見られる——等々。しかも、かうしたすべてのことが、特に今日の帝國主義時代に於て世界的危機の一大萌芽を孕むまでに深化して來てゐることに、我々が眼前に見てゐる通りだ。

デモクラシーは、その搖籃時代に於て、性別、人種別、民族別を超越した全人類の自由・平等・友愛の雰圍氣の充ちわたるオアシスを約束した。だが、その成熟時代に於ては、それは我が今しがた見たやうな荒涼たる沙漠に世界を導いて行つたのだ。

それは、デモクラシーが、當初から將來に向つて益々増大すべく約束づけられてゐた資本主義の諸矛盾の上に打建てられたブルジョアジーの支配を如實に反映するイデオロギーとして發達したからであつた。と同時に、——或はそれ故に、——デモクラシーは當初からそれ自身身のうちにも、救ふべからざる諸矛盾を内包してゐた。

何よりも殊に、それは眼前の階級的差別を超越して一舉に全人類の自由・平等の實現に着眼した。かくてそれは、本質的に經濟的不平等を伴ふ私有財産の不侵可權を主張して、その上に政治的社會的平等を實現しようとした。従つてまた、その根本的矛盾は、當初から自由と平等との間の矛盾であつた。

まだ偽善的詭辯に慣れる邊を持たなかつた初期の純朴なデモクラットたちの或る者は、さすがにその點を、彼等の澄み透つた眼を以て見てゐた。三權分立説の主張者であつたモンテスキュー(1689—1755)も、人民主權論の驍將であつたルソーも、それ／＼に異つた立場からだが、それを見てゐた。即ち前者——モンテスキュー——の『諸法律の精神』に説かれてゐるところによれば、民主主義は立法部の過半数の意志を絶対視する一種の専制主義であり、しかもそれだけに一人の絶対××の意志に立脚するそれよりも一層強き専制主義である。それ故に、自由主義と民主主義とは相背反する二つの原理である。詳しく言へば、自由主義は自然的な不平等を



その要求の基礎とする自然の原理であり、民主主義は自然的な不平等を平等への倫理的な要求を以て解消しようとする人為的原理であるが故に、両者はまさしく相敵対するものである。従つて自由が拡大されるだけ平等が縮小され、逆に、平等が實現されるだけ自由が制限される。——とかういふのだ。

ルソーは、國家發生前の状態——自然状態——に於ける各人の自由から出發し、國家發生後に於ける各人のその自然的自由は、各人が國家意志の構成（立法）に平等の基礎に於て參加する自由——即ち政治的自由——の形態に於て確保されるものとし、そしてその自由と多數決支配の絶對性との間の矛盾を解決しようとした。無論その解決は成功してゐないし、また成功し得よう筈もない。が、それは茲で論外として、更に彼は、財産上の不平等——財産の自由追求から生れたところの——と政治的平等——政治的自由の平等行使——との不兩立を注意した。即ち彼がこの點に關して、その若き日の著作「人間不平等の起源」に於て説いてゐることはかうだ。即ち、財産の發生以來、人間社會の運命は、富者および賢者の影響下におかれた。社會的不平等は自然的な不平等より以上に大きい。小兒が老人に命令し、愚人が賢者を使役し、少數が過分の財貨に飽滿してゐる間に、饑餓たる大多數が最少限度の衣食にも事を缺いてゐる。——だがルソーは彼が住んでゐた時代から來た制約の故に、まだ財産制の揚棄には思ひも及

ばない。——財産制は最早撤廢しようもない。だが、若し人が共同社會を構成する各人に平等の政治的權利を與へようと欲するならば、人は貧者および無教養者の生活状態を向上せしめて行かねばならぬ。と、かういふのであつて、そしてこの前提から出發すれば、その結論は、彼が欲したと否とに拘らず、國家に於て多數決が支配せねばならぬといふことは、國家内に於ていつも大多數を構成してゐるところの、彼の所謂貧者と、無教養者が支配しなければならぬといふことになる。といふのは、かくしてのみ、貧者および無教養者の生活状態の向上が期待され得るからだ。

デモクラシーは一種の國家形態であり、従つて一種の支配形態である。「支配」が「平等」に立脚せしめられてあると否とを問はず、それは自由とは必ずどこかで矛盾し、衝突することを免れない。ブルジョア國家に於ても、プロレタリアート國家に於ても、一般的にいへば、その點には變はりはない。たゞ具體の場合についていへば、如何なる支配形態の下に於て如何なる種類の自由が、もしくは——こゝへ階級國家に實在する根本的事實であるところの階級差別の觀念を持込むならば——如何なる階級の自由が最も根本的に抑壓されるか問題となるだけだ。國家的支配の永遠性に立脚するデモクラットたちは、國家的支配の下に於て自由と平等との永遠の根本的調和を求めが如き徒勞を永遠に繰返す。たゞ、國家的支配を社會進化の過程



に於ける一の過渡的現象として把握するマルキシズムに於てのみ、その矛盾は解決され得る。如何なる意味に於てよもの一般的な自由は、支配形態のないところにのみ存し得る。それ故にエンゲルスは、「自由國家」といふ一の慣用的表現についていふ。「……文法的に解釋すれば、自由國家とは國家がその市民に對して自由だといふ場合に於ける國家、即ち專制的政府を持つた國家のことだ。人は國家に關するかゝるいひ方を一切やめねばならぬ。特に、最早本來の意味に於ける國家でなかつた（バリ）コミュニオン以來は。……ところで、國家は然したゞ一つの過渡的制度であつて、人は鬭争に於て、 $\times$ に於て、對敵を強力的に壓伏するために、國家を利用するものであるから、自由人民國家がどうかうのと云々するなどは、さりとて馬鹿げ切つた話だ。プロレタリアートが尙ほ國家を用ふる限り、プロレタリアートはそれを自由の利益のためにではなく、對敵を $\times$ とするために用うるのだ。で、自由（の存在）が問題たり得るや否や、國家はかゝるものとして存在しなくなるのだ。」（一八七五年五月一八、二八日ペーメルへの手紙から。）

## 九、多數決主義と少數者支配

「我々は今日知つてゐる。この理性の王國は理想化されたるブルジョアジーの王國以外のなものでもなかつたのだ。その永遠の正義はブルジョアの公正として實現され、その平等は法律の前に於けるブルジョアの平等と化成し、ブルジョアの所有權が根本的人權の一つとして宣言されたのだ。理性の國家、ルソーの社會契約は實現された。しかしそれは民主的ブルジョア共和國として實現され得たに過ぎない。第十八世紀の大思想家たちも、彼等の先行者たちと同じく、時代の制約から逸脱することは出来なかつたのだ。」（エンゲルス『空想的科學的社會主義』第一章。）

デモクラシーの概念に於ては、自由と平等との相互に矛盾するところの二つの命題が、國家意志の構成（立法）に對する各人平等の——一人一票の——基礎の上に於ける參加權すなはち「政治的自由」（註）に統一されてゐる。

（註）各人の平等なる基礎に於ける行政および司法への參加權も、立法への參加權と相合して『參政權』



の、従つて『政治的自由』の内容を構成するものとして、屢々認められてをり、『人權宣言』の、上に引用された部分の中にも、そのことが言はれてある。且つまた、或る民主的共和國に於ては屢々イニシアテイング(立法上の人民發案權) およびレフレダム(同じく立法上の人民票決權)と相並んで、リゴール(人民の票決による行政官・司法官の罷免)が實驗されて來た。更にまた、人民による諸般の官吏の選舉(大統領の選舉はその最も顯著な例)は、もつと古くから、もつと廣汎な範圍に於て、だが畢竟或る限られたる場合に、行はれて來た。それらのことが、アルジョア國家内の『政治的自由』に關聯しても考察されなければならぬのは無論である。だが、本來アモクラシーの概念に於ては、或ひは明示的に、或ひは暗黙的に、立法の行政・司法に對する、或る程度の優越が認められて來たから、『政治的自由』の論題としては、主として立法上の參加權が取上げられるのが大體慣行となつて來た。

直接民主制の下に於ては、各人はその政治的自由によつて、直接立法への參加權を持つものとされてゐる。だが、間接民主制もしくは代議制の下に於ては、各人の『政治的自由』は、平等の——一人一票の——基礎の上に於ける立法部員——代議士——選舉權によつて表象される。この場合に於ては、それ故に、普通選舉がデモクラシーの落行く先である。

ところで、直接民主制の場合に於て或る立法上の問題に關し、また間接民主制の場合に於て或る候補者の選舉に關し、立法行爲もしくは選舉行爲に參加する總員の意思が全然の一致を示さない場合には、どうなるか? さうした場合にも何等かの決定がなされなければならないと

すると、それは如何なる方法によつてあるか?

『過半数の意志の一致によつて!』もしくは『多數決によつて!』といふのが、その問題に對するデモクラシーの解決である。

『それ以外に適當の方法がないから』と、一般のデモクラットは揉み手しながら辯解する。だが、徹頭徹尾間接民主制を排撃して直接民主制を固執する人民主權説の驍將であるルソーはそれだけでは決して満足しない。彼は更に一步を進めて、過半数の意志の絕對性を肯定するため合理的基礎を探求する。そしてその結果、彼は或る立法問題に關して示された過半数の合致的意志を『普遍的意志』(volonté générale)と呼び、それを各人のてんぐ／＼ばら／＼の身勝手な意志の總和(volonté de tous)から嚴重に區別する。そして言ふ、『普遍的意志は決して全體——國家——の眞正の利害を傷ふが如き決議をするものでない』と。言ふ心は、普遍的意志は合理的意志だ、といふにある。かくて彼は、過半数の合致的意志に、絕對的拘束力を認めようとする。

多數決主義の理論で、それほど突詰めて述べられてあるものは外にない。しかもルソーは、それを直接民主制國家に結びつけて押出す。で、若し我々が近代國家の實際問題を離れて——近代國家の實現問題としては第一に直接民主制が考察のうちに取入れられさへしない、——そ



れを一個の觀念論として見るならば、彼の議論の前提が正しいものとされる限り、そこに不可抗の論理がある。

だが、我々がそれを現實問題との關聯に於て見る時、彼の前提も結論も共に誤謬に充ちたものであり、更に無意義千萬のものでもあつて、だが、その點に關しては、茲で特に精細な吟味を試みる必要もあるまい。

更に多數決主義一般を同様に現實問題との關聯に於て見ても、我々は矢張り同じ結論に到達する。否、それだけでなく、この方面に於ては、我々は更に、多數決主義は近代ブルジョア國家の下に於てデモクラシーの根本原理を徹底的に裏切つてゐる、といふ事實を注意しなければならぬ。

デモクラシーの根本原理は多數者の支配にあること、そしてデモクラシーは多數者支配への道程を多數決主義に發見したことは、上に既に述べた通りである。だが、實際上に於て、多數決主義は近代ブルジョア國家に於て、果して當初の企圖された多數者の支配に導いたか？

この問ひに對しては、如何なる言葉の答へをも必要としないであらう。何故なれば、峻嚴なる事實がそれに斷乎たる否定的の答ひを與へてゐるから。尙ほそれに加へて、我々は既に上に如何に近代ブルジョア國家内に於て、初めからブルジョアジエの支配が確立されて來たかの一

端を見た。近代ブルジョア國家は何れも立憲制の名の下に、よし形式上にもせよ、多數決主義に立脚する立法部を持つて居り(註)、そしてそこで支配的地位に在るブルジョアジエは、常に擄取者として國民中の極く少數者の圈をなしてゐる。この意味に於て、近代ブルジョア國家に於ける多數決主義の實踐は、初期のデモクラットがデモクラシーの根本原理として熱心にその實現を期待してゐた多數者の支配とは全然反對の方向へ導くといふことが出来るのである。

(註) 尤も單なる形式上の問題としても、立憲制下の多數決主義には、多くの場合、或る極めて重大なる點に於て、一の例外が見られる。即ち、成文憲法を有する最も多くの立憲國に於て、憲法の修正は、その採決に當つて出席議員数の過半数以上——たとへば出席議員数の四分の三——の賛成を必要とするものとされてゐる。これは一見恰かも、多數主義を更に強めてゐるものゝやうに見えるが、實はその反對である。この點を今例示した場合について少しく布衍すれば、出席議員数の四分の三に、たゞ一名だけ足りない多數の合意も出席議員数の四分の一にたゞ一名を超えたゞけの少數の反對意見によつて覆へされ得るからである。これは無論、本質上ブルジョアジエの利益に好都合な多數決主義を、或る場合に於て更に一層好都合なものたらしめようとする企圖から來た一個のトリックである。

かくの如く、近代ブルジョア國家内に於て、多數決主義が少數者支配を將來したのは、多數決主義一般が何等かの缺陷を包藏してゐるためであるか？

さうではない、凡そ何等から合議體の存する限り、そこでの決議が結局多數決の手段によつ



て到達されるやうになるのは、必然不可抗のこのやうに見える。少くとも、所謂「頭をたき割る代りに頭数を算へる」手続きによる多数決は、最も平和的な解決法であることは確かだ。

だとすると、當面の問題に關しては、決して多数決主義が悪いのではない。悪いのは、ブルジョア・デモクラシーに於ける多数決主義であり、今少し精確に言へば、その前提とされた論據である。

では、ブルジョア・デモクラシーに於ける多数決主義の論據といふのは何であるか？ それは既に言はれた通りに、人類平等論である。だが、誤解してはならない。人類平等論は如何なる場合にも間違つてゐるといふのではない。或る意味に於ける人類の平等は、或る意味に於ける人類の自由と同じく、我々の不可抗の内的要求でさへあり得る。だが、平等が存在してゐない處に平等が存在してゐるやうにいふ平等論、換言すれば不平等を平等だといふ平等論、——それは明かに欺瞞であり、詭辯であり、更に若しそれが善意に主張されるならば、一個のおめでたき幻想である。

ブルジョア國家内に於て各個人が平等であると、正しく言ひ得られるか？ まさしく否！レーニンの指摘をまつまでもなく、「搾取者は被搾取者とは平等であり得ない。」「背教者カウツキ

」に從つて、かゝる状態の下に於ては、また「一人一票」は「平等の表象」であり得ない。なぜなら、被搾取者の一票は、常に搾取者の強迫、誘惑、欺瞞、弾壓、等々の下におかれてゐるからである(註)。

(註) この點は、最も根本的には、立憲國家に於ける執行部の事實上の優越から來てゐる。デモクラシーの理論に於ては、立法部の優越が主張されてゐる。にも拘らず、歴史的事實は、ブルジョアジーが用ひ得るあらゆる強力な根拠であるところの執行部の實質上の優越を示して來た。このことは議會主義批判の際に更に詳説されるであらう。

第十八世紀のデモクラットたちは、彼等の立場に於て、理性にめざめた個人から出發して國家の觀念の建設に取りかゝつた。そして彼等は、個人と國家との關係を觀察するに際して階級存在を見ることが出来なかつた。それは一つには、當然にも時代の制約を超越することが出来なかつた彼等が、一方に於ては第十八世紀式に觀念の世界に遊んでゐたためであつたが、他方に於ては當時にあつてはまだ、今日我々が見てゐるやうに階級差別の活事實を見ることが不可能であつたからだ。それに、「理性にめざめた個人」や「國家の永遠性」に關する憶斷も、遙か後に進歩した社會科學の光によつて、その誤謬が立證可能になつたものでもある。それ故に彼等は、階級差別の撤廢の前提の上に立つことなしに直ちに人類の平等を唱へ、そしてその基



て到達されるやうになるのは、必然不可抗のこのやうに見える。少くとも、所謂「頭をたき割る代りに頭数を算へる」手続きによる多数決は、最も平和的な解決法であることは確かだ。

だとすると、當面の問題に關しては、決して多数決主義が悪いのではない。悪いのは、ブルジョア・デモクラシーに於ける多数決主義であり、今少し精確に言へば、その前提とされた論據である。

では、ブルジョア・デモクラシーに於ける多数決主義の論據といふのは何であるか？ それは既に言はれた通りに、人類平等論である。だが、誤解してはならない。人類平等論は如何なる場合にも間違つてゐるといふのではない。或る意味に於ける人類の平等は、或る意味に於ける人類の自由と同じく、我々の不可抗の内的要求でさへあり得る。だが、平等が存在してゐない處に平等が存在してゐるやうにいふ平等論、換言すれば不平等を平等だといふ平等論、——それは明かに欺瞞であり、詭辯であり、更に若しそれが善意に主張されるならば、一個のおめでたき幻想である。

ブルジョア國家内に於て各個人が平等であると、正しく言ひ得られるか？ まさしく否！レーニンの指摘をまつまでもなく、「搾取者は被搾取者とは平等であり得ない。」「背教者カウツキ

「」従つて、かゝる状態の下に於ては、また「一人一票」は「平等の表象」であり得ない。なぜなら、被搾取者の一票は、常に搾取者の強迫、誘惑、欺瞞、彈壓、等々の下におかれてゐるからである(註)。

(註) この點は、最も根本的には、立憲國家に於ける執行部の事實上の優越から來てゐる。アモクラシの理論に於ては、立法部の優越が主張されてゐる。にも拘らず、歴史的事實は、ブルジョアシイが用ひ得るあらゆる強力な根拠であるところの執行部の實質上の優越を示して來た。このことは議會主義批判の際に更に詳説されるであらう。

第十八世紀のデモクラットたちは、彼等の立場に於て、理性にめざめた個人から出發して國家の觀念の建設に取りかゝつた。そして彼等は、個人と國家との關係を觀察するに際して階級存在を見ることが出来なかつた。それは一つには、當然にも時代の制約を超越することが出来なかつた彼等が、一方に於ては第十八世紀式に觀念の世界に遊んでゐたためであつたが、他方に於ては當時にあつてはまだ、今日我々が見てゐるやうに階級差別の活事實を見ることが不可能であつたからだ。それに「理性にめざめた個人」や「國家の永遠性」に關する憶斷も、遙か後に進歩した社會科學の光によつて、その誤謬が立證可能になつたものでもある。それ故に彼等は、階級差別の撤廢の前提の上に立つことなしに直ちに人類の平等を唱へ、そしてその基



礎の上に多数決主義の學説を築きあげることが出来たのだ。だが、彼等の觀念論に即する學説よりは、ブルジョアジーの現實の強力の方が、より効果的であつた。そしてその下に於て、多数決主義が少数者支配を將來するに至つたのだ。「一の階級が他の階級によつて搾取される可能性のすべてが撤廢されない限りは、事實上の、現實の平等はあり得ない。」『背教者カウツキー』多数決主義に關する第十八世紀のデモクラットたちの根本的誤謬は、尙ほ歴史的にジヤスティフ・イされ得る根據を持つ。だが、一度マルクス主義的社會觀を攝取し、今日でもそれを固守してゐると稱してゐるカウツキーの徒が、帝國主義ブルジョアとの協調を合理化しようとする意圖の故に、無産階級の前途の解放の希望を、依然として、ブルジョア・デモクラシーの制度の下に於ける多数決主義の上に繋いでゐるが如く自ら吹聴してゐるのは、寧ろ悲惨だといはねばならぬ。即ちカウツキーは、その惡名噴々たる小冊子「プロレタリアートの獨裁」に於て、「社會主義はデモクラシーを抜きにして考へられない」といふ論據の一として、搾取者たちが極く少数であるに反して、被搾取者たちが大多数から成立してゐるといふ點を擧げてゐる。我々は次に、それに對するレーニンの批判を擧げて、この項を結ばう。――

「カウツキーは説く、「搾取者たちは常にたゞ人口の極く少数を構成する」(カウツキーの小冊子第十四ページ)。

それは争ふべからざる事實だ。ところで、この事實から如何なる結論が生ずるか？ 人はマルクス主義者として社會主義者として議論することが出来る。その場合には人は被搾取者たちと搾取者たちとの間の關係を基礎におかなければならぬ。人は自由主義者として、ブルジョア・デモクラットとして議論することも出来る。その場合には人は多数者と少数者との間の關係を基礎におかねばならぬ。

若し人がマルクス主義者として議論するならば、人はかういはねばならぬ。即ち、搾取者たちは國家(デモクラシー)について、換言すれば國家形態についていふのだ)を不可避免的に、彼等の、すなはち搾取者たちの被搾取者たちに對する階級支配の武器に轉換する。それ故に民主國家といへどもまた、被搾取者たちを支配する搾取者たちの存する限り、不可避的に搾取者たちのデモクラシーとして存續するであらう。被搾取者たちの國家は根本的にかゝる國家から區別されねばならぬ。即ち搾取者たちを××するための被搾取者たちのデモクラシーであらねばならぬ。一階級への抑壓は、しかし、この階級の不平等を、「デモクラシー」からのこの階級の排除を意味する。

若し人が自由主義者として議論するならば、人はかういはねばならぬ。即ち、多数者が決定し、少数者がそれに従ふ。その通りにしないものは罰せられる。それだけのことだ。一般



的には國家の階級的性質のことを、特殊的には「純粹デモクラシー」のことを云々するのは餘計なことだ。それは問題には無關係だ。といふのは、多數は多數、少數は少數だからだ。一ボンドの肉は一ボンドの肉だ、それでお仕舞ひだ。

恰度さういふ風にカウツキーは議論する。〔背教者カウツキー。〕

一ボンドの肉は一ボンドの肉だ。搾取者の一票も、被搾取者の一票も、一票は一票だといふのが、社會主義者カウツキーの論法である。(この項完)

### 編三第



## ★ブルジョア社會の諸断面



## 英雄的階級・階級的英雄

—

英雄的階級・階級的英雄。——

これは、無産階級運動の理論と實踐との上に於ても、明かに一の當面の問題であり得る。否、それは問題としては、既に解決されてゐる問題だとさへ言へる。

言葉の正しき意味に於ける無産階級運動は、餘りにも當然に所謂「英雄主義」の否定に立脚してゐる。マルクスは既に「エニフェスト」の中に於て「すべての従來の諸運動は少数者による、少数者の利益のための運動であつた。プロレタリア運動は不可測の大多數の利益のためにされる不可測の大多數の自主的運動である」と宣言してゐる。

マルクスのこの一句の近代史的意義は無限に廣大であり深長であるが、それは直接的には、無論、近代プロレタリアートの解放は近代プロレタリアートの物質的生活諸條件の必然的歸趨だといふ事實に關聯して言はれてゐるものである。この一見平明なる真理こそは、近代プロレタリアート解放運動の唯一の正しき解釋であり、若しくは少くとも、その正しき解釋を可能な



らしめる誰一の出發點である。

この意味に於ける無産階級運動は、いふまでもなく、或る特殊の個人もしくは集團の利益のために行はれるものでもなければ、猶ほ更ら單純に或る特定の個人もしくは集團の功名心乃至權力意志の達成のために行はれるものではない。従つてそれは、たとへば、或る超人的存在の靈的偉力に魅せられたる大衆の盲目的な追隨的行動をその成立要素とするといふが如き英雄主義的解釋を絶対に容れ得るものではない。否、それはどこまでも、飽くまで冷靜透徹に獨自の階級的利害に眼ざめた大衆の創意を反映する自主的大衆組織による自主的大衆行動を以てその必須なる前提條件とするものである。無産階級の解放は無産階級それ自體の手によつてなされるべきものであり、またなされつゝあるのだ。

かくて「不可測の大多數者の利益のためになされる不可測の大多數者の自主的運動」の一句は、それだけで無産階級運動に於ける英雄主義の否定——それは英雄主義一般の否定に含まれてゐるものではあるが——を示唆してゐるものであつて、更に我々が「ブリュメール十八日」のマルクスの自序の末尾に見出される次の一句をそれに對照するとき、我々は單に、その問題に關する彼の決定的な明答を得たことを感じるばかりでなく、同時に英雄主義否定の重要な社會的意義をも極めて明快に知ることが出来るのだ。——

「最後に私は、本書が所謂ツエーザリスムス〔古代ローマの皇帝を意味するツエーザー——シーザーといふ言葉から派生したもので、英雄主義を意味する。——引用者〕といふが如き、今日特にドイツ國內に流布してゐる學派的套語の排除のために役立つであらうことを希望する。かゝる皮層的な歴史的類比の下に、人は肝腎の根本事實を、すなはち古代ローマに於ては階級闘争がただ一の特權を帯びた少數者たちの圈に、換言すれば自由富民と自由貧民との間に、行はれて居つたにすぎなかつたのであり、これに反して全人口中の廣汎なる生産大衆に當る奴隸たちは、さうした闘争に對してたゞ受働的な踏臺となつたにすぎなかつたのだといふ、この根本事實を忘れる。人はシスモンディが「ローマのプロレタリアートは社會の犠牲に於て生活してゐるが、これに反して近代の社會はプロレタリアートの犠牲に於て生活してゐる」と言つた、この意味深長な言葉を忘れる。古代の階級闘争と近代のそれとの物質的・經濟的諸條件の間に横はる極度に全般的な相違の下に、それ〴〵の政治的諸派生物の間には〔今日の〕カンターベリー寺院の大僧正と〔大昔の〕祭祀長サムエル〔舊約聖書中の人物。——引用者〕との間以上に相互に共通したものがあり得ないのである。」



## 二

かくの如く、正しき意味に於ける無産階級運動は、プロレタリアートの階級的イデオロギーの基底に横はつてゐる唯物史觀の立場から、社會事象の英雄主義的解釋を、無條件的に否定する。だが、それは無論英雄的階級および階級的英雄の概念の現實性をも否定するといふ意味に於ては、ない。それどころでなく、近代社會に於ける一個の顯著なる現實の傾向として、殊に資本主義が益々強烈なる反動的特徴を晒し出すやうになつて來た今日、無産階級運動の全分野の上に、一方に於て所謂プロレタリアの英雄への呼掛けの聲が益々高まりつゝあると同時に、他方それと相應してプロレタリアの英雄が踵を接して頻々として輩出し、否、全體としてのプロレタリアートそのものが、英雄的階級としての面目を輝かしく發揮しつゝ登場してゐるのが、眼前の事實として見られるやうになつて來てゐる。

それにも拘らず、この事實は、ブルジョアジの——そして一層大なる程度にブテイ・ブルジョアジの——のイデオロギーとしての英雄主義とは、極微量の關係をも持つてゐないのだ。

## 三

如何なる外形に於て侷められるものにもせよ、英雄主義は本來、その實質に於て社會事象の解釋方法上の神祕主義から離れることは出来ない。如何なる場合に於ても、それはその出發點に於て、個人としての英雄に、多かれ少かれ、超人的資性を賦與する。それは多かれ少かれ、個人としての英雄に、社會事象の流れの方向を決定する力を、歴史を創る力をさへも、歸屬せしめる。それに於ては、戦争、平和、文物、制度、等々、これらの一切の社會事象が、究極に於て大軍人、大政治家、大立法者、大藝術家、大宗教家、等々、一言にいへばそれらの分野に於ける不世出の英雄たちからの、凡俗大衆への贈物とされる。偉大なる「創造的想像」と果斷なる實行力、壯烈なる権力意志、比倫を絶する洞察力、統率力、組織力、限りなく深き人類愛、もしくは社會奉仕的精神、等々、……かうしたものが、それらの英雄たちのそれらの諸屬性として算へ立てられる。

根本に於てかうした本質をもつ英雄主義が、最近に及んで、再び各方面に擡頭したことは、何人の眼にも著るしく映する一事實である。尤も最近の英雄主義は屢々、或は社會學的に或は哲學的に聞えるやうな様々の物々しき術語や表現を以て、多分の莊嚴味や幽玄味やを、時



としては一擲の近代的感覺をさへも添へるやうに粉飾されてゐる。だが頓着は要らぬ。一度その皮を剥いて見よ。そこには寸分違はず、たゞの英雄主義——古來永遠に繰返し繰返し鉦太鼓で宣傳されて來た生地のままの英雄主義——が丸出しに現はれて來る。莊嚴味や幽玄味や、固より神祕主義には附きものである。さらに近代的感覺の點出は、『新』の字のつく神祕主義には不可缺である。

## 四

かく新装されての英雄主義の體頭は、——もしくは支配階級との意識的乃至無意識的默契のもとになされてゐるその手廣き宣傳は、當面確實に一の社會的基礎を持つてゐる。×××××の危機を前にして、金融ブルジョアジーの大規模の統制下に産業合理化が刻々巨歩を進めつゝあるとき、強烈なる反動政治の咎と底知れぬ生活苦とに喘ぐ勞働者農民を始めとし、刻一刻益々奴隸化されて行く廣汎なる被壓迫大衆をして、しばしその苦痛を忘れしめ、鬱憤を散ぜしめ、さらに多彩的幻覺に陶醉せしめさへすることによつて階級闘争の波の高まりを喰止めするための阿片の役割を演ずる宗教、——それも今日殆ど大衆の把握力を失ひかゝつてゐる徽の生えかゝつた瀕死の宗教ではなく、或る意味に於て新鮮な時代色を帯びた新宗教、——それが、

今や次第に新形態の絶対主義政治の確立に急ぎつゝある支配階級によつて、益々必要視されるやうになつて來てゐるのだ。かくして英雄主義が、特に新装された英雄主義が、或は大衆文藝の形に於て、或は「新人」たちの手による新評論の形に於て、等々、ともかく或る程度にその時代錯誤的な實質を糊塗して、舞臺の上を「高速度」に縦横潤歩する趨勢が促進されて來たのではないか！

## 五

新装の英雄主義を振廻はす「新人」たちの約一半は、何と親切にも、唯物史觀が片面的眞理を道破してゐるものであることを讓歩的に認識こそはするが、しかし結局は残りの約一半と聲を合はせて、全體として見た唯物史觀の淺薄性を言ひ立てる。かうした批評に答へるのは、今はその場合でなく、またさうしてゐる勇氣も筆者には出て來ないが、彼等が唯物史觀を淺薄だといふのは、結局は唯物史觀が、彼等の議論の深味・莊嚴味・幽玄味、等々の究極の源泉である神祕主義を無慈悲に爆破した蠻的行爲に對する彼等の美學的公憤ともいふべき一種のセンチメンタリズムに基くことが尠くないのだ。さうしたセンチメンタリズムは、茲では問題外とされなければならないが、たゞ彼等が、さうした時代の錆に色づけられてゐる神祕主義の徹



底的爆破それ自體の上に、より大なる、すばらしき新時代的な美學的價値を認めることさへが出来ないでゐるところに、彼等の主張の本來の内的動機の反動的性質が、それを隠蔽しようがための彼等の大なる努力の下から、まさしくと赤裸々に暴露されてゐるのが見られるのである。

彼等の或るものは更らに、一般的にマルキシズムの陣營に於て唯物史觀が固執されてゐるにも拘らず、マルクス、レーニンの徒が神化されてゐることを得々と指摘して、そしてそれが英雄主義への無意識的降服でもあるかのやうに囁やし立てる。それは無知から出た世迷ひ言か、恥を知らざるデマゴギーかであると、一口に言つて済ませることであるが、しかしそれは我々に、當面の問題に關して、次の或る意味に於て重要な一事を顧みさせる契機となる。

マルクスやレーニンの名が、彼等の無産階級解放運動への歴史的貢獻によつて、マルキシズムの陣營に於て絶大の敬愛を以て記念されてゐることは事實であり、また餘りにも當然な事實でもある。だが、それは無論、彼等の名が、如何なる程度にも神化されてゐるといふのと同意義に當るものではない。エンゲルスはその『フオイエルバッハ論』に於て「マルクスは一個の天才であり、我々は高々秀才である」といつてゐるが、しかし彼は同時に同書に於て、ヘーゲルからフオイエルバッハへ、更にフオイエルバッハからマルクスへの思想系統的發展過程を述

べて、マルクスの存在理由を學說史的に明かにしてゐるのだ。のみならず、エンゲルスは、マルクスのなきがらの埋葬に際しての感激の高潮に於てなした演説に於てさへも、マルクスが全生涯を通じて近代プロレタリアートの解放の事業に協力し、プロレタリアートにその獨自の地位およびその諸要求、並にその解放の諸條件に對する意識を與へたことを切言したが、しかもマルクスがそれ以上の何物かであるといふやうなことを示唆はしなかつた。この意味に於て、マルクスは、産業革命以後の資本主義社會の必然的産物としてのプロレタリアートの間に於て解放運動に協方した革命家であり、その階級的戰士であり、階級的英雄でこそあつたが、その階級以外の何處からかやつて來て、その階級を提けて自己の意志を成遂けたやうな超人的意味の英雄ではなかつた。レーニンおよびその他の幾多の×××××たちについても、同じことがいひ得られるのである。

マルクス學の世界的權威であるリアザノフは、その『カール・マルクスおよびフリードリッヒ・エンゲルス』の卷末の或る個處に於て、父として及び夫としての老マルクスの人間味の異常なる深さを言つた後に、次の如くつけ足してゐる。

「俗物連や未熟な革命家たちは、マルクスの生涯の最後の數ページを讀むとき、驚き訝かしんで當惑する。一個の革命が革命といふこと以外の諸事物に彼の精力の一部をさへも捧げる



のは、たしかに善いことではない。屢々たゞ一時間だけの勇士であるところの人々によれば、一個の眞の革命家は、二六時中、彼の生涯の各瞬間を通じて、眼を見張つてゐなければならぬ。彼は人間的諸感情を超越した革命家的堅石で固められなければならない、とかういふのだ。

人は人間的に判断しなければならぬ。我々が大なる畏敬を以て仰ぎ見る人々が、畢竟我々と同じ人間であつて、唯ホンの少しばかり我々よりも賢明で、より多く教養を持つてゐて、そして革命のためにより多くの有用な人物であるにすぎないことを我々が考へるとき、我々の心に喜びがある。たゞ舊臭いイカサマものゝ戯曲に於てのみこそ、人々は英雄として描寫された。彼等が歩めば山々が常に震へた。彼が足踏みすれば大地が常に裂けた。彼等は英雄たるにふさはしく飲み食ひさへした。』

更に、レーニンと共に多年の雨と嵐を潜り抜けて現に革命後のロシア共和国の屋臺骨を背負つてゐるスターリンは、人間レーニンについて、次の如く述べてゐる。

「一九〇五年十二月に、私はタンメルフォルス(フィンランド)に於けるボルシエヴィキ大會で、始めてレーニント會見した。私はわが黨の意氣軒昂たる驚を、一個の偉大な、單に政治家として偉大だといふだけでなしに、外貌から見てもまた偉大な人間として見るであらうこ

とを期待してゐた。といふのは、私の想像には、レーニンが、威風あたりを壓する巨軀の人として映じてゐたからである。ところで私が、中肉中脊の、如何なる點からも、文字通りに如何なる點からも、常人と何等變りのない、一個の全く平凡な人間を見たときに、私は如何に失望したことか。……「偉人」たちが時間を守らないのは普通の慣例だ。それによつて會衆が心臓の鼓動を以て彼等の臨場を待ち、その姿が現はれるや、一同の緊張した氣持の上に、荒らかな「シッ！ シッ！ 靜かに！ 來たぞ！」によつて、豁然と息抜きが途が開かれるのだ。かゝる事態は私には全然冗事だとは思へなかつた。それは勿體をつけて尊敬心を注入するからである。で、レーニンが他の代議員たちより先に會場に來てゐて、そして、とある片隅で會議への單純な代議員たちと全く平凡な會話をやつてゐるのを私が見たとき、私は再び如何に失望したことか。私にはその時、その事が特定の必要な規則の違反のやうに思へたことを、私は敢て告白する。

程經て私は始めて、レーニンのこの純朴さと氣取らなさこそは、人中で眼立たないやうに、もしくは少くとも如何なる場合にも自己を押ツ冠ぶせたり、自己の高い地位を強調したりすることのないやうにするこの用意こそは、レーニンの最長所の一面であり、新しき大衆の、すなはち人類の最下層の「どん底」の單純な、そして普通な大衆の新しき指導者の一特徴で



あることを悟るに至つた。』  
人間マルクス、人間レーニンについて、かうしたことを學び知るとき、我々は別に不思議には感じない。それでいゝのだと思ふ。否、それではなければならないのだ。それでこそ、新興プロレタリアートの典型的な階級的戦士たり、階級的英雄たるに不可欠な人間の素地が彼等の各に具つてゐるのだ。

## 六

前に述べた通り、言葉の正しき意味に於ける無産階級運動の理論と實踐とは、英雄主義の否定から出發する。それは當然のこととして、現實の社會的諸關係を超越した天與の使命を帯びたやうな特殊の個人若しくは集團に、社會事象の流れを決定したり歴史を創つたりする超人的な靈的偉力が賦與されてゐるといふやうなことを、明示的もしくは暗黙的にその前提条件とする英雄主義的立場を、無條件的に拒否する。それは、社會事象の流れを決定したり歴史を創つたりする現實の力は天與のものでもなければ、また或る特殊の天才的な個人もしくは集團の勝手な創意から出るものでもなくて、それは實に歴史的に現實の社會的生產諸關係の中から發生するものであるとの、飽くまで眞面目な認識から出發する。そして、若し、さうした現實の力

を持つものが英雄だといふ風に「英雄」の意味を限定するならば、——この言葉の意味のかゝる限定は可能でもあり、合理的でもあり、従つて理論的に許されるべきことでもある、——それは先づ、その意味に於ける英雄を、特定の個人に於て見ずして、それを特定の階級に於て見る。そして、或る所與の時點に於て何れの階級がそれであるかは、嚴密に歴史的に決定されるものと見る。曾て或る時期に於てブルジョアジーがそれであつたやうに、現代に於てはプロレタリアートがそれである。プロレタリアートは、現代に於ける英雄的階級である。

## 七

上來の論述から推論し得られるであらう通りに、或る特定の階級が或る特定の時點に於て英雄的階級として持つところの、社會事象の流れを決定し歴史を創るその現實の力は、その階級が當面の社會的生產過程に於て現實に占めてゐる地位から、従つてその現實の生活諸條件から出て來るものである。そして、さうした現實の力が向けられる中心的目標もまた、無論歴史的に決定される。かくして、その階級が自己の前に置くところの中心的目標への到達のために遂行する事業の總和は、その階級の歴史的使命と正當に呼ばれ得るのである。

或る特定の階級が英雄的階級として歴史の舞臺に登場するとき、必然にその階級の内部に於



て多かれ少かれ、階級的英雄の出現が要求され、またその要求と相呼應して、その階級の内部から多かれ少かれ階級的英雄が出現する。英雄的階級は階級的英雄をつくる。階級的英雄とは、一言にいへば、その階級の歴史的使命の重大性の意識の下に、その各自に宛てがはれた部署に於て、全階級の利益のために一身上の安危を無視して、各自の任務を献身的につくす階級的戰士を指していふのである。かゝる階級的英雄は、英雄的階級にあつては、指導者たちの間にも大衆の間にも見出されなければならないし、また實際上多かれ少かれ見出される。かゝる階級的英雄の存在なくしては、當該階級の××××××××などといふことはあり得ない。

## 八

近世紀初頭の西ヨーロッパ諸國に於て、中世紀以來の絕對主義的支配を維持してゐた封建制度が歴史の車輪の進轉を止めるやうになつたまでに固定化してしまつた時、それに向つて敢然として挑戦してそれを顛覆し、遂に近代資本主義の時代を導き入れることに成功したものは、實に當時の新興階級としてのブルジョアジイであつた。まことに當時のブルジョアジイは、英雄的階級として素晴らしくも堂々たる活躍ぶりを示したのであつた。そしてそこにまた、ブルジョアジイの内部に於て如何に多くの階級的英雄が雲の如く簇り起つたか！ 第十七世紀のイ

ギリスのブルジョア革命に關聯して想起されるバンブトンや、ビムや、クロンウエルや、エリオットや、等々々々。また、それから一世紀を隔てた第十八世紀末のフランスの大革命を、或は華やかに、或は凄壯に彩つたマラーヤ、ダントンや、ロベスピエールや、サン・ジユストや、等々々。更にまた、行動の世界を離れてイデオロギーの世界を覗いても、イギリスのミルトンホップス、ロツク、フランスのヴォルテール、モンテスキュー、ルソー、等々々。かうした中天に燦々と輝いてゐた巨星を始めとし、處々の片隅の明滅隠顯してゐた小さき星の群れに至るまで、算へ立てれば限りがない。彼等はそれ／＼に、或は芳ばしき、或は芳ばしからざる名を帯びてゐるが、そしてそれ／＼の間に於て多少違つた意味に於てはあつたが、根本に於ては齊しく皆、新興ブルジョアジイの階級的英雄であつたのだ。

もとより彼等は、ブルジョアジイの階級の代表者としてよりは、寧ろ人類の代表者としての如き氣魄を以て封建的専制支配の打倒に立向つた。さうしたことが可能でもあり、また自然的なことにも見えたのは、從來第十九世紀に入つてから、歴史的に第四階級としてのプロレタリアートを構成するやうになるべく運命づけられてゐた社會の最下層の「不可測の大多數者」が、當時にあつてはまだ、明確に一個の獨自の階級としての存立を持つに至つてゐないで、寧ろ新興勢力として急速に羽翼を伸ばしつゝあつたブルジョアジイと一體となつて第三階級を形



づくつてゐたものと、漠然と考へられてゐたからである。新興ブルジョアジイは、かゝる最下層の大衆の力を糾合し、自らそれを統率し、その先頭に至つて封建主義の牙城に迫つたのだ。そこで彼等が大衆を奮ひ起したしめるべく叫んだスローガンは、『自由・平等・友愛』であつた。かゝるスローガンは、中世紀式の封建主義的専制支配の傳統的精神に鋭く對立するものとして、一方に於ては極端に個人主義的に響いたと同時に、他方に於ては極端に人類的にも響いた。『自由・平等・友愛』それは『第十八世紀の精神』の表現であつたと同時に、デモクラシー哲學の基調でもあつた。それは如何にも、階級的には響かなかつた。だが究極に於ては、『第十八世紀の精神』は實はブルジョアジイの階級的精神であり、デモクラシーは實にブルジョアジイの階級的哲學であり、『自由・平等・友愛』とは畢竟ブルジョアジイの自由・平等・友愛以外の何物でもなかつた。といふことが、永き歲月の経過と共に、次第に明瞭に認知されるやうになつた。

全社會の最下層に追ひやられてゐた大衆が、まだプロレタリアートとしての独自の階級的存立を持たなかつた間は、若しくは彼等がまだその階級的存立の事實を意識しなかつた間は、ブルジョアジイは尙ほ引續いて、その公然の發言と行動とを人類的に粉飾することが出来た。彼等は彼等の『自由・平等・友愛』の主張を階級的必要物としてではなく、人類的結合の原理として

押出すことが出来た。だが、さうした手品も、畢竟は永久に續かう筈はなかつた。破綻は必然に、早晚來なければならなかつた。そして間もなく來た。

## 九

さうした破綻は、ブルジョアジイの勢力昂進につれて段々と社會の最下層に沈淪して行つた不可測の大衆が、漸次プロレタリアートとしての独自の階級的存立を多かれ少かれ明確に持つやうになり、且つその事實を多かれ少かれ明確に意識するやうになつてから、遂に具體的に現はれるに至つた。第十九世紀半ばのフランスは、この點に於ても再び最典も型的な實例を示した。

新興ブルジョアジイが、一時大衆の先頭に立つて『自由・平等・友愛』のスローガンの下に、封建的専制支配の顛覆といふそれ自身の一大歴史的使命を遂行しつゝあつた間は、彼等は完全に英雄的階級としての實質を具へてゐた。だが、彼等が一旦その事業を完成したと同時に、彼等が自己の手で倒した封建主義の後繼者としての資本主義を導き入れて、そして自らその擁護者として立つたに及んで、彼等は最早、歴史を創る階級ではなくなつてゐた。否、逆に彼等は最早、『秩序』の維持の名の下に、歴史の車輪を阻止する妨礙物となつてゐた。しかもそれは、



新生のプロレタリアートの犠牲に於てあつた。新生のプロレタリアートは、その新たな生活諸條件から、必然に××××××といふ××××××の負擔者として立つべく運命づけられた。即ちそれは、××××××階級として發程しつゝあつた。かくて英雄的階級の炬火は、いつしかブルジョアジーの手からプロレタリアートの手に移りつゝあつた。——だが、かゝる状態の轉換は、何れの階級にも明瞭に意識されずに、暗々裡に進行しつゝあつた。そして、今は最早支配階級として固定化して來たブルジョアジーも、外觀上だけは尙ほ依然として英雄的階級としての體面を保ちつゝ、依然として『自由・平等・友愛』のスローガンを繰返しつつ、實は新生のプロレタリアートの犠牲に於て、『秩序』の維持に没頭することが出來た。

だが、前に言つた破綻の日が遂にやつて來た。それは獨自の階級としての自己を多かれ少かれ明確に意識し始めた社會の最下層の不可測の大衆が、すなはち新生のプロレタリアートが、明かにブルジョアジーへの××階級として、『自主的運動』を開始した時に於てあつた。そしてその點に關して最も典型的な實例を提供した第十九世紀半ばのフランスに於ては、一八四八年の六月革命が、まさにその時であつた。この六月革命は、マルクスが指摘した如く、プロレタリアートの××××××としての最初のものであつたのだ。

これより先き、同じ一八四八年の二月革命に於ては、バリーのプロレタリアートは、まだ

『自由・平等・友愛』の標語に陶醉したまゝの状態に於て、急進的ブルジョアジーと協力して、ルイ・フィリップを王位から追出して、共和制を樹立し、革命後の臨時政府の下に、『自由・平等・友愛』が支配すべき新時代の到來を夢想した。だが、その夢想は忽ち破られた。即ちバリーのプロレタリアートがさうした陶醉から醒めて現實に歸つたとき、彼等は自ら臨時政府によつて絶望のドン底に追ひ詰められてゐたことを見出した。窮鼠は猫を嚙むより外に途がなかつた。彼等は英雄的に蜂起した。彼等は壯烈に戦つた。彼等は血河屍山をなして鑿殺された。ブルジョアジーの『自由・平等・友愛』は遂にその正體を暴露した。

『フラテルニテ〔友愛〕、相對立してその一が他を搾取する二つの階級間の友愛、そのフラテルニテこそ、二月の××に於て宣せられ、大文字を以てバリーの額の上に、各處の監獄の上に、各處の兵營の上に書き記るされたものだが、——その眞實の、伴らざる表現は、それは、——××、その最も恐ろしき姿態に於ける××、勞働と資本××××××であつた。この友愛が、六月二十五日の夕べ、プロレタリアートのバリーが燃えあがり、血にまみれ、號泣の聲を放ちつゝあつた一方、ブルジョアジーのバリーが華やかに照明されてゐたときに、この友愛がバリー全市の窓といふ窓に照り映えてゐたのだ。……

二月××は美事な××〔ブルジョアジーの側から見ても〕——引用者〕であり、一般的同情



を以て迎へられた××であつた。といふのは、諸對立物は共同に王制に向つて爆發したので、まだ發展する邊なく、互に調和を保ちつゝ相竝んで眠つてゐたからであり、また、それらの諸對立物の背景をなしてゐた社會鬭争はたゞ一片の浮雲の如き存立を、即ち空虚なる言葉の上の存立を得てゐるにすぎなかつたからである。六月××は醜惡なる××（ブルジョアジエの側から見ても。——引用者）であり、憎むべき××である。といふのは、空語の代りに實際の利害が入込んで来たからであり、共和國がその醜怪なる頭を覆うてゐた燦めく冠を脱ぎ棄て、本來の面目を丸出しにしたからである。

秩序！ とはギゾーの戦ひの叫びであつた。秩序！ と、カヴェニアツク（將軍）は、フランスの國民議會の、そして共和黨系のブルジョアジエの反響を叫ぶ。秩序！ と、この將軍の散彈は、プロレタリアートの肉體をつんざいた時に喰ふ。

一七八九年以來のフランスのブルジョアジエの無數の××の何れの一つもが、秩序への襲撃ではなかつた。といふのは、それはその階級の支配をそのままに残し、労働者たちの奴隷状態をそのままに残し、よし屢々その支配と奴隷状態との政治的形態を變へたにもせよ、ブルジョア秩序をその儘に存続せしめたからだ。六月××はこの秩序を襲撃した。六月××は禍ひなるかな！」（マルクス『フランに於ける階級鬭争』から。）

かくの如く、この六月××に於て、パリーのプロレタリアートは、英雄階級たるにふさはしく堂々と行動した。その陣營に於ける全大衆はまた、階級的英雄たるにふさはしく壯烈に戦つた。若きマルクスは、彼等の上に屠殺の蠻手を加へたブルジョアジエに對して燃立つ憤激の焰を吐きつゝ、その六月××に仆れた勇敢なる戰士たちを記念する一文を書いた。上に引用した断片は、それから拔萃されたものである。

だが、ブルジョアジエの陣營に於ける「六月××の英雄」は、最早漫畫化された英雄にすぎなかつた。六月××が勃發した六月二十五日の國民議會を支配した失神状態と混亂状態との交錯は、右のマルクスの一文中に活けるが如く描寫されてゐる。感傷詩人的詠歎辭のラマルテイエヌ。野獸的狂暴を以て労働者砲撃の殊勳を樹てた將軍カヴェニアツク。この二人こそは、ブルジョアジエの陣營に於ける「六月××の英雄」の、否一般に反動的ブルジョアジエの陣營内の英雄の、二つの最も普通なタイプのよき見本であらねばならぬ。

## 一〇

最近の日本に於て頻々として我々の眼に觸れる英雄論のうちには、現實の階級關係を超越して概念化されたる英雄一般の問題を取扱つてゐるものが、最も多きを占めてゐるやうである。



従つてさうした英雄論に於ては、レーニンもムツソリニーも、マルクスもトライチユケも、ビスマルクもナポレオンも、西郷隆盛もマホメットも、……すべてが皆ひとりなみに、一個の抽象的概念としての『英雄』といふ観点から、全然同一範疇に属するものと見做されて、すらりと顔を並べて押出されるのが普通である。就中レーニンとムツソリニーとは、彼等の名が持つ實際的興味も手傳つてだが、現代の英雄の世界の二つの代表者として舞台上に上ほされる場合、が最も多く見られるやうである。

かうした流儀の問題の取扱ひ方は、我々から見れば、ブテイ・ブルジョアジー——全然獨自の階級的行動意志を缺いてブルジョアジーとプロレタリアートの間を歩きつ戻りつフラク／＼彷徨うてゐるブテイ・ブルジョアジー——の社會觀から來てゐるものである。いづれにせよ、××する二つの階級の指導者たちを拉し來つて、それらを二個の『英雄』として同一水準の上に置いて眺めるが如きことは、我々から見れば、せい／＼一片の概念の遊戯としか受取れない無意義の閑事業である。

レーニンに關しては、私は既に、彼がプロレタリア的英雄として持つた豊かな人間味の一面に觸れておいたから、茲では重ねて何も言はないことにして、次にはたゞ、小市民的英雄論者たちによつて屢々彼の相棒として引合ひに出されるムツソリニーの場合だけについて、短き

一言を書きつけておかう。

私は既に、ブルジョアジーが會て英雄的階級であつた時代には多くの階級的英雄を輩出せしめたが、そのブルジョアジーが次第に反動的傾向を取るやうになつてからは、その陣營内には漫畫化された英雄以上の何物も見られなくなつたことを言つた。殊にブルジョアジーの支配が完全に頽廢期に入つてからは、猶更らさうである。ムツソリニーの如き、背後の金融ブルジョアジーの絲に繰られてプロレタリアートの自主的階級運動を阻止する任務を遂行してゐる、憐むべき奴隸的人物が新時代の英雄ならば、我々が屢々街頭で遭遇する暴力團——矢張り金融ブルジョアジーに子飼ひにされて時々社會運動家に危害を加へるやうなことを職業にしてゐるところの——の如きは、少くとも新時代の英雄の卵ぐらゐには評價が出来るであらう。彼が金融資本の支配の確保のために、新形態の絶對主義政治の實現の途上に於て、強力の手段による徹底的彈壓を恣まゝにしてゐる點から見て、彼を『英雄』と呼ぶのは、『英雄』といふ言葉の意味を甚だしく歪めてゝなくては出来ない藝當である。少くともそれは、一八四八年のカヴェニアック將軍を『六月××の英雄』と呼ぶのと似寄りの意味に於てゝあらねばならぬ。もしくは更にそれは、別の一例を取れば、マルクスがナポレオン一世の第二版——しかも誤植だらけの縮刷廉價版といふほどの心持で——だと冷やかしたルイ・ボナバルトを『一八五一年——例の



クーデターはこの年の十二月に行はれた——の英雄」と呼ぶのと似寄りの意味に於てあらねばならぬ。さういふ意味でならば、我々のおなじみの田中義一大將の如きも、その×××弾壓の功勞の故に、「一九二八—一九二九年の日本の英雄」と呼ばれる日も、やがては來るであらう。

## 一一

英雄的階級と階級的英雄に關する論究は、以上でまだ漸く序論に入つたばかりである。だが私は、今回はこの邊で一應擱筆せねばならぬ。その前にしかし、次の二三言だけは一應の結論として、是非とも附加しておかねばならぬ。

プロレタリアートは現代の英雄的階級である。それが歴史を創る現實の力は、その生活諸條件から來るものであるが、しかし當面緊切の一問題として今少し具體的にいへば、それは主體的にはその闘争力に關聯してゐるものであり、客觀的にはその闘争組織——主として組合および黨の——に關聯してゐるものである。無論、これらの主體的條件と客觀的條件とは、相互的に緊密に關聯を保つ。即ち、他に特別の故障なき限り、闘争力が増進すればするほど闘争組織は擴充しその逆もまた眞である。しかも階級闘争の尖鋭化につれて、支配階級は益々執拗にその闘争力を滅殺し、その闘争組織を破壊することに全力を傾倒するやうになる。かゝる

状態の下に於て、英雄的階級としてのプロレタリアートは、何よりも殊に、その闘争力と闘争組織との擁護のためにも、階級的英雄を益々痛烈に要求するやうになる。

今や、日本のプロレタリアートは、×××××の危機に直面して、資本家地主の政府の益強化する彈壓と戦ひ、白色恐怖と戦ひ、社會民主々義者の策謀と戦はなければならないと同時に、更に自己の陣營内に動もすれば起り勝ちな日和見主義の傾向とも戦はねばならぬ。しかもかゝる危機的瞬間に於て、そのあらゆる闘争組織が、未曾有の程度に破壊されてゐるといふことも事實である。今こそそれは、苦難の絶頂にあるといふのも、決して過言ではない。もとより我々は斷じて失望する必要を持たないが、然しかゝる状態に應じて我々の従前の努力を倍加することを怠つてはならぬ。殊に我々はこの際、階級的英雄たるにふさはしく行動すること、我々の陣營内の指導者たちにも大衆にも熱烈に要求されてゐることを忘れてはならぬ。そして我々が階級的英雄たるにふさはしく行動するといふことは、當面何よりも先づ、プロレタリアートの陣營の闘争力の増進と闘争組織の恢復および擴充のために全力的に盡瘁することから始められなければならないのである。(昭和四年八月)



## 社會民主々義者の夢を一笑に附して

今日の狀勢の下に於て「無産黨が内閣を組織したら——」などといふ問題を向きになつて考へるのは、社會民主々義者の夢です。夢にしても、はかない夢です。夢の中の夢です。

さうです！一體「無産黨」といふ名を帯びてゐても、右翼や中間派の「無産黨」は、果して無産階級を代表してゐる政黨といへるでせうか！無論それらの「無産黨」は、無産大衆を地盤として立つてはゐます。即ち、それらの無産黨を構成してゐるものは、労働者、農民、無産市民です。この點、左翼政黨たるわが労働黨など、少しも變はりはありません。従つて、右翼および中間派の無産黨大衆諸君も、わが労働黨の黨員大衆と同様に、現在の金解禁後の財界に直面して、支配階級の産業合理化政策の下に、共通の悩みを悩み、共通の要求を持つてゐます。頻々たる解雇、堪へがたき賃銀値下げ、無法な小作料、高い家賃、安い俸給、惡税重税、等々に對して飽くまで果敢に闘争しようと思つてゐる點については、各黨の黨員大衆の間に甲乙はありません。そこに各黨員大衆間に共同闘争が益々盛に行はれ得る素地があります。それが所謂「下からの共同闘争」です。我々はそこに、無産階級の戦線統一の希望をかけてゐます。

す。

だが、右翼および中間派の無産黨——いはゆる社會民主々義政黨——の幹部諸君は、その指導下の黨員大衆の、さうした要求、さうした闘争意志を裏切つて、帝國主義ブルジョアに迎合してゐます。資本家から選挙費用を貢がせた事が問題となつて分裂した無産黨すらありました。さうした無産黨——さうした社會民主々義政黨の幹部諸君は濱口内閣が「緊縮豫算」の名で出した十六億二百萬圓の尨大な豫算——實質上帝國主義戦争準備の爲の軍事豫算——をさへ支持しようとしてゐます。又戰闘的労働者の要求を徹底的に窒息せしめようとする反動的の労働組合法案に對しても、「大體賛成だ！」と言つてゐます。これは明かに、骨の髄まで金融資本家の代辯者である民政黨への合流です。かういふ點から見ても、社會民主々義政黨が改良主義一點張りの政黨だと言へたのは、最早一ト昔前のことで、今は完全に帝國主義ブルジョアの協調者になり切つてゐるのです。短い言葉でいへば、社會民主々義政黨は、現段階では「帝國主義的」になつてゐるのです。

最近右翼無産黨の上に分裂騒ぎが頻々と擴大して行く傾向が見えて來てゐるのは、その黨員大衆間の意識の向上の過程を指標してゐるものでなければなりません。そして我々は確信してゐます。かゝる分裂騒ぎも、かくて畢竟無産階級戦線統一への、徐々とした、だが確實な歩み



寄りに外ならないのだ、と。大衆こそ絶対に信頼すべきです。大衆の眼ざめは必至的です。歴史を創造するものは、大衆の力以外にはありません。それが信じられなくては、無産階級解放運動も何もあつたものではありません。

それを信じていることが出来ない無産黨の指導者たちが、今日の狀勢の下に於ても「無産黨が内閣を組織したら——」などと空想するのです。イギリスのマクドナルドの政府が、彼等の究極の理想です。そして、そこへ行きつくまでの道程として、彼等は彼等を交へた聯立内閣をさへ夢みてゐます。資本家地主の政黨と仲よく手を列ねて内閣を作らうといふのです。彼等はその可能性が近づきつゝあると考へてゐるのです。それは或る意味に於て、だん／＼近づきつゝあります。そしてそれは同時に、彼等がいよ／＼大衆から離れて行く關門となるでせう。

彼等は尙ほ當分の間は、さうした希望を高く掲げることによつて、意識の低い大衆を欺瞞しつゞけるでせう。だが、大衆は何時までも欺瞞し了うせるものではありません。重ねていふ、大衆のめざめは必至的です。大衆こそ最も信頼すべき最後の審判者です。

かゝる社會民主主義者の夢がいつか爆然として破れるときこそ、歴史の創造者としての大衆が正しき進路を明かに見得る時です。我々はさうした社會民主主義の夢を一笑に附して、あくまで資本家地主に對して非妥協的態度を以て猛進し、議會闘争を我々の大衆的日常闘争の一尖

端として、そこに火の出るやうな暴露戦線を敷き、そこに大衆の要求を爆發せしめるでせう。

「無産黨が内閣を組織したら——」といふやうな考へは、我々の脳裡には、毛頭上ほつて来る筈はありません。ブラウニングの「矢はれたリーダー」に描かれある社會運動家が見たければどうぞ、よそを探がして下さい。



## 金解禁と議會解散問題の交錯

濱口内閣出現以來「解散々々」の呼聲が、絶間なく政治市場に聞かれた。組閣後二十四時間以内に於て既に、ブルジョア新聞の多数は「速かに議會を解散して信を國民に問へ」といつたやうな、ステレオ・タイプにしたやうな註文やら勸告やらを、憲政常道論のレッテルで粉飾して賣出した。そして、かうした政治上のイデオロギーに關しては完全にブルジョア新聞の影響カの下にある「公衆」は、早速それを引取つて、ひたすら流行に遅れまいと競つてゐたものゝ如くであつた。

理由として擧げられてゐたものは、今更ら事々しく追懐するまでもなく、極めて簡単な一本筋のものであり、また卒直に形式的なものでもあつた。たとへば、――

田中内閣の倒潰は、不戰條約問題や滿洲某重大事件を契機として、同内閣と樞密院および軍部との間の衝突によつて惹起されたものであり、従つて濱口内閣の出現は、その與黨である民政黨の力で戦ひ取つたものではない。かくして、それは單に、元老西園寺老公もこの頃では、

無條件的に承認するやうになつて來てゐる政黨内閣主義の確定の下に起つた一個の偶然の事象にすぎないものであつて、國民の信任が何等かの形でその上に表現されてゐるものとはいへない。それに民政黨は、當面明かに衆議院に於ける少數黨として、「偽造の多數」でも何でも兎に角形式上は立派に多數を擁してゐる正面の大敵政友會に對してゐるのだから、このまゝでは次の議會が切抜けられないに決まつてゐる。そこで、もし次の議會がどうせ解散になるものとするれば、濱口内閣は今このうちに即時解散を斷行して、それに續く總選舉を通じて表現されるであらうところの國民の信認の上に立つて、更始一新の政治を行ふべきだ。等々。

つゞめて言へば、かういふことが、解散論の最も根本的な要點として、盛にブルジョア諸新聞の上に書き立てられたものであつた。だが、かうした議論は、畢竟するに、單純に一應の表面上の主張として見られるべきものにすぎなかつたのである。少くとも我々は、もつと根本的な一事實として、田中内閣に對する當時の一般的な不評判が、さうした一切の主張の上によつてまざと反映されてゐたといふ一事實を無視することが出来ない。また無視してはならない。

今更ら死屍に鞭うつも詮ないことだが、それにしても正當に「反動内閣」の名を以て呼ばれてゐた田中内閣の暴政振りには、いまだに一般民衆の日常の話題に残つてゐるものである。三年前の金融恐慌の眞ッ唯中に産まれ出た同内閣は、その二個年餘の在期間を通じて、殺伐な封建



的專制支配の再來を思はせるやうな、彈壓一點張りの警察政治を餘すところなく實行した。そして、その下に廣汎なる範圍に互る大衆の生活は、陰慘極まる暗雲に鎖されてたかの觀を呈したものであつた。それ故に、如何なる原因からにもせよ、その田中内閣が一朝忽然として倒潰した瞬間には、大衆は久々に晴れやかな天日を仰いだやうな氣分になつて、思はず一度にどツと歡聲を擧げた。そして、さうした匆卒の間に後繼内閣の本質を十分に批判する餘裕を持たなかつた大部分の大衆は、濱口内閣を少くとも田中内閣よりは幾分か、より自由主義的な内閣として色彩づけた多くのブルジョア新聞の宣傳に乗つて、可なりの好意を以てその出現を迎へた。

かくの如く濱口内閣に大衆の好意を導くことに成功したブルジョア諸新聞が、そこから更らに一步を進めて、議會の即時解散を叫んで極力内閣を激勵するに至つたのは、事柄の當然の成行であつた。「鐵は熱した瞬間に打て」といふのが、その眞意圖であつた。そして、その言葉のうち、「今こそ政友會を徹底的にやっつける絶好機會だぞ」といふ示唆が一杯に盛りれてあつたのは無論である。

## 二

だが、何故にそれらのブルジョア諸新聞は、さほどまでに濱口民政黨内閣の地盤固めに熱中したのであるか？——私はこの問題をも、茲で序に一刷毛に片付けてしまはねばならぬ。

尤も私は前に、この事實の原因を一應田中内閣の一般的不評判といふことにしておいた。だが、斷るまでもなく、それはどこまでも、單に一應の説明以上に出るものではないのだ。で、この問題に對する決定的解答は、結局は濱口内閣の出現の政治的社會的意義——もしくは今少し精密にいへば、濱口内閣が金融資本の支配の確立のために運びしめられた使命——との何等かの聯關に與へられねばならないのだ。

わが國の金融資本は、かつて金融恐慌によつて迫出された社會的擾亂期に際して田中軍事内閣の出現を必要としたと同様に、今やその金融恐慌の跡始末としての財界の整理の目鼻が一應つけられた時に當つて、より計畫的に、より着實に、金融統制の方向に進入り得る政府の出現を必要とするに至つた。そして白羽の箭は濱口内閣の上に立てられた。

かくして出現した濱口内閣は、果然「如何なる犠牲を拂つても」金融禁を斷行しようとしてゐるの決意を、堂々と天下に宣言して政權の地位についた。

金融禁の斷行！ 金本位制への復歸！ 世界經濟との協調！ これこそ現在わが國の金融資本がその躊躇なき完成を企圖してゐるものだ。今日金融資本の支配下に於て、この事業に堪へ



得ない政府は、直ちにその地位から退かねばならぬ。この事業の成功的遂行に自信と能力とを示し得る政府のみが、確實な存在の理由を持つものとして、その地位に止まることを許される。

金融恐慌に伴つた社會的擾亂の鎮壓と、民衆の負擔に於て巨億の財閥救済案を押し通したことと、日本共産黨の檢舉と、等々によつて金融資本に對して無二の忠勤を抽んでた田中内閣も、さすがにこの大事業の前に一步たぢろいた。如何に金融資本の屈強の走狗たることに甘んじてゐたとはいへ、田中内閣は要するに金融資本の支配の確立への過渡時代に於ける一個の産物であつた。従つてそれは、かゝるものとして、尙ほ大地主や産業資本への様々の特殊利益の約束によつて、少からずその手足を緊縛されてゐた。のみならず、この田中内閣は、濟南出兵とか滿洲某重大事件とかを通じて「世界の公論」の審判廷に於て無謀なる蠻力行使者の烙印をうたれてゐた關係上、直接間接に金融統制に關聯して、名だけでも國際的協調機關に参加するには、最も不適任であることを自ら證明した。かくして田中内閣は、澁々ながら旗を卷いて退場した。

入れ違ひに登場した濱口内閣の前に、改めて金解禁断行の大事業がおかれた。この新内閣が「如何なる犠牲を拂つても」それを完成することを宣言したところを見るとその覺悟の程が窺ひ

知られた。そして、この上窮まりなく募り云く不景氣の増進、失業問題の層一層の深刻化、都鄙一般に通じての窮乏の加速度的進行、全被壓迫民衆の政治的自由のこの上の抑壓、等々々。かうしたものが、その金解禁断行の途上に於て拂はれるべき犠牲として知られた。

さらにこの事業の重大性は、金解禁とこの聯關に於て反復的に言はれてゐる「世界經濟との協調」といつたやうな言葉の上に、強く示唆されてゐた。「世界經濟」それは窮極に於て一體何を意味するか？ それはその純粹な結晶形態に於て、本國および植民地屬領地の無産大衆への飽くなき搾取抑壓の基礎の上に打建てられてゐる、帝國主義列強の經濟の綜合體ではないか？ それ故に、かゝる言葉の使用は、直接にいはゆる産業合理化政策および帝國主義戰爭準備への聯想を喚び起すことによつて、無産階級の眼前に一種の暗澹たる絶望的な見通しを展開することを誤らないのだ！

濱口内閣はかゝる大事業の成功的遂行の使命を意識して政治舞臺に登場した。しかも今日の日本はムソリーニの獨裁下のイタリイではないから、濱口内閣は立法部——議會を通じて、それをしなければならぬ。従つて議會は執行部——政府の傀儡となつて動くまでに骨抜きにされねばならぬ。尤も、近年のわが國の議會は段々とさういふ風のものに成りかゝつて來てゐることは事實であるが、しかも濱口少数黨内閣の出現の際に於て衆議院内の絶對多數を擁してゐた



政友會は、まだく田中反動内閣の餘威を負うて、相當に鼻息が荒かつた。なるほど現在でこそ政友會は、來るべき休會明けの議會の劈頭に於て不信任案を出しもしなければ、現内閣の重要政策には盡く反對もしないなどと言つて、まるで爪牙を拔取られた猫のやうに温順になつてしまつてゐるが、しかし濱口内閣出現當時に於てはもとより、例の昭和四年度實行豫算の説明會(?)の際に至るまでは傷ついた猛虎の如き勢ひを以て尙ほ盛に咆哮をつゞけてゐた。かゝる状態の下に於て濱口内閣にとつては、解散によつて衆議院に於ける絶對多數黨となることが絶對に必要事だと見られた。ブルジョア諸新聞が、濱口内閣に大衆の好意を導くことに腐心し、さらに同内閣に向つて議會の即時解散、總選舉の躊躇なき實行を熱烈慫慂したのは、かうした雰圍氣の中に於てであつた。無論それらのブルジョア諸新聞が一齊にその間の複雑な諸關係を明確に看取し得たとはいへないであらう。だが、彼等も畢竟は、金融資本の強き強響力の下におかれてゐるのだから、そこに醸もし出される雰圍氣の動きには極めて敏感であるのだ。

## 三

濱口内閣の組閣後二十四時間以内に叫び始められた「解散々々」の聲はその後も引續き叫ばれて來た。無論、その間に多少の變化が起つたことは事實だ。即ち當初の「即時解散」の聲は、

いつしか「年内解散」の聲に變はつて、昨年末に及んだ。更に今年に入つてから、それは再轉して、「休會明けの議會の劈頭に於ける解散」の聲に變はつた。だが、その理由として述べられてゐるところのものは、徹頭徹尾依然として「濱口内閣は少數黨内閣だから、解散および總選舉を通じて信を國民に問はなければならぬ」といふ憲政常道論を基調とする、形式論の一點張りだ。しかもそれを最も熱心に唱へてゐるものは政府自身であり、そしてそれを問斷なく大衆の耳に放送してゐるものはブルジョア諸新聞である。

かゝる解散論の騒がしきコースのうちから、果たして解散が一個の具體的事實として現はれるに至るであらうか? そのことを今茲で豫言するが如きことは、全く無用の業である。何となれば、この一文を載せた本誌が市場に現はれるであらう頃には、それに關する状態が一般世間に明確に知れ渡るやうになつてゐるであらうから。

だが、我々はこの機會に次のことを一言しておきたい。我々は「解散々々」の呼聲が、必ずしも常に具體的事實としての解散に結果するものとは限らないことを知つてゐる。先年若槻内閣時代にアハヤ目睫の間に迫まつて來てゐた解散の暗雲が、僅々數分時に互る三黨首の會合を通じて、瞬く間に跡方もなく消散せしめられた事實を記憶してゐるものは、何人もこの意見に異議を挾まないであらう。



と同時に、我々はまた、濱口内閣が解散断行の誘惑を非常に多分に感じてゐることを、容易に理解し得る、民政黨が多年の調和不可能の政敵として見て來た政友會を粉碎する絶好機會は、現在の瞬間を除いては再び容易にやつて來さうにも思はれない。田中内閣の反動的支配が生んだ民衆の政友會に對する一種の自由主義的憤激は、まだ全然鎮靜に歸してゐるとは言へない。金解禁断行の使命を公然宣言しつゝ出現した濱口内閣が田中内閣に劣らぬ反動性を帯びた政府であることを體驗によつて知つてゐるものは、直接にその彈壓の衝に當つて來た戰鬪的勞働者農民群だけであつて、爾餘の大眾の間には「濱口内閣は少くとも田中内閣よりは幾分か、より自由主義的な政府だ」といつたやうな、ブルジョア諸新聞によつて熱心につくり出された幻覺が、今尚ほ多分に残つてゐる。如何にも、濱口内閣の出現以來間斷なく行はれて來た幾多の疑獄事件の摘發は、初めのうちこそ次の總選舉に於て民政黨のために有利に展開するであらうことを豫想せしめるやうな形勢をつくり出しつゝあつたが、中途から急に怪しき方向に轉換して行つて、遂に民政黨の側からも若干名の關係者を出したることによつて、今やこの一點に關しては、兩黨の間に五分々々の均衡状態を現出する結果に終つて來てゐることは、疑ふべからざる眼前の事實である。だが、現在政權を握つてゐる民政黨の地位から來る強味は、その點から來る一切の缺陷を補うて餘りがある。殊に近年來、わが國に於ても、金融資本の庇護の下に

執行權が立法權に對して異常な優越的地位を着々と築きあげつゝあることは、隠れもない一個の政治的事實である。かくして、この際濱口内閣の前に開かれてゐる展望は、解散——總選舉——他の諸黨への選舉干渉乃至彈壓——衆議院に於ける與黨の絶對多數——といつたやうな、希望の光に輝いてゐるものばかりから成り立つてゐるのである。

## 四

だが、我々の當面の問題は、以上の觀點だけからは、決して最終的に解決し得られない。さうしたことの一切を考慮のうちに加へつゝも、結局それに對して決定的な裁斷を下し得るものは、たゞ金融資本本閣の意向に外ならないのだ。

金融資本の側から見て、濱口内閣の與黨である民政黨が解散および總選舉を通じて絶對多數黨となるであらうことは、望まじきことと考へられてゐるであらうか？ それは無論、一應は望まじきことと考へられてゐるに相違ない。何となれば、それは政局の一應の安定を意味するからである。或る種の重大なる社會的結果を伴ふべきことが確實に豫想され得る金解禁の断行期に一步を踏み入れた金融資本は、この際爲替相場の安定を希求してゐると少くとも同程度に熱心に、政局の安定を要求してゐる。そして、その安定が、頭の天ッ邊から足の爪先きまで金



融資本の繼續たることを以て自ら任じてゐる濱口内閣の下に持來たされるであらうことは、金融資本に取つては決して不満足なことではないのだ。

だが、同じ結果が、解散——總選舉といふやうな小面倒な、各種の犠牲を伴ふやうな、しかも或る意味に於て多少の社會的動搖を惹き起す可能性のあるやうな手續を経ずに、もつと平穩な別個の經路を通じて獲得される見込みは全然ないであらうか？ 必ずしも全然ないとはいへない。そこに政友會側から最近殊に猛烈に解散回避運動が提起されるに至つた契機があつた。かつて傷ついた猛虎のやうに咆哮をつゞけてゐた政友會が間もなく爪牙を拔取られた猫のやうに温順になつてしまつたのは、決して偶然ではないのだ。

かつて各方面に互る疑獄事件の摘發が尙ほ凄まじき勢ひを以て進行しつゝあつた際に、私は或る論文のうちに於て、それによつて惹き起されつゝあるブルジョア諸政黨間の動搖は、要するにブルジョア諸政黨の戰線統一の過程の上に於ける一現象にすぎないものだといふ一點を力説しておいた。私はいまだにその論旨を撤回する必要を認めない。

衆議院に於ける絶對多數の獲得を目指しての民政黨の解散への突進。當面の難關を切抜けようがための政友會の必死的な解散回避運動。現下の政局の上に際立つて現はれてゐるこの二つの渦巻きは、しかし諸共にブルジョア諸政黨間の戰線統一の目標に向つて動いてゐる。兩者の

うち、何れがやがて現下の政局の全體を引摺つて行く力となるであらうかは、結局何れが、より平穩な方法に於て金融資本が希求してゐる政局の安定に、より多く貢獻するであらうかの見込みによつて決定される。いふまでもなく、さうした見込みの最後の裁斷者は、政局の背後にあつて指揮杖を揮ふ金融資本閥である。

私は今茲で、休會明けの議會の解散に關して、一切の豫言を避ける。けれど、金融資本閥の意向の刻々の轉換を精密に跡づけて行くやうな仕事は、實際上現在では我々に出來ないことだからである。だが、結局いづれの側にサイが投げられるにもせよ、その歸着點はブルジョア諸政黨間の戰線統一の漸進的完成にあるであらうといふ一事は、我々にとつては一點の疑問の餘地のない結論である。

## 五

無産階級の政治的進出に對して、ブルジョア諸政黨が戰線統一の必要を意識しだしたのは、決して昨今に始まつたことではない。だが、金融禁の實施期が開始された今日に於ては、それは最早議論の問題を通り越して、實行の問題に移つて行つた。政友會や民政黨の間に存續して來た調和不可能に見える傳統的確執の如きも、決してそれを阻止する力を持つてゐるものでは



ない。さうした傳統的確執も、畢竟彼等が代表する階級内での、内部抗争にすぎないものである。それは共同の敵としての無産階級の攻勢に直面しては、必要に応じて直ちに停止し得られる性質のものである。

それに、ブルジョア諸政黨間の戦線統一は、決してそれらの諸政黨の渾一融合を意味しない。それらの諸政黨は、今後も尙ほ長期間に亙つてそれらに獨自の地位を維持して行くであらう。そしてたゞ刻々の必要に応じて相互間の共同闘争の形で無産階級の政治的進出に對する彼等の戦線統一の實效を収めることに努力するであらう。立憲政治の外形が、支配階級の立場から見ても、まだ一種の高き政治的價値を保有してゐる状態にある今日の日本に於ては、ファシズム治下のイタリーに於て見られるやうな一黨獨裁の實現の必要は、急に認められるには至らないであらう。それは一つには、現在のわが國に於ては、執行權の立法權に對する優越地位が既に略ぼ完成されるまでになつて來てゐて、従つて議會は最早政府に對する牽制機關でなく、逆に完全に政府の指導下におかれるやうになつて來てゐる關係上、實質上の金融獨裁の目的が、外形上の議會政治の粉飾の下に達成し得られるやうになつて來てゐるからでもある。

兎に角、ブルジョア諸政黨間の戦線統一は、今や着々と實行期に突入しつゝある事は、掩ふべからざる事實である。解散回避運動に没頭してゐる政友會は、その現總裁の口を通じて「政

友會は金解禁の實施期の遲速に關しての民政黨との意見の相違に頓着なく、その斷行の一旦決定された今日となつては、當然それから生ずべき一切の慘害を緩和するために、完全に濱口内閣に協力することを辭さないであらう」といつたやうな趣旨を發言せしめてゐる。それが政友會の本音であることには、毛頭疑ひがない。

だが、いふところの、金解禁の斷行の結果として當然生ずべき慘害に對する緩和策として豫想し得られるものは何か？ 産業合理化の促進、際限もなく増大する可能性のある軍隊豫算の強行。さうした一切の施設に伴つて必然的に起るべき失業問題の深刻化および一般大衆の窮乏化の趨勢に對する大衆的反抗運動への××の層一層の加重。全被壓迫大衆の手から言論・集會・出版・結社・選舉の自由を始めとし、團結權・團體交渉權の如き一切の政治的・社會的自由の、この上の××。等々々、その他無限。

現在ブルジョア諸新聞の上に喧傳されてゐる通りに休會明けの議會の解散が果たして實現されるにもせよ、はたまた、政友會が熱望してゐる通りにそれが回避し得られるにもせよ、今後の政治舞臺に於ては、「金解禁斷行の善後處置」として、ブルジョア諸政黨は、必ずや上に例示されるやうな諸政策の實行に於て、完全に協同一致の態度に出るであらう。換言すれば、彼等は相互間に於てこそ尙ほ依然として調和不可能にさへ見える傳統的確執を續けながらも、全被



歴民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得とのために奮ひ立つ無産階級の政治的進出に直向しては、それに對して緊密なる共同戦線を張ることをす刻も躊躇しないであらう。

わが勞農黨は、支配階級の側に於ける議會解散の眞意の有無に拘はらず、夙に第五十七議會の即時解散要求を高く掲げて、その下に敢然と戦つて來た。それは、根本に於て支配階級の如上の企圖に對するわが黨の徹頭徹尾非妥協的な闘争態度の表明を意味するものであり、同時に支配階級の願使の下にさうした企圖の實現のために至被壓迫大衆への搾取手段および彈壓・欺瞞政策の樹立に向つて盲進するブルジョア議會の陰謀に對する宣戰の布告を意味するものである。(昭和五年一月)

## 若き新聞記者諸君へ！

「選挙と新聞」といふ標題で、新聞に對する註文を書くようにとのことであつたが、この課題を提出された人々の問題にしてゐる「新聞」といふのは、我々の所謂「ブルジョア新聞」のことに相違ないのであるから、我々がそれに對して勞働者農民の利益を主張しろ！といふやうな註文してみたところで全く無意味だと思ふ。だが私自身は、所謂ブルジョア新聞が、徹頭徹尾反動的役割をつとめてゐるとも考へてゐない。それは、その根本に於ては、たしかにブルジョアジエの利益を代表してゐるものに相違ないが、それにも拘らず、それが、現在の社會に於てつとめてゐる役割の中に、多少とも進歩的な要素の含まれてゐることは、たしかな事實だ。この點はブルジョア教育の機關としての「學校」にその性質が非常によく似てゐる。

◇

ブルジョア教育の最も大けさな機關としての全國無数の小・中學校の存在は、現在の資本主義社會の維持のためには不可缺の條件だ。封建社會のやうに農民が中心的被搾取階級であつた時代には、所謂「教育の普及」といつたやうなことは、たいした問題ではなかつた。だが、勞働



者が中心被搾取階級となつてゐる現在の社會では、或る程度の教育の普及が絶対に必要だ。それなしには近代的諸機械を運轉することの出来る勞働者を得ることが出来なくなるのだ。かくして世界あらゆる資本主義國が教育の普及に努力してゐる。しかし、ブルジョア教育機關の普遍的存在が、資本家や地主のためにだけ役立つと思つたら大間違ひだ。所謂「教育の普及」なしには、新興プロレタリアートが次の社會を負つて立つ「輝ける階級」として成長することも不可能なのだ。ブルジョアジーが自己保存のためにする事業が、同時にそれ自體を廢棄することの要因となるといふ、資本主義社會のこの矛盾は、現在、隨所に現れてゐる。その代表的なものが「教育機關」であり、同時に「新聞」だ。

◇  
ブルジョア新聞は、無論資本主義社會を改廢しようといふやうな意圖を持つてゐない。それどころか常にそれを擁護しようとしてゐる。だが、それにも拘らず、ブルジョア新聞はいや應なしに、ある程度までブルジョア政治の實相やプロレタリア運動の動向を詳細に報道せざるを得ないのだ。そしてそれが、無産階級運動の進展にとつて、大きな貢獻をなしてゐることは、何人にもいなみがたい事實だ。ブルジョア新聞のこの矛盾は、それが數十萬數百萬の大衆を相手として經營されてゐる限り、不可避的である。

◇  
かうしたことを前提とするとき、我々のブルジョア新聞に對する註文は、結局ブルジョア新聞社内に於て働いてゐる多くの進歩的新聞記者諸君に對する註文以外のものではあり得ないことになる。我々はそれらの諸君に期待する。諸君はブルジョア新聞の進歩的役割——經營者の意圖とは別個に生ずる——を極度に利用して貰ひたい。諸君はプロレタリアートの暴露者としての意氣込みを持つて、ブルジョア政治の時々刻々の腐敗墮落を暴露せよ！ 新興プロレタリアートの歴史的役割を、その時々刻々の動向の報道を通じて宣揚せよ！ それが適確なる事實に基いてゐる限り、ブルジョア新聞の經營者は諸君の記事を全然無視することを得ないのだ。我々はブルジョア新聞の經營者には何等の期待を持ち得ないが、ブルジョア新聞社に働いてゐる進歩的記者諸君に對しては、大いに期待してゐる！ 搾取なき社會を建設するたあには、あらゆる場面に於て、献身的努力を續けて行く人が要求されてゐるのだ！



## 社會民主々義者の敗北!

社會民主々義が素晴らしい勢で發展をとけるやうな素地は我國には殆どないといふことを我は長い間主張して來たが、今度の總選舉戦を通じて、我々の確信は一層強められた。××、××、××等々の大頭株が枕をならべて慘敗したことは、社會民主々義諸黨の幹部諸君にとつては、何としても氣持の好いことではないに相違ない。

社會民衆黨の安部磯雄氏は、總選舉前には「社會民衆黨は一選舉毎に自黨の代議士を倍加するだらう」と言つてゐたのが、選舉後の今日では「無産政黨は我國では時期尚早だ」と言つてゐるとブルジョア新聞は報道してゐる。又、鈴木文治氏は「自分が落選したのは、大衆の自覺が足りないからだ」と傲語してゐることだ。更にまた總選舉後に社會民衆黨で出した聲明書には「社會民衆黨の敗北は、社會民主々義そのものが悪かつたのではなくて、政府が買収や干渉をやつた結果だ」といふ意味のことを述べてゐる。とにかく、色々の泣事は並べてはゐても、彼等は彼自身の敗北を社會民主々義そのもの、敗北とは考へてゐない様である。否、それ

どころか、社民黨や大衆の幹部諸君は、今でも社會民主々義の將來に於ける素晴らしい發展を夢みてゐるやうである。

だが、我々の見るところでは、我國には、社會民主々義の發展を豫想すべき有力なる根據は殆どないやうである。無論、社會民主々義が全く勢力を失つて了ふといふやうなことも考へられないことであるが、それがイギリスやドイツのその様に素晴らしい發展を遂げるだらうといふやうなことを考へるのは全く空想である。何故か? 先づ第一には、我國には所謂勞働貴族なるものゝ數が非常に少いこと。第二には、我國には農民の數が非常に多く、殊に極度に窮乏してゐる農民の數が人口の過半數を占めてゐること。(社會民主々義は小ブルジョアのイデオロギーではあるが、農民的イデオロギーではあり得ない。) 第三には、日本のブルジョア政治は、社會民主々義が相當の發展を遂げるまへに、既に金融資本獨裁の時代に這入つて了つたので、社會民主々義はかゝる時代に於ては、何等民衆の利益を代表し得ないものになつて了つてゐること。言ひかへれば、現在の狀態の下に於ては、無産大衆の諸利益、殊に其政治的自由は、社會民主々義的方法——議會主義——では、何等擁護伸張され得るものでないこと。したがつて、社會民主々義は最早や意識の低い大衆に對してさへ、たいした魅力であり得ないこ



と。等々。以上の觀點から我々は、我國に於ける社會民主主義の今後の發展を、たいしたものとは豫想してゐないのである。

○  
だが、さうかといつて我々は、社會民主主義がやがて完全に絶滅して了ふであらうとも考へてゐない。今後と雖も社會民主主義者の二三のグループが或る程度の勢力をもつて、無産階級陣営内で相當の活躍を續けるであらうことは、今からでも明白に豫想し得られることである。彼等は「民衆の利益の代表者」でこそあり得ないが、しかし「労働階級の内部に於けるブルジョアジーの諸利益の侍女」としては相當に大きな役割を持つてゐるのだから、支配階級は彼等を或る程度まで生長させるに相違ないのである。

○  
以上の觀點からすれば、現在の狀勢下に於ける社會民主主義の發展は、民衆の彼等に對する支持の増大に比例せず、支配階級が彼等を必要とする度合に比例するものであるといふことが正當に主張し得らると思ふ。今度の選舉戦に於ける社民、大衆、等の社會民主主義政黨の敗因の如きも、安部磯雄氏が言つてゐるやうに「無産政黨が時期尙早」のためでもなければ、鈴木文治氏が言つてゐるやうに「大衆が目覺めない」ためでもない。簡単に言へば、支配階級が、

○  
當面、社會民主主義者をさほどに必要としてゐなかつたことがその第一の敗因である。現在、左翼の勢力が比較的微弱な状態に在ること、民政黨内閣が彼自身の偽購政策にかなりの自信を持つてゐること、この二つの原因から、民政黨内閣は、當面、社會民主主義政黨の手を借りようとはしなかつたのだ。支配階級の援助なしには社會民主主義者はいつも必ず敗北する。

○  
だが、今後、左翼の勢力が増大して、資本家地主の政府と、労働者農民の戰闘的聯盟とが、正面から火花を散らして衝突するやうになれば、その時には、ブルジョアジーの政府は、再び社會民主主義者の必要を痛感し始めるに相違ない。そしてその場合には、社會民主主義の代議士連が續々とブルジョア議會へ乗込んで行くやうな狀勢が作られるに相違ないのである。殊にもし戦争にでもなれば、ブルジョア政黨と社會民主主義政黨の幹部とが緊密に提携して、彼等の「聯立内閣」を成立せしめるに至るであらうといふやうなことが、今日では、餘り無理なしに考へ得られることである。ブルジョアジーの政府は、無産大衆の利益を代表してゐるやうな顔をしてゐて、その實は「ブルジョアジーの諸利益の侍女」である社會民主主義者を、彼等の仲間に入ることなしには、最早や大衆を偽購する、適當なる方法を持つてゐないのだから。そして、もしさうなつたら、社會民主主義政黨の幹部諸君は「無産政黨の時代が來た」こ



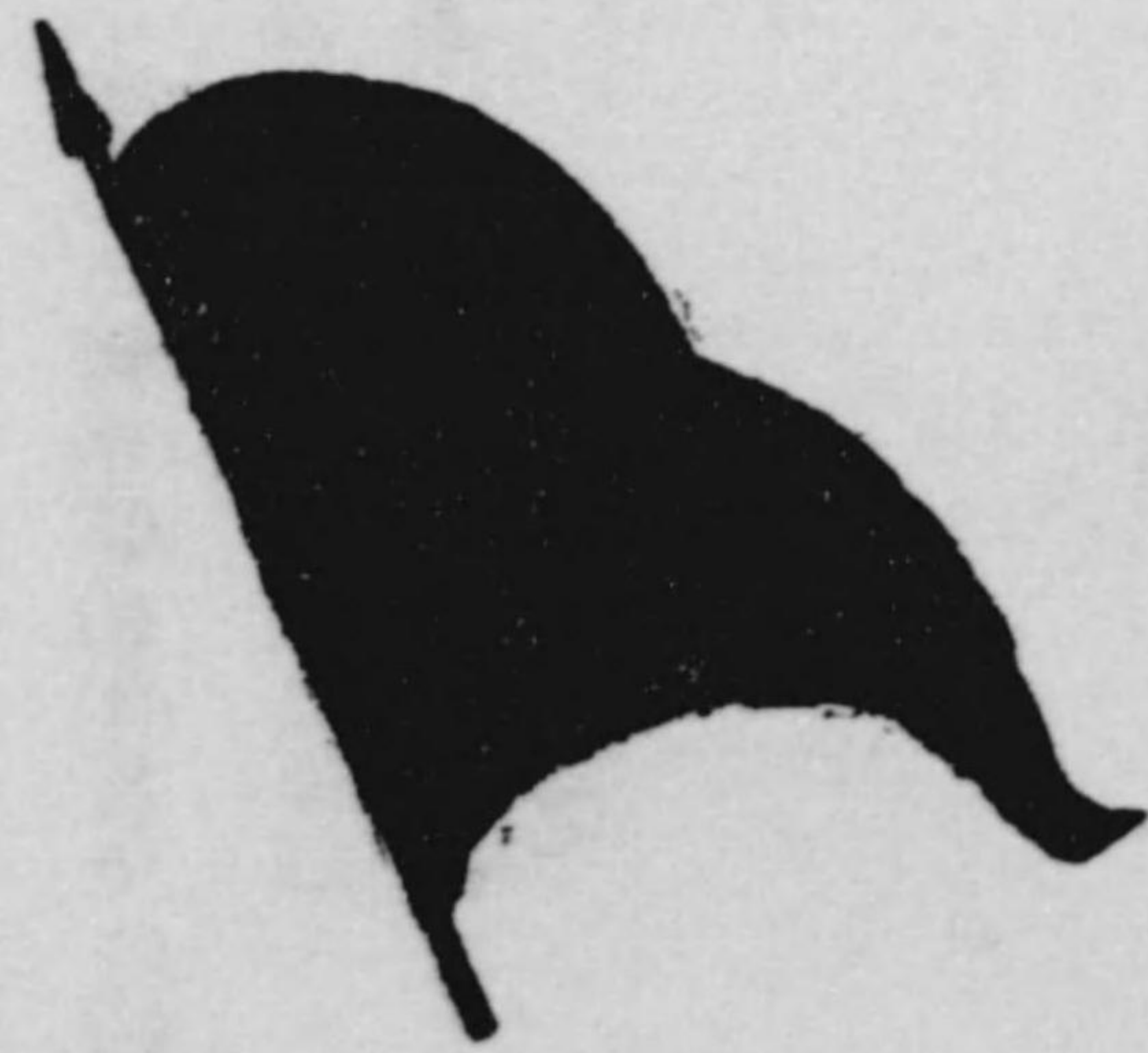
とを絶叫し、或は「民衆が目覺めた」ことを狂喜してワメキ立てるに相違ないのである。

○  
我々は、かうした見通しから、日本に於ける社會民主主義の今後の發展を信じてゐないに拘らず、現在すでに、彼等の本質を執拗に暴露し、彼等に對する大衆の錯覺的信頼を粉碎することに努力してゐるのである。(以上、與へられた紙數の範圍内で、極めて筋書き的に、社會民主主義政黨の今度の選舉戦に於ける敗因に就いての我々の觀察を述べた。が、より詳細には、勞農黨の諸文獻を参照して頂きたいと思ふ。)

第四編



演説集





## 新勞農黨樹立の歴史的意義

(この一篇は、昭和四年十月三日、大阪中之島中央公會堂で開かれた新勞農黨結黨促進演說會での私の演說に基いて書いたものである。——筆者。)

### 一

大阪地方の労働者、農民、無産市民諸君！

私は久々振りで、諸君の面前に立ち、諸君に呼びかける機会を得たことを、心から欣ぶものであります。

私達は今晚、大阪市および附近の労働者、農民、無産市民諸君が、潮の如くこの會場に押寄せて來られるのを見たとき、來るべき新勞農黨の出現が、如何に大衆の間に熱烈なる期待を以て歓迎されてゐるかを鋭く感じたのであります。

私たちの確信は、それによつて限りなく強められました。それは、大衆とある時のみ我々の行動には意義があるのであつて、大衆を離れては我々の存在さへもが無意義なものであるこ



とを、私たちは知りすぎるほど知り抜いてゐるからであります。

殊に今晚の會場が、現實に工場から動員されて來た二百三十餘名の戰闘的労働者諸君の自發的意志によつて組織された拔群の警備隊に護られてゐる事實は、我々に何とも云ひやうのない心強さを與へるのであります。私たちは私たちの新勞農黨樹立の提案の故に、支配階級の彈壓以外、更に新たに左翼陣營の小さき一角から批難攻撃の矢を浴びせかけられるやうになつたがしかし如何に個人としての私たちに向つて惡罵の限りをつくしてゐる人々と雖も、提案支持の熱意から甲斐々々しくもこの會場を護つてくれてゐるそれらの戰闘的労働者諸君に後ろ指一本さすことは出來ないであります。

私たちは、たとひ一握りほどの少數とはいへ會場内の攪亂といふが如き非階級的な、アナ的な行動に出た人々たちが現はれたことを、私たちのためではなく、それらの人たちのために、衷心遺憾に思ふのであります。先晩私たちが名古屋で演説會を持つたときには、建國會員たち——だと後に聞いた——が會場外で同様に新勞農黨排撃のピラを撒いた。今晚この會場で騒いだ諸君は、無論建國會やアナ系の連中とは、全然立場を異にしてゐる人々であらう。それらの諸君は、おそらく我々と同じく左翼の陣營に屬してゐて、無産階級の解放を究極目標としブルジョアジーに敵對して立つてゐる人々であらう。かく我々と究極目標を同じくし、相手と

し戦つてゐる敵を同じくしてゐる以上、若しそれらの諸君が、少くとも今晚身を以てこの會場を護つてゐる戰闘的労働者たちと同様に、現實に——言葉の上でだけではなく——戦ひ續けてゆく限りは、いつかは、我々が今立つてゐる立場を完全に理解する時が來るであらう。無産階級運動の進む道は複雑多岐であり、様々に曲りくねつてゐる。で、今日こそ、それらの諸君と我々とは、相互に調和しがたき政治上の見解の相異から、それ／＼に別々の方面を歩んでゐるが、他日道は再び相合して、それらの諸君と我々とは、再び温かに手を握り合ふ時があるまいとは、何人にも保證が出來ないのであります。私たちは、誠心誠意さういふ時の來るのを待ち望んでゐるのであります。

## 二

諸君！ 私は今この馴染の深い演壇の上に、馴染の深い大阪地方の労働者、農民、無産市民諸君と面と向ひ合つて立つとき、この二三年間に於ける我々の陣營の歴史が、まざ／＼と私の眼界に展開されて來るのを感じるのであります。今から二年半前の春四月、私が始めて舊労働農民黨の使命を帯びてこの演壇の上に立つてからこのかた、我々の陣營の名が屢々變はりました。それは初めには、今言つた労働農民黨でありました。次には、新黨準備會でありました。



その次には、政治的自由獲得労働同盟でありました。今や私は、まさに出現しようとしてゐる新労働黨のための宣傳の使命を帯びて、諸君の前に送られて来たのであります。

かくの如く、我々の陣營の名は度々變はりましたが、また今も變はらうとしてゐますが、しかし、名は幾度變つても、その實體は、本質的に少しも變はつてゐないのであります。即ちそれは、舊労働黨時代以來一貫して變らない労働者農民の緊密なる戰闘的同盟であります。たゞ幾らかでも變つてゐるものがあるといへば、その後の形態が何時も、その前の形態の發展した姿だ、といふ點のみであります。そして私たちは、何時來ても同じ大衆に——資本家地主に正面から對抗する労働者、農民、無産市民の大衆に接觸して、その大衆に呼びかけるのであります。私たちは心の底から、それを欣びとし、誇りとするものであります。

諸君！我々の陣營の實體が一つであるのに、その名が幾度となく變つて來たといふことは、一方に於てはたしかに、現在の支配階級の彈壓の下に、全被壓迫民衆の解放の戦ひが、如何に絶大なる困難の下におかれてゐるかを物語つてゐるものであります。と同時に、それはまた他方に於て、我が國の階級闘争の現状の下に、労働者農民の同盟の基礎が如何に確實に形づくられてゐて、しかもその活動の進展が如何に必然不可抗のものになつて來てゐるかの實情を反映してゐるものにも相違ないのであります。

我々は大家と腕を組んで、雨に嵐に行進を共にして來ました。そのうちに、我々は屢々傷つき倒れました。だが、全被壓迫大家の生活の苦しみと自由への要求がある限り、我々の闘争の意義は斷じて失はれるものではない。かうした確信の下に、我々は打ちつゞく苦難の道を歩んで來たのである。「倒れて後やむ」といふ諺は、少くとも無産階級のものではない。無産階級は幾たびとなく立つて倒れ、倒れては立ち、血みどろの闘争を通じてのみ勝利への道に進むことが出来るのである。これが無産階級運動の運命であるかのやうにさへ見える。しかも、かくの如く度々倒れることも、無産階級運動のためには、決して無意義なことではないのであります。即ち無産階級の戰闘的運動は、さうして倒れてゐる間にも、大地から新たに鋭氣を吸収する。それは少くとも、その間に假借なき自己批判によつて敗北の諸原因を抉り出し、取り除いて、再び猛然として起きあがるのである。そして、かくの如く起きあがつた時こそ、以前に幾倍する新たな力を以て堂々と巨人の足どりを以て前進するのであります。

現在の世界の無産階級の勝利的行進は、際限もなく重ねられた敗北の中から鍛ひ出されたものであります。我々はその間に、無産階級の特質を見るのであります。ブルジョア階級の側の様運動は、例の封建時代の昔から持越されて來た一つの諦め的な表現である「榮枯盛衰」の夢を繰返しつつ、結局は必然の没落に急いでゐるのであります。我々はその實例を歴史上の幾



多の事實に求めるまでもなく、今我々の眼前に展開されてゐる政友會の悲運の上に、その極めて典型的な一つの現れを見てゐるのであります。二三個月前までは、政友會は衆議院に於ける絶對多數を制し、田中反動内閣を笠に被て、勢威並ぶものなく、いつまでも無産階級運動の上に血の滲じみ出るやうな弾壓を加へて行くことが出来るものと考へてゐたのであります。ところが一朝不戦條約に絡まる一問題を契機として、田中反動内閣が倒れてからは、政友會は四分五裂の危機に脅かされてゐるのであります。殊に、その反動内閣切つての反動の結晶と見られてゐた、小川前鐵相が獄窓に縛がれ、田中前總裁が急死してからこの方の、その落ぶれ方の惨じめさはどうであるか！ だが、その相手方の民政黨内閣にしても、同じく資本家地主の政府として、結局は同じ運命を辿らなければならぬのであります。現在ブルジョア諸政黨の上に起つてゐる分裂・動搖は、實はブルジョア政治戦線の統一の流れの上に現はれた渦であつて、民政黨は恰度今その流れの方向をリードする地位へやつて來てゐるには相違ないが、しかし今日ブルジョア政治戦線の統一そのものが斯様に必要になつて來たのは、當面凄まじき勢を以て政治的に進出しようとしてゐる無産階級の見えざる偉力の脅威のためである。すべてがブルジョア社會の救ひがたき破綻を前觸れしてゐる末期的現象に相違ないのであります。

無産階級はこれに反して、今日こそ虐げられ、踏みつけられ、搾取され、弾壓されてゐる境

遇におかれてはゐるが、同時に輝やかしき明日を約束されてゐるのである。「未來は我々のもの」といふのは無産階級には不可抗の眞理であり、誤らざる歴史法則である。だからこそ、我々の陣營は、幾たび倒れても、直ちに再び立ちあがるのであります。立ちあがらざるを得ないのであります。

## 三

かくて我々は、今や我々の陣營を立て直し、新勞農黨として再び大家の面前に立たうとしてゐるのであります。だが、新勞農黨といつても、それは今更ら何處からともなく飄然としてやつて來たものではない。それは舊勞農黨時代以來暗黙の間に脈々として生長して來た勞働者農民の戰闘的同盟の基礎の上にしつかりと足を踏み据ゑてゐるものである。それは當然、舊勞農黨以來、絶えず我々の陣營の活動を指導して來た闘争精神および戰闘的傳統を受繼ぐるのであります。

舊勞農黨時代以來の我々の陣營の闘争精神や戰闘的傳統。——それが如何なるものであるかは、今更細々しく説明するまでもなく、諸君の記憶の上になぞくと彫りつけられてゐるものであります。舊勞農黨時代以來、我々の陣營は、絶えず「勞働者に仕事と食を」「働く農民に



土地を！』すべての人民に——無産大衆に——自由を！』の如き中心スローガンを高く叫び、その下に労働者、農民、無産市民衆、植民地民、その他一切の被壓迫大衆の日常利益の擁護伸張のために戦ひ、更にさうした一切の闘争を、政治的自由獲得の闘争に集中統一せしめて精根の限り戦つた。かゝる意味に於ける生活と自由とのための闘争こそは、舊勞農黨以來の我々の陣營によつて完成されたものであるよりは、寧ろ開始されたにすぎないものでこそあれ、今日支配階級が益々全力的に進めてゐる産業合理化の下に、それは全被壓迫民衆によつて、層一層痛烈に要求されてゐるものであるには相違ないのであります。かゝる闘争の遂行に於て、我々は口先で革命的言辭を唱へるだけで何一つ實行をしないといったやうな態度を唾棄して、支配階級から向けられる如何なる彈壓にも屈せず、徹頭徹尾身を以て戦つて來た。かういふのが、舊勞農黨時代以來の我々の陣營の闘争精神であり、その具體的表現の集積がその戰闘的傳統であります。そして、それらの一切を受継いで、しかもその新たに發展した姿で打つて出ようとしてゐる闘争體が、取りも直さず新勞農黨そのものなのであります。

そればかりでなく、新勞農黨はまた、舊勞農黨時代以來我々の陣營の上に集中されて來た彈壓の砲火の下に鍛ひ上げられて來て、また我々の陣營を忠實に護つて來た幾多の精銳闘士たちを中心とする戰闘的大衆によつて護られるのであります。無論今後とても、常に新たな闘士た

ちや新たな大衆が、益々多く來り集まるであらう。そして我々は、それらの闘士たちや大衆を兩手をひろげて熱烈に歓迎しつゞけるであらう。だが、我々の陣營が既に鍛鍊に鍛鍊を重ねた幾多の精銳闘士たちや戰闘的大衆を以て装はれてゐるといふことは、新勞農黨の前途への發展のために、異常な重要性を持つて居るものであることは、疑ふべくもない事實であります。

顧みれば、三・一五および四・一六などの大檢舉に際して見られた如く、度々荒れ狂うた風は、幾百の又と得がたき優秀なる闘士たちを、我々の陣營から奪ひ去りました。その度毎に、我々の陣營は、一時的に深き創傷を受けました。だが、それらの闘士たちが奪はれてゆくと、新たな闘士たちが直ぐあとから／＼と大衆の間から現はれて來て、各々それ／＼の部署について、惹き起された缺陷を直ちに充たし、來ました。かくの如く、卒伍の間から絶えず有能な指導者たちが出て來ること、——そこに、無産階級の無盡藏の力の泉があるのであります。かくて新勞農黨が、その誕生の瞬間から、百戰練磨の闘士たちから構成された独自の指導部の下におかれることが出来るといふこと——そのこと自身のうちに、深き階級的・歴史的意義があるのであります。



## 四

更にまた、新勞農黨は、舊勞農黨時代以來の我々の陣營の、奥底の知らないほど深い闘争經驗の集積によつて、異常に力づけられるでありませう。新勞農黨はまさしく舊勞農黨以來の我々の陣營の闘争精神や、戰闘的傳統の繼承者だといへ、それは同時に、その發展形態でもあります。新勞農黨は、かゝるものとして、今我々の眼前に展開してゐる、新たな客觀的状態に向つて、新たな力を以て働き掛けなければならないのであります。かゝる新たな力はどこから来るか？ いふまでもなく、それは我々の陣營の過去の闘争經驗の集積の中から来るのであります。

支配階級から發射される絶間なき彈壓の砲火を冒し、敢然と戰つて來た我々の陣營の闘争經驗が、如何に複雑多岐なものであり、また如何に深刻を極めたものであつたかは、諸君が十分に知つて居られる通りであります。そして我々の陣營は、その間に幾多の貴重なる教訓を學び取つて來ました。と同時に、またさうした教訓を活かしても來ました。從來我々の陣營に向つて様々の罵詈雑言を浴びせて來た社民黨や大衆黨の如きも、一般の戰術や、組織方針や、活動方針や、否、闘争スローガンの端々に至るまで、我々の陣營から多くのものを彼等の陣營の方

に密輸入して行つたことは、かくれもない事實であります。

殊に、勞農同盟になつてからの我々の闘争經驗は、形容のしようのないほど慘憺たるものであります。支配階級の彈壓は、益々烈しく我々の陣營の上に集中され出して來ました。その間に水谷長三郎君一派の裏切りも起りました。次で、諸君と我々とは敬愛して措かざる同志山本宣治が、白色テラーの犠牲となつて鮮血を流しました。最後に、四・一六の嵐が我々の陣營に荒狂ひました。我々はちやうど、血の池を渡り針の山を登る決心で、絶對絶命の進軍を續けなければならなかつたのであります。そのうちに、我々の活動は、遂に八方塞がりの状態に陥りました。けれども、さうした苦難の下に於て、我々陣營が克ち得た多種様多の闘争經驗こそは、その後の新闘争形態の下に於ける、我々の活動のうちに何時までも生きて行くのであります。

「勞農」一派に理論的代表者をもつ無産大衆黨系の諸君や、それと大同小異の理論的基礎の上に立つ勞農大衆黨の諸君は、今いつたやうな痛烈なる惡戰苦闘を我々と共にすることを避けて、早くから合法政黨の形態の下に安住の地を求めたのであります。そして、今や我々が、當面の客觀的状態の變化に適應して、安住の地を求めためなく、尙ほも闘争を展開せしめるために合法政黨の形態に於て新勞農黨として打つて出ようとしてゐるのを見て、急に得意にな



つて、盛に自分たちの『先見の明』を誇つてゐます。彼等は、單純に合法政黨の組織といふが如き現象形態だけに眼を着けて、現實の活動の上に現はれる實質上の差異を無視してゐるのであります。殊に彼等は、彼等が我々の陣營を裏切つて出て行つてから以來の我々の血の滲んでゐる深刻な闘争經驗が、我々の將來の闘争力の上に於て持つであらう實質上の意味を、到底理解することができないのであります。それ故にこそ、彼等は平然として、自分たちの怯懦を『先見の明』に摺り替へることが出来るのであります。

だが、我々と同じ左翼に立つ人々のうちにも、『新勞農黨も結局は無産大衆黨系のグループや勞農大衆黨と同じやうなものになるのが落ちだ』といふやうなことを言ひ觸らしてゐるものがあります。これらの諸君もまた、我々の陣營の過去に於ける闘争經驗の實質的意義を理解しないといふ一點に於ては、『勞農』一派や勞農大衆黨の諸君と、何等變はるところがないのであります。かゝる内容空虚な形式一遍の議論に對しては、現實の闘争の渦中にある大衆は、本能的に反感を持つのであります。といふのは畢竟、複雑な渦状態を描いて動いてゐる現實の闘争に直線的に固定した形式論を當筈めようとするが如きことは、その闘争の實際上の効果を害しこそすれ、毫もそれに益するところがないからであります。闘争の場面から離れて闘争の方針に容喙したがる人々の言論は、動々もすれば、さういふ風になりがちなのであります。

五

去る四月五月の交に、勞農同盟の活動が全然行詰まつてから以來、私たちは次第に、どうかして局面轉換の工夫を講じなければならぬことを痛感するやうになりました。それに關聯して、私たちはまた、我々の陣營が、當初からの勞働者農民の同盟としての本質を變へない以上、それはかゝるものとして、大衆的規模の上に公然と活動し得るものでなければならぬと考へたのであります。カンパニアの組織といつたところで、大衆的規模に於てカンパニアの遂行が出来なくなれば、それは最早かゝるものとしてその存在理由を失つたものといはなければならぬのであります。しかも勞農同盟がさうした状態に陥つたのは、それがその本來の任務を遂行し終へたからといふのでは決してなく、當面の客觀的状態の急激なる變化のために、最早その本來の任務を遂行することが全然出来なくなつたからである。——かう考へた時、私たちの眼には、問題が一層重大なものとして映するやうになつたのであります。

當面の客觀的状態の變化。——それに關しては、私たちは『提案』の中に、私たちの認識を詳細に述べておいたから、いま茲でそれを繰返す必要はないと思ひます。たゞ茲で一言を許されたことは、左翼陣營内の一部の高踏批評家連と、左翼および右翼の社會民主主義者たちと



が、聲を揃へて「提案」のその部分を批評して、「客観的状態は少しも變化してゐないのであつて、たゞ提案者たちの主観的態度が變化してゐるだけだ」といふやうなことを得々と言ひ立ててゐることに關してあります。如何にも、客観的状態といふことを、支配階級のやつてゐることだけに限つて言ふならば、それは最近に於て著しく變化したとは言へないであらう。たとへば、産業合理化の趨勢にしても、それは濱口内閣の下に於て田中内閣時代よりもたしかに一步を進めたとは言へるが、しかし本質的に變化したとは言へない。しかし私たちは、さうした當然なことを、どうかのうのと言つたのではない。私たちは、支配階級の陣營の現勢と、それに對する無産階級の陣營の——若しくは主體的諸條件の——現勢との聯關について一切を見て、その見地から客観的状態が最近數個月の間に急激に變化したと言つたのであります。それ位のことには「提案」のその部分を讀めば、誰にでも譯もなく解かることとあります。否、それを讀まなくとも、社會現象の認識の方法に無知でないものには、初めから解かつてゐた筈のこととでなければならぬのであります。それにも拘らず、彼等が「客観的状態は少しも變はつてゐない」など、大見得を切つてゐるのは、まことに奇怪至極であります。我々は、彼等の眼が一體どこについてゐるのかを疑はねばならないではないか！我々は何時でも、自稱理論家の大先生たちには、極度に警戒しなければならぬのであります。

私たちは、以上の意味に於ける客観的状態の下に、全左翼戦線が容易ならざる一大慘害を受けて殆ど潰滅状態に陥り、それにつれて、勞農同盟の活動がハタと行詰まつて來たのを見ました。そして私たちは、よしその事が我々に取つて如何に不愉快であるにもせよ、我々は勇敢にそれを正視しなければならぬ、と考へるやうになつたのであります。我々は傷つき倒れた場合には、また立上がらなければならぬ。と同時に、我々が立上がる際に、まづ我々が受けた傷を調らなければならぬ。我々は斷じて、自分の受けた傷があるがまゝに見ることを恐れる臆病ものゝ態度を眞似るべきではない。かう考へて、私たちはまづ、我々の左翼全戦線の上を降りかゝつて來た大慘害の檢討から議論を進めたのであります。

すると忽ち、「左翼全戦線の潰滅状態を公言するのは裏切りだ」と言つたやうな批難が、左翼の一隅から私たちに向けて浴びせかけられたのであります。しかしこれは理由のない言ひ掛かりといふものであります。我々が公言しなくとも、我々の敵は既にそれを知抜いてゐるのである。それを知らないでゐるのは、我々の味方の大衆だけである。しかも、我々の味方の大衆がそれを知らないでゐることは、この上もない危険なこととあります。少くとも、それらの大衆が、それを知らないで行動をつゞける時は、彼等は必然に非常な危地に陥らない譯に行かないのであります。我々が我々の敵の知抜いてゐることを公言したところで、それは決して裏切り



にはならないのである。それが裏切りになるなどいふのは不可解の論理であります。これに反して、我々が我々の味方の大衆が當然知っておかなければならないことを押隠くすのは、故意に大衆を欺くことを意味することになるのであつて、不信これより甚しきはないのであります。従つてそれは最も非階級的な行爲の一つであります。現實に闘争するものは、自分自身が味方の大衆と深い深い相互的信頼の關係にあることを十二分に知つてゐるのであります。従つて現實に闘争するものは、如何なる易合にも、味方の大衆に對して、毛ほどの不信の罪をも犯してはならないといふことを、心の底から固く確信してゐるのであります。

## 六

前に言つた通り、四・一六事件以後の客觀的狀勢の急激なる變化の下に、勞農同盟の活動は、各地に於ける選舉闘争や山宣追悼演説會の舉行を一廻轉期として、八方塞がりの状態に陥つてしまつたのであります。しかも、勞農同盟の活動がかくの如く徹底的に停頓したのは、我々の陣營の實力が絶對的に減退したためでは決してなかつたのであつて、それは實に、勞農同盟がその闘争形態のまゝでは、最早當面の客觀的狀勢の變化の下に一步も進めなくなり、従つてその機能を果たすことが出来なくなつたためであります。

去る四月から五月にかけて、私は或は山宣追悼演説會に参加するために、或は同志小岩井の選舉應援のために兩度當地に参りました。そして私は兩度とも、大衆——右翼の政黨・組合の幹部の指導下にある大衆までを含めての大衆が、勞農同盟の闘争に對して、如何に熱烈なる精神的支持を與へてゐるかの誤まらざる表象を、諸君と共に眼のあたりにまざ／＼と見たのであります。そして私は、この當然の事實に對しても、多少の驚異を感じないで居られなかつたのであります。

當然の事實？——無論然り！ 少くとも、當面支配階級の攻勢が全面的に時々刻々に益々猛烈になり、それにつれて大衆が時々刻々左翼化しつゝあるといふやうな、この明白な眼前の顯著な一傾向を見ると、それは何人の眼にも當然の事實としてしか映じない筈であります。

大阪——もしくは今少し廣く言つて京阪神地方——で代表的に見られたかうした現象は、多かれ少かれ、また全國的にも見られた現象でありました。それ故に私たちは、我々の陣營の見えざる力が——即ちその潜在力が——かくして刻々に増進しつゝあつたことを感じたのであります。それにも拘らず、我々は最早勞農同盟の形態の下では、さうした大衆の精神的支持を現實の闘争に組織したり、動員したりすることが、全然出来なくなつたのであります。

それは何故であつたか？ それは一つには、勞農同盟の闘争形態の故であつた。それらの右



翼の黨員や組合員までをも含めての大家は、勞農同盟の闘争に對して非常に深い關心を持つやうにはなつて來てゐるが、勞農同盟が合法政黨の形態を持つてゐなかつたばかりに、當面の客觀的狀勢の下に、益々手きびしき彈壓をその上に集中する口實を支配階級に與へてゐるところから、それに直接に参加することを躊躇したのであります。のみならず、曾ては我々の陣營の闘争に参加したことのあつた多くの大家のうちにも、次第に社民黨や大家黨の——特に前者の——傘下に移つて行くものさへが、多かれ少かれ、各地に出るやうになつた。それは決して彼等が勞農同盟に對する關心を失つたためでもなく、また社民黨などに全幅の信頼を寄せたためでもないが、ともかく容易に近づくことが出来る社民黨へでも這入つてゐれば、多少なりとも日常利益の擁護伸張のための闘争が出来ないでもあるまい、といふやうな一種の幻影を懐いたためであります。しかも、彼等の幻影は譯もなく破られました。如何にも社民黨や大家黨は、ブルジョア政黨と同じやうに、選挙の際には活潑に動くが、少しも日常闘争をやらない。偶々やることがあつても、曾ての富山縣下での電燈料値下運動の場合に見られたやうに、また近くは東京市でのガス料金値下運動の場合にも見られたやうに、それは直ちに立ち消えになるといふのが慣例のやうになつて來てゐるのである。そして、單なる選挙の活動だけでは、被壓迫大家の日常利益は少しも擁護されたり伸張されたりしないことは、無論自明の事であります。

曾て舊勞農黨時代以來の我々の陣營が尙ほ猛烈なる大衆的日常生活闘争を展開してゐた間は、これらの社會民主主義の政黨といへども、少くとも體裁のためだけにでも、その眞似事みたいなことはやつてゐた。ところが勞農同盟の大衆的日常生活闘争がびつたり停止してしまつてからは、彼等は些かでもの日常生活闘争への一切の刺激を失つてしまつたのである。かくて、無産階級の政治運動の分野の上には、曾てなかつた冬枯れのやうな荒涼たる景色が展開したのであります。かうなると、人は舊勞農黨の花々して活躍時代を、一種の懐しみの眼を以て振返つて見るやうになりだしたのであります。だが、これは危険なことだ。如何にも我々は、ありし日の舊勞農黨の輝やかしき闘争を通じて、勞働者農民無産市民が常に活氣づけられ、屢々凱歌を擧げる欣びをさへも持つたことのあつた歴史的事實を、一種の誇りを以て、何時でも我々の記憶のうち鄭重に保存してゐる。それにしても、それは過去のことだ。我々は斷じてそれに戀々として、執着してゐるべきでない。我々の戦野は現在および未來に開かれてあるのだ。我々は今、新たな組織と力を以て、新たな客觀的狀勢に敢然と働き掛けなければならぬ。かうした見地から、私たちは、最早完全に行詰まつた勞農同盟の組織の建直しによつて、局面打開策を講じなければならぬ必要を、段々と痛切に意識するやうになつたのであります。そこで私たちは何よりも先づ、出來得る限り、全國的に我々の陣營内部の同志たちおよび大家



の意向を探ることに着手しました。そして私たちは、それらの同志たちおよび大衆も矢張り陣營恢復のために、闘争力の拾收のために、闘争の新たな展開のために、この際何等かの轉換を圖らなければならないことを、それとなく——だが熱烈に——要求してゐたことを確めたのであります。

## 七

それに力づけられて、私たちは直ちに新勢農黨樹立の提案の起草に着手し、遂に八月八日を期してそれを發表し、一齊に全國の同志たちおよび大衆に向つて、それに對する大衆討論を通じての假借なき批判を求めたのであります。

提案者である私たちは、もとより異常の決心を以て事に臨んだのであります。私たちは、事前に於て大體全國の同志たちおよび大衆の意向を測定したとはいへ、若しそれに關する私たちの認識に錯誤があつた場合には、そのために如何に鞭うたれて大地に踏みつけられようとも、既に自分たちの確信に殉する覺悟を決めた以上、甘じてそれに服罪しなければならないと考へたのであります。

だが幸にも、私たちのさうした不安は、一切杞憂に終りきました。即ち、提案に對する大衆的

討論の結果は、全國的にそれへの壓倒的支持の形勢となつて現はれたのであります。殊に大阪の金屬労働者組合、木材労働組合の全員を始め、その他の多くの戦闘的労働組合の有志諸君が神戸および京都の戦闘的労働組合や農民組合と共に、率先して賛成を聲明されたことは、どれほど私たちの意を強くしたか、測り知れないのであります。今私は茲に改めて、この會場に來り集まつて居られる諸君に、衷心の感謝と敬意とを表したいのであります。

もとより諸君の知つて居られる通りに、『提案』に對する反對聲明も、一時は雨の如く降りそそぎました。だが、それらの反對聲明が、果たして大衆的基礎の上に打立てられてゐるものであるか否かは、極めて疑はしいのであります。のみならず、それらの反對聲明のうちには、提案そのものゝ内容について、政治的見解の異同を理論的に聲明する前に、まづ慌たゞしくも個人としての提案者たちの動機を——その心術を批難したやうな、低劣極まる惡罵を無制限に浴びせかけたものが、少からず見られるのであります。しかるに諸君はこれに反して、いきなり私たちの動機を——心術を——疑つてかゝるといふやうな氣持を微塵も持合はしてゐられなかつたればこそ、先づ『提案』を大衆的討論にかけて、私たちの政治的見解を檢討されたのだと信じます。まことに、闘争するものゝ心は、闘争するものにだけ解かる。多年雨に嵐に共に腕を組んで進んで來た同志たちの頼母しさよ！ 私たちは、さうした同志たちの階級裁判によつ



てよならば、如何なる判決が下されようとも、喜んで絶対にそれに服従する。ところが、諸君が更に、その大衆的討議の結果、それに全幅の賛成の意を表明することによつて、私たちが政治的見解を同じくしてゐられることを示されたとき、私たちは二重の欣びと感激とに打たれたのであります。

だが諸君！我々が當面の客觀的状態に應じて、從來の勞農同盟の形態から、合法政黨の形態に一轉しようとするのは、たとへば今まで縦列で進んでゐた陣形を瞬間的に横列に轉換するやうな離れ技を意味するものでないか！そしてさうした分列式が、全國的規模に於て、物の見事に正々堂々と完成されつゝあることは、我々の陣營が、この二三年の惡戰苦闘の經驗のうちから、如何に優秀なる政治的技術を學び取つたかを物語るものでなくて何であるか！更にまた、我々の陣營にも今やかくの如き政治的技術が實際になつて來たのは、我々の運動そのものが、如何に現實味を帯びて來たかを——如何に現實的效果を目的とするものになつて來たかを——反映するものであるにも相違ないのであります。それはたしかに、我々の運動の上に、著るしき進歩の一線を劃したものだと思へられるのであります。

## 八

諸君！我々の新勞農黨は、全國の同志たちおよび大衆の熱烈なる期待と歡呼の下に、勞働者農民の同盟の新形態として、やがてその巨大な姿を公然の舞臺の上に押進めようとしてゐるのであります。我々は固き確信を以て、その旗の下に戰ふことが出来るのを、無上の歡びとするものであります。

といふのは、單に新勞農黨が眼前の客觀的状態に促進されて産まれ出ようとしてゐるといふことだから來てゐるのではない。我々は尙ほそれに關聯して、次の二三點を附加へることが出来るのであります。

まづ第一に、勞働者農民の同盟の新形態としての新勞農黨の實質的基礎は、わが國の社會状態の上にも既に十分に用意されてゐるのであります。この事は、舊勞農黨時代以來の我々自身の體験を通じて、我々に取つては完全に證明済みになつてゐるのであります。

のみならず、勞働者農民の同盟の必要の意識は、刻一刻、益々廣汎なる範圍の大衆の間に行き互りつゝあるのであります。既に支配階級の全面的攻勢の際限もなき激化を示しつゝある今日の客觀的状態の下に於て、勞働者農民の同盟が全被壓迫民の生活と自由とのための解放戰に於て演じなければならない役割の如何に重大なものであるかと、勞働者農民の間に於て益々廣く深く認識されて行つてゐる傾向が現はれてゐることはもとより、一般の無産市民の層に於て



も、労働者農民の闘争に積極的に参加しようとする氣勢が、層一層と強められつゝあるのでありをます。いはゆる大衆の左翼化がそれであつて我々は現に今、この會場に於ても、その迫力泌々と感じてゐるのであります。そして、かゝる大衆の左翼化が、そのまゝ新勞農黨の力に合流するであらうことは、私には毛頭疑ひやうのないことと思はれるのであります。

更にまた、——これは前にも言つたことではありますが、——舊勞農黨時代以來の我々の陣營に於て持たれた異常に深刻なる闘争經驗は、どれほど新勞農黨の活動力を充實せしめるか、測り知れないものであります。我々がその間に學び取つた組織上の、闘争形態上の、および闘争方針上の様々の貴重なる教訓は、必ずや新勞農黨の活動のうち十分に活用されるでありませう。殊に我々が最後に勞農同盟の形態の下に於ける闘争のうちから得た鍛鍊は、他の何物にもまして、我々には價値あるものであります。我々は、『嵐は強い樹を作る』といふことを、地で行つたのであります。

尙ほ、勞農同盟の形態の下に於ける我々の闘争は、右翼幹部の指導下にある大衆までを含めての廣汎なる大衆に、左翼の闘争の重要意義をはつきりと理解せしめ、そして大衆が自ら進んで左翼に對する熱烈なる精神的支持を公然表示するまでに、大衆を導いて行つた効果を擧げたのであります。大衆の左翼化が結局新勞農黨の力に合流するであらうといふことも、この點

を抜きにしては考へられないことなのであります。

今一つ別に、勞農同盟の形態の下に於ける我々の闘争は、その進展の過程に於て、消極的意味に於てははあるが、それにも拘らず根本的に重要な教訓を我々に與へました。それは、その間に我々の眼前に展開して來た新たな客觀的状態の下に於て、勞農同盟そのもの、闘争形態が最早持續され得なくなつたといふこと——若しくは最早持續されるべき價値がなくなつたといふこと——であります。否、問題はそれだけに止まらなかつた。即ち、それに附帶して、かゝる根本的な一つの命題がそこから不可抗的に生じた。即ち、我々の陣營の如き、労働者農民の同盟の基礎の上に立つ大衆團體が、當面の客觀的状態の下に於て、全被壓迫民衆の生活と自由とための解放戦に於けるその本來の任務を效果的に遂行し得るためには、どうしても民主的基礎の上に、完全に大衆の意志を反映した政治行動をなし得る組織を持つたものとならなければならぬ、といふことがそれでありました。この事こそは實に、我々のすべてが骨の髄にまで泌み透るやうな痛烈極まる經驗を通じて最後に學び取つたものであります。新勞農黨樹立の提案の必然性もそこにある。また、その提案に對して全國同志たちおよび大衆の間から噴泉の如く湧起つた壓倒的支持の必然性もそこにある。——と、かう私は確信してゐるのであります。



この一點を、もう少し次に展開してみませう。

## 九

「勞農同盟は闘争の過程に於て發展的に解消すべきものだ」といふのが、最近まで左翼を風靡してゐた一つの主張でありました。この主張は、今日から見れば、その當時の事情に基いて考へても、理論的にも疑問の餘地があり、何よりも殊に實踐的には、現實の事態が明かに指し示してゐる通りに、無論行はれなかつたのであります。だが、何と言つても、當時にあつては、さういふ問題に關する討論が、あらゆる原因から完全に封鎖されてゐた時代であつたので、我々のすべては、それに對して石の如き沈黙を守りつゞけました。それ故に、今茲でも私は、それを一つの過ぎ去つた問題として、不問に附しておくことにします。

それとは別に、労働者農民の基礎の上に立つ大衆團體は、その必要が存続する限り、大衆的規模に於て公然と活動し得る組織を持つたものでなければならぬのであります。でなければ、それはその本來の任務を遂行することが出来ないであります。單純にカンパニアの組織にしたところで、それが大衆的にカンパニアを行ふことが出来なくなれば、それは最早、カンパニアの組織の殻にすぎないものとなるのであります。

我々の現實の行動に於ては、現實の事實に何等の聯關を持たない空想は、絶対に禁物であります。嚴肅なる現實の事實は、一片の空語では掻き消せたい。創造意志——それは宜しい。だが、我々が單純に言葉の魅力に陶酔してゐられる時代は過ぎた。言葉！ 言葉！ 言葉！ 我々は今、餘りに多くの實のない言葉に悩まされすぎてゐることを感じます。我々は斷乎として現實の闘争を空虚な言葉の問題に終らせないために、寸刻も警戒の手を緩めてはならない必要を痛感するやうにさへなつて來たのであります。

ところで、我々の陣營の如き、労働者農民の同盟の基礎の上に立つ大衆團體は、大衆的規模に於て、公然と活動し得る組織を持つたものでなければならぬことは、今言つた通りであるが、それは尙ほその上に、特に當面の客觀的状態の下に於ては、必然に全被壓迫民衆の生活と自由のために強力なる大衆的日常生活闘争を全面的に展開しなければならぬといふ、抜き差しならない階級的必要に迫られてゐるのであります。だとすると、それは當面の客觀的状態の下に於て合法政黨としての形態を取らなければならぬこと、自明の事だといはなければならぬのであります。

我々は決して合法政黨萬能論者ではない。だが、我々は同時に、我々の陣營が合法政黨としての形態を取ることによつて闘争を展開して行かなければならぬ階級的必要に迫られてゐる



がら、現實とは何等の聯關を持たない觀念的思惟に煩はされて、それを拒否するといふが如きことは、あくまで非階級的な行動である、と信ずるものであります。

更らにまた、我々の場合に於ては、我々の陣營が合法政黨であるとか、でないとかは、決して中心的問題ではあり得ない。中心問題はどこまでも、無産階級の解放といふことである。合法政黨か否かは、その手段に關する問題である。そして、さうした手段は、我々の自由選擇の前におかれてゐるものである。だが、我々が一旦我々の目的への手段として、我々の陣營が合法政黨の形態を取ることが、當然の客觀的狀勢の下に於て唯一の、階級的に正しき道であることを認識した以上は我々は毫も躊躇するところなく、まつしぐらにその方向に猛進して、斷乎としてそこに解放戰の戰野を開くべきであります。この際些かでもの遲疑逡巡は、何等の現實的效果をも我々に齎らすものではないのであります。

## 一〇

諸君！ 我々の陣營は、今や新しき勞農黨として、合法政黨の形態の下に、再び公然の舞臺に進出し、全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張のために、更にその政治的自由獲得のために、大衆的規模に於ける闘争を、現實的に效果的に巻き起さうとして、滿を引いて呼吸を計つてゐる。

るのであります。否、多くの地方に於ては、久しく活動を封じられてゐた同志たちが、新勞農黨樹立の提案が發表されるや否や、急に活氣づいて猛然と蹶起し、大衆的討議によつて賛成聲明を發するなり、直ちに潑刺たる日常闘争に入つたのであります。かくて最近數個月來完全なる沈滞にあつた我々の陣營も、次第にその一角、こゝの一隅からといふ風に、ところどころから渦卷を起して、そして全體が盛に動き出したのであります。

かくの如く、提案發表直後から早くも躍進期を開始した我々の陣營は、新しき勞農黨の結黨と同時に、新たな力を以て一層效果的に新しき狀勢の上に働き掛けなければならないのであります。否働き掛けるに決まつてゐる。

さうした新しき力が何處から出て来るか？ の問題については、前に既その歴史的な諸源泉を指摘しておきましたが、今はその補ひととして、それが新勞農黨の組織形態の上に於て如何に強められる見込みがあるかについて、一言しておきたいと思ひます。

舊勞農黨時代以來暗黙のうちに脈々として發展して來た勞働者農民の同盟の基礎の上に立つわが新勞農黨は、合法政黨の形態の下に大衆的規模に於ける日常政治闘争の遂行者として公然の舞臺に進出するものと規定されてゐる以上、それは當然のこととして、黨内デモクラシーの上に基礎を持つ強力なる、獨自の指導部の下に、勞働者農民およびその闘争に参加して來る無



産市民大衆のそれらの意志を完全に反映した行動を果敢になし得るものでなければならぬのである。新勢農黨の組織方針は一切この根本精神の上におかれて居るのであります。そしてこの趣旨は、提案に於て既に述べられておりましたから、提案を支持された諸君は、十分にそれを諒解され、且つ承認されたものと、私は確信します。

更にまた、同じ根據から、諸君がすでに讀まれたに違ひない、新勢農黨の綱領草案中には、「わが黨は労働組合農民組合の擴大強化を重要な任務となす」といふ趣旨の一句が挿入されてゐます。これは、労働者農民の同盟の基礎の上に立つ我々の陣營が従来から一つの合ひ言葉としてゐた「工場へ！ 農村へ！」の表現に、確實な實行意志の伴つた一の具體的内容を與へようとする精神から出たものであります。我々は黨と組合との交互作用に關する我々の過去の實驗から出發して、更に提案を支持する同志たちおよび大衆の意志に従ひ、一方に於ては、工場農村に闘争題目を求めて向外的に大衆的日常闘争を強力に巻き起すと同時に、他方さらにその實質的基礎として向内的に新勢農黨の組織の根柢を工場農村に深く張りしめる必要を痛感するものであります。諸君に於ても、この點には異存のないことでありませう。綱領草案の當該文句の中には、表現の簡潔のために、單に「労働組合農民組合」だけが代表的に掲げられてありますが、實際に於ては、新勢農黨が擴大強化の努力を向けるのは、決してそれらのものに

限られてゐる譯ではない。借家人同盟、俸給生活者同盟、等々、その他様々の無産者團體は、みなその中に含まれてゐるのであります。新勢農黨は、さうした一切の無産團體の擴大強化をその重要な任務として取扱ひ、更にそれら無産團體の缺けて居る處では、自ら中心となつて、その創設に盡力し、他方自黨に参加するすべての未組織大衆を、それらにその地位・職業に應じて、それらの組織中に編入することによつて、全黨内に單純な街頭分子の跡を絶つことを期するのであります。さきに言つた通りに、今日に於て見られてゐる大衆の左翼化は、それを自然に放任しておいても必然に新勢農黨の力の増大に歸着するであらうが、我々は更に、我が意識的努力により、右の組織化計畫を通じて、その力を幾倍にも大きくして、極度にその能率を現實の闘争の上に發揮せしめなければならぬのであります。

かゝる用意の下に、新勢農黨は國內政治および國際政治の上に縱横無盡に働き掛け、資本家地主の政府と社會民主主義政黨とに立ち向つて必死的に戦ひ、特に産業合理化および帝國主義戦争準備が全被壓迫民衆の上に押しつける一切の搾取、彈壓、欺瞞政策に向つて敢然として闘争し、そしてさうした全闘争を政治的自由獲得闘争に集中統一せしめようとしてゐるのであります。最後に、だが最少にでなく、新勢農黨は特に帝國主義戦争反對に於て、それが用ひ得る公然の舞臺をその最大限にまで利用しつくさうとしてゐるのであります。



諸君！ その新勞農黨は、最早一ヶ月ならずして、その旗を諸君の面前に高く樹てようとしてゐるのであります。私は、諸君がさきに舊勞農黨時代以來の我々の陣營に與へられた熱烈なる支持應援をそのまま、新勞農黨の上に移して、我々と共に固く腕を組んで、新たに政治的自由獲得闘争の征途に上ほられるであらうことを希望し、期待し、確信するものであります。以上を私の今晚の挨拶といたします。(昭和四年十月)

## 同志山宣の死と我々の決意

今晚、選舉批判演說會を兼ねて我々の輝ける同志山本宣治の追悼演說會を開くに際しまして、雨天にも關らず、かくも多數の諸君が御來會下さつた此の光景を見て、私は心から感激に堪へないのであります。これは實に資本の攻勢が益々組織化され強大化されつゝある今日に於て、大衆諸君が如何に山宣の如く闘ひ、山宣の如く生き、山宣の如く死ぬる覺悟を持つ階級闘士を熱烈に要求してゐるかをまざくと反映して居るものだと思へるのであります。私達は茲に、飽まで闘争を通じて、山宣の名を不朽に記念しようといふ誓ひを新たにするものであります。日常闘争に於て、議會闘争に於て——凡ゆる闘争の場面に於て、大衆諸君と腕を組んで、どこまでも山宣の歩んだ足跡を追うて進みたい決心で居ります。

過ぐる選舉に於ても、我々は斯様な意氣込みを全力的に戦ひました。此の意味に於て山宣の弔ひ合戦は、單に京都府の第一區及び第二區に於て同志河上及び同志細迫によつて闘はれたゞけではなく、實に全國に亘つて、我が勞農黨の旗の下に戦はれたのであります。そして此の選舉戦を通じて我々が何よりも明かに見たものは、大衆の意識の生長が非常に進んでゐるといふ



ことでありました。大衆の力がぐんぐ伸びて来たといふことであります。

此の點を、より以上に考察する前に、まづ次の一事を申し上げて置きたい。それは即ち我が勞農黨が今度の選挙に於て、非常な不利な情勢の下に戦つたにも拘らず、過去の選挙のいづれの場合に較べても、決して劣つてゐない成績を挙げた、といふことであります。不利な情勢といふのは、我が勞農黨は無論、舊勞働農民黨の傳統を繼承し發展せしめてゐるものであります。が、何と云つても、我々の陣營は田中反動内閣の爲に三度までも、その組織を破壊されたのであります。さうした徹底的大弾壓の後を受けて現在の我が勞農黨が新たに結黨したのが、漸く昨年の十一月初めであります。それ以來、我々は衆議院と堅き握手の下に、ひたすら陣營の建直しに従事して居りましたが、それにしても、結黨以來三ヶ月の日数が経つたか経たない間に、今度の總選挙がやつて来たのであります。

かういふ譯で、我々は一切無準備のまゝで起つたのであります、それに我が黨は、組織の確立といふ一點だけからでも選挙闘争に或る重要意義を認めて居るのであります、然しその本質上、あくまで大衆的日常闘争を中心としてゐるものであつて、断じて單なる選挙黨ではないのであります。

それ故に我々は結黨以來、その日常闘争の方面の開拓に全力を注いで、選挙の事などを

ゆつくり考慮する暇を持たなかつたのであります。従つて我が黨の立候補者並に立候補地が略ぼ決定されたのは、やつと去る一月十八日の午後五時から六時までの間のことであります。それ以前には、實際、何等の準備もなかつたのであります。殊に資力の點に於て最も無準備であつたのであります。更に我が黨は権力に見離されて居ります。否、單に見離されて居るといふだけではなく、今日権力の壓迫を最も全面的に受けてゐるのは我が勞農黨であります。それに加へて我々は又、各方面からの、殊に反對黨からの強烈なる逆宣傳の嵐の中を衝き進んで行かねばならなかつたのであります。

かうした凡ゆる不利な情勢の下に於て戦はねばならなかつた我々の頼みとしたものは、たゞ大衆諸君の熱烈なる支持應援以外には、絶対に何物もなかつたのであります。而も大衆諸君の支持應援に對する我々のこの期待は完全に酬いられました。即ち我々は十三名の候補者を立て、成程只一名の當選者をしか出さなかつたが、しかし約八萬票の總得票数を舉げることが出来ました。一人當りの平均得票数が六千以上に上つてゐる。これを舊勞働農民黨が、一昨年の總選挙に於て、四十名の候補者を立て、約十九萬票——一人當りの平均得票数は約四千七百——の總得票数を挙げたのに比べると、相當の好成績といへるのであります。もとより斯る比較は決して多くを語るものではないが、しかし何物かを語るものである。尠くともそれは、我



が勞農黨の勝利を語るものであります。だが、その勝利が大衆諸君の貴き協力に依つて得られたものであることを考へる時、それは決して單に勞農黨だけの勝利ではなくて、實に大衆諸君の勝利だといはなければならぬのであります。如何にも我が黨の總得票数は、既成政黨のそれに較べれば、百分の一にも充たないことは事實である。だが無産階級は政治的にも何等の既成勢力を有たない階級である。只一つの確實な選舉地盤をさへ有たないのである。それが過去四十年間に選舉地盤の網を全國に張廻して來た既成政黨に對抗して、我が勞農黨を通じて、あれだけの成績を挙げたといふことは、たしかに或る程度の勝利であります。かくて我々に依つて得られた一票は、彼等にとつては失はれた一票であります。従つて我々が將來への見透しの上立つ時、我々が得た一票は、既成政黨が得た幾萬票にも値ひするものだといはなければならぬのであります。無産階級は必然に未來を支配する地位に置かれてある新興勢力であります。之に反して資本家地主の階級は、刻々没落の道を辿りつゝある舊勢力であります。これは選舉の直接効果といふことを離れても、當然いへることなのであります。

更に注意すべきことは、我が勞農黨は過ぐる選舉に於て、その戰闘的左翼としての立場を一分一厘割引なしに大衆の前に高く掲げたのであります。我が黨が選舉に際して示した中心スローガンは、「解雇・賃銀値下絶對反對」「失業者に食と仕事を與へよ」「土地を農民へ」以下「帝國主

義戰爭絶對反對」に至るまで、一つとして戰闘的勞働者農民の眞の要求を反映した我が黨の立場の表明でなかつたものはないのであります。そして全大衆諸君は此の立場の故にこそ、あれほども熱烈に我が黨の旗の下に來り集つたのであります。我々はそこに、大衆の意識の生長を最も明かに看ることが出來たのであります。又そこに我々は、「大衆は最も信頼すべき最後の審判者である」といふ我々の從來の確信が完全に裏書されたことを見たのであります。

此の點に於て、社會民主々義政黨の幹部諸君は、我々とは根本的に態度を異にして居られる。彼等のうちの或る人は、自己の落選に關聯して、「日本の無産政黨が政治的に進出するのは未だ早過ぎる」といふやうな事を述べられた。又他の或る人は矢張り自己の落選に悲觀して、「民衆は何故眼醒めてくれないのか」といふやうな流言を並べられた。だが、實をいへば、民衆が眼醒めなかつたのではなくて、眼醒めなかつたのは、さういふ社會民主々義政黨の候補者諸君であつたのである。民衆が眼醒めてゐたればこそ、彼等に投票を拒んだのであります。政府及び既成政黨は、如何にも盛に干渉や買収の手を伸ばして、而もそれが非常な効果を挙げたことは事實であるが、然し我々から見れば、さうした干渉や買収の齒が立たない票數が過去二年間に幾萬もふえたといふことが心強く感じられるのである。金力や権力も大衆の意識の生長を妨げる事にかけては結局全然無力であるといふことが、それに依つて十分に證明されたのだ。



誠にエンゲルスがいつた通りに、選挙は「大衆の意識のバロメーター」であるといふことを、我々は泌々と味つたのであります。

社会民主党義政黨の幹部諸君は、今回の選挙の結果を見て、無産黨の惨敗だといつてゐます。何故かといへば、前回には八名の無産黨議員が選出されたのに、今回はそれが五名にまで減らされたからだ、といふのであります。だが單に當選した無産黨議員の數だけを見て、無産黨の勝敗を云々するのは、我々から観れば明かに間違ひであります。無産黨議員が議會外の大衆と結び附くことなしに單獨に行動する時には、いくら多數の無産黨議員が出て、何等の無産階級的意義のある仕事が出来るとは言へないものであります。たとへば今假りに二十名の無産黨議員をブルジョア議會に出した所で、その場合にも尙、四百四十六名に當るブルジョア議員が議席を占めてゐる譯であるから、それに對して太刀打ちの出来ないのは無論のことです。否、假りに無産黨議員が議會内の絶對多數を占めた場合を想定しても、その時でも、議會外の大衆との結び附きなしには、只資本家地主の政黨の事務を代行するより外はないのであります。その一つの活きた適例は、現にイギリスのマクドナルド内閣に依つて示されて居るのであります。それ故に我々は、無産黨議員の數を云々する前に、先づ無産黨議員と大衆との結び附きを見なければならぬのであります。これが我が勞農黨の自黨選出の議員に對する根本態度

であります。我が黨の議員は、我が黨が指導する大衆闘争の尖端として議會に入るものであります。勞働者の工場に於ける闘争、農民の地主に對する闘争、街頭の大衆の有りと凡ゆる日常闘争、等々々。我が黨の議員は斯る闘争を議會に持込み、議會外の大衆の一觸手として議會内の闘争を展開するのであります。此の意味に於て、我が黨の議員は、議會内に於て個人的に行動をするのではなくて、議會外の大衆の意志を反映して行動するのであります。我が黨は自黨選出の議員の數を見るよりも、先づ第一にその議員の議會外の大衆との結び附きを重要視するのであります。

社会民主党義政黨の幹部諸君の態度はさうではない。彼等は無産黨議員の數の減つたのを見て、これは一大事とばかりに狼狽してゐるのであります。そこで彼等は將來無産黨からもつと澤山の議員を選出し得る爲に無産黨の合同が何よりも必要だと云ひ出したのであります。

無産黨の合同——無論、資本家地主及びその政府政黨と、より強力に闘ふための無産黨の合同ならば、我々は心の底から望んで居ることであり、であればこそ、我が勞農黨は結黨大會で採用した綱領の中にも、「我が黨は無産階級戦線統一の實現を期す」と叫んで居るのであります。これは我が勞農黨の公に掲げた旗印の一つであります。然も我が黨は近く各無産政黨に向つて合同の提唱をする準備をさへも持つてゐるのであります。だが、我が黨が企てゝゐる合



同は、飽くまで資本家地主とその政府政黨と強力に戦ふ爲の合同であつて、一人でも多くの代議士を出さうが爲の合同では断じてないのであります。

斯る意味に於ける無産黨の完成を確保する爲に、我が黨は合同の結果として出来上がるべき新黨の内部に於ても、どこまでも批判の自由を留保しようとしてゐるのであります。即ち我々は、新黨の内部に於て、單に我々自身がその新黨の幹部の指導方針や指導的行爲を自由に批判しようとしてゐるばかりではなく、黨内の全大衆が自由にそれをしなければならぬといふことを主張してゐるのであります。これは黨内デモクラシーの原則から見ても、無産黨としては當然過ぎる主張であります。然も斯る當然の事を特に取立て、いはなければならぬのは黨内批判の自由がない場合には、新黨が社會民主主義幹部の非闘争的・協調主義的・態度・方針に依つて指導されるかも知れない危険が全然ないとはいへないからであります。

然も我々は、無産階級戦線統一に對して熱心と誠意を持つてゐるが故に、その黨内批評の自由を合同の條件として持出すことをしないで、單にそれを我々の態度の表明としてのみ持ち出してゐるに過ぎないのであります。即ち我々は、「新黨が本來の目的を離れて非闘争的・協調主義的・態度・方針によつて指導されるならば、我々は假借なき暴露と批判に依つてそれを牽制し矯正して行くぞ」といふ我々の意圖——我々としては餘りにも當然の意圖——を表明してゐる

に過ぎないのであります。然るに社會民主主義政黨の幹部諸君は、我々のその主張が合同の妨害になるといつて、しきりに我々を非難してゐるのであります。だが大衆が眞に要求する合同を妨害するものは、實はさういふ彼等であつて断じて我々ではないのであります。彼等が黨内批判の自由といふ無産黨としては當然の主張にすらケチをつけるのは、つまり彼等が大衆の審判を恐れるからであります。彼等が大衆の審判を恐れるのは、結局彼等が大衆を信頼しないからであります。

我々の同志山宣は社會民主主義政黨幹部諸君の斯る態度に對しては、熱火の如き糺弾の叫びを擧げました。顧みれば昨年三月四日、——即ち彼が暗殺された日の前日彼は大阪に於て開かれた全國農民組合の第二回大會に於て試みた祝辭演説の中で、所謂無産黨議員團の非階級的態度を難詰した後に次の如き歴史的に記念されるべき言葉を吐きました。「山本宣治只一人孤壘を守る。私は一人でも淋しくない。私の背後には大衆が支持してゐるから。」

此の言葉は單に同志山宣の壯烈なる覺悟を示したばかりではなく、同時にまた、我が黨議員と議會外の大衆との關聯を最も明確に言ひ放つたものであります。彼のブルジョア議會内に於ける地位は、外面的には全然孤立的であつた。だが彼は議會外の大衆に飽くまで信頼をかけてゐるが故に「私は一人でも淋しくない」といつたのであります。彼は心底からさう信じてゐるた



であります。だからこそ彼は、最後の瞬間まであれほど勇敢に、階級的行動に終始一貫するこ  
とが出来たのであります。資本家地主とその政府政黨は飽くなき憎悪を彼の上に注いだ。だが  
労働者農民は、その資本家地主の憎悪に千萬倍する信頼を彼の上に繫いだ。それ故に彼の死  
後、日を経ればふるほど彼に對する労働者農民の記憶が益々鮮明になつて行くばかりなのであ  
ります。

山宣が三月五日に殺されたのは、偶然のやうに考へてゐる人もあるが、しかし彼に取つては  
それは今から考へると、全然豫期以外の出来事ではなかつたのであります。昨年二月二十四  
日の夜の事でありました。私は彼と共に當時本所から市會議員選舉に勞農同盟から立候補した  
赤城壽仙君の爲に本所の或る小學校で應援演説をして歸りに同じ自動車に乗つて色々の話をし  
ながら、上野驛まで来て、そこで袂を分ちました。その別れ際に山宣は、強い聲で私にかう囁  
きました。「愈々三月五日には治安維持法が上程されることになりましたが、私は喉を締められて  
聲が出なくなるまでやります。若し私の演説が喉を締められずに終るやうなら、それこそ慘憺  
たる失敗です。」

これ程の覺悟を持つてゐた山宣も、遂に三月五日には再び社會民主主義代議士たちによつて  
登壇を妨げられて、その無産階級抑壓の惡法中の惡法、前衛死刑法、治安維持法に向つて、戦

闘的労働者農民の憤怒と糾弾の聲を議會の演壇から爆發せしめる機會を永遠に失つたのであり  
ます。社會民主主義政黨の幹部諸君は、口先でどれほど階級的な言辭を弄しようとも、結局本  
質的に帝國主義ブルジョアジーの協同者であることは、此の一事によつても證明されてゐるの  
であります。それ故に今後いつかは無産政黨の合同が實現される時が來ようとも、その合同の  
結果としての新黨を指導するものは、山宣の如き勇敢なる階級闘士及び階級的に眼醒めた戦闘  
的大家でなくてはならないのであります。

今や大家の意識のめざましき生長を見て來た我々、更に大家の力のぐんぐ伸びて來たのを  
見て來た我々は、「大家の時代來る」との叫びを擧げざるを得ないのであります。大家の解放戦  
の最後の勝利は、我々には動かす可らざる確信となつて來てゐるのであります。我々は或は大  
衆諸君と共にその日の喜びを分つことが出来るかも知れない。或はまた、反動の嵐の吹き荒れ  
て黒雲が四邊を掩うてゐる今日、我々はその前に白色テラーの犠牲となつて山宣の如く倒れる  
かも知れない。だが、よしその前に倒れようとも、その時には我々はきつと大家の輝かしき將  
來の勝利の行進を眼前に描き、歡喜に胸を躍らせつゝ聲の限りに「大家萬歳！」を叫びながら  
靜に瞑目する幸福を持つことが出来るであります。



## 大衆の行進を見る

此たび我が労農黨は東京第五區に於きまして、もう既に諸君も知つて下さる通りの勝利を得たのであります。だが、我々の此勝利は單に勞農黨だけの勝利ではなくて、全大衆の勝利であると確信するのであります。(拍手)

勞農黨が東京に立候補を定めたのは去る一月十八日の午後五時から六時の間であつたのであります。それより前は色々の考へから或は立候補をしない方が宜いと云ふ議論もあり、香川から立候補すべきであると云ふ議論も出て居つたのであります。又、大阪の勞働者諸君は私が大阪に於て勞働者大衆の支持の下に立候補すべきであると云ふ意見を主張したのであります。

だが、立候補しないと云ふ議論は直ぐ破れて仕舞つたのであります。香川から立候補すると云ふことは、是は非常に有力な議論であつて、私もそれを願つて居つた。即ち我が勞農黨は飽く迄、香川奪還の爲に戦ふ、と云ふ意味から言つても、香川から立候補と云ふことは可なり有力な議論であり、他に理由がなければ當然さうすべきであつたことは云ふ迄もないことでもあります。

然るに現在、香川の農民は非常なる彈壓の下に——若し斯う云ふ言葉が使はれるならば——即ち、萎縮して居る。勞農黨が彼處で前回に立候補をし、彈壓を受けて以來、香川の同志は可なりの苦境に立つて居る。立候補しても運動員になる人がない、我々が此方から運動員を組織して行かなければならない。五十人百人の運動員を提げて香川へ行くと云ふ旅費滞在費は我が勞農黨の資力を以てしては到底辨じ得られない。のみならず、今度又我々が選舉を行つたならば、香川が更により彈壓の下に置かれる、さうして一層の苦境に陥らしむると云ふ懸念もあつたのであります。

さういふわけで、第一に財力の問題が一つの躓きとなり、又香川奪還と云ふことは勞農黨の闘争力を充實せしめてからでなくては成し得ないことであるから、寧ろ政治の中心である所の東京に於て勞農黨の組織を確立し、闘争力を充實せしめたならば、香川奪還と云ふことも實際の問題と爲すことが出来るであらうと云ふ議論が中央委員會に於て勝を占めたのであります。

東京こそ我が勞農黨の組織を確立すべき所である。殊に東京の近郊は段々工場地帯として發展しつつあり、我々は飽く迄、工場勞働者の支持應援の下に立たなければならぬ。選舉は勞働者諸君に我々の立場を訴へる最も宜き機會である。斯う云ふ意見から東京で立候補すると云ふことが定められたのであります。



選挙が始まるや全黨員の非常な努力は集注された。だが、全黨員の努力があつても、大衆諸君の熱烈な支持援助がなければ勝利に導くことは出来ない。而も我が労働農の左翼的立場を理解するには大衆の意識の成長がなければならない。だが我々は知つて居つた。大衆の意識は年々成長して居る。殊に東京はその點に於て著しく目立つて居る。大衆と共に戦ふならば、我々の闘争を勝利に導くことが出来ると思ふ確信を以て選挙に臨んだのであります。

我々は舊労働農民黨時代から考へて居つた。大衆こそ信頼すべき最後の審判者であると。今やこの確信こそ過らなかつたことをしみじみ知ることが出来たのであります。

我々は此の總選挙を行つて居る間に、大衆の力と云ふものがめきめきと伸びて来て居るのをまざりと見ることが出来た。即ち、此の大衆は最早や盲目の大衆ではない。自己を自ら意識する大衆である。それを知つた時に、我々は斯かる大衆と手を取つて進むことが出来る喜びに燃えたのであります。(拍手)

現在、大衆の前には其意識を成長せしむる幾多の懸案がある。其一つとして金融資本家の爲に金解禁が断行せられ、大衆の日常生活は恐慌化して居る。

現政府は屢々金解禁の後にこそ其處に晴れやかな日本を實現することが出来ると云ふ宣傳をやつて居るのであるが、事實に於ては大衆の生活苦は愈々深刻化し益々暗くなりつゝあるので

はないか。此時に如何に晴れやかな明るい日本が出現すると口を酸っぱくして言つても、政府の宣傳を裏切つたそれは空宣傳であつたことか明かになつたと思ふのであります。(拍手)

金解禁後は不景氣が続くと云ふことは、どの政黨も言つて居ないことではないが、其言ひ方が非常に違つて居るのであります。不景氣に対する見方が既成政黨と我々は非常に違ふ。

政友會は「不景氣は金解禁より」と言つて居る。「犬養か濱口か」と云ふこともあれば「景氣か不景氣か」と云ふスローガンもあつた。景氣と云ふことは政友會の責任であるかのやうに言つて居るのであります。

だが實際は不景氣は民政黨だけの責任ではない。大正九年に始めて不景氣の浪が打寄せて来たあの時に、時の政府は何と言つたか、此不景氣は一時的のものである。暫く待つて居れば體ては直る、一陽來復の春が來ると言つて居たのであります。

所が幾ら待つて居つても直らない。其間に政友會が内閣を組織し、或は民政黨、其後を受け政府は代つたが、民政黨にせよ政友會にせよ、何れも民衆の生活を苦しめるやうな政策を續けて行つて居る、内閣は代つても景氣は直らないと云ふことを民衆は知つて居る。政友會が言ふ如く、不景氣は民政黨だけの責任ではない、資本家のみの利益を計る民政黨政友會の協同責任であると我々は言ふのであります。(拍手)



又、民政黨の濱口首相は、此間、日比谷の公會堂の演壇の上から斯う言つた。金解禁後の不景氣と云ふものは、是は安定せる不景氣である。前途に光明の認められる不景氣であり、努力の仕甲斐のある不景氣であると言つて居られる。嘘のやうな話であります、あの日の夕刊を御覽になれば確かに書いてゐる。

諸君、一體、安定せる不景氣と云ふのは、どう云ふ不景氣を言ふのか、不景氣に安定されては堪つたもんじゃないと思ひます。(拍手)

更に此の不景氣は前途に光明を認めると言つて居るが、我々民衆は前途に光明なんか認めて居やしない。若し光明を認めるものとするならば、それは民衆自身の團結に依つて持つて來なければならぬものである。努力の仕甲斐のある不景氣と云ふのは、濱口内閣は組閣以來屢々緊縮緊縮と言つて居るが、内閣の宣傳に乗つて、緊縮して幾らかの金が溜つたかと思ふと、民衆は高い家賃と高い生活費に搾られ、残りは高い税金に持つて行かれて仕舞ふ、何處に努力の仕甲斐があるかと言ひたいのであります。(拍手)

斯う云ふやうな状態の下に於て、光明のある不景氣であるとか、何とか、太平樂を並べ得るのは、唯濱口首相一人か、若しくは背後の金融資本家であると斷言することが出来るのであります。(拍手)

今は失業の浪が世界を荒して居る時である。世界の何處に行つても失業問題が中心問題となつて居る。私は統計を擧げて申したいけれども其時間もないから、唯不景氣と失業が世界を荒狂つて居ることを言ひたい。殊に失業問題が世界の勞働者を悩まして居る。

濱口首相は斯う云つて居る。金解禁と共に金制度に復歸するのだ、日本の經濟は世界の經濟と同じ基礎の上に立つやうになる。即ち世界の經濟と一つになつて流れるのだ、何と素晴らしいものではないかと鼻高々と言つて居られるが、世界の經濟と云ふものが、民衆經濟の搾取の上に立つて居るものであることは、言ふ迄もない。斯う云ふ世界經濟に合流することは無産階級の立場から見て喜ばしいことでも素晴らしいことでも何でもないと言ひ得るのであります。(拍手) さう云ふことを言ふてメートルを上げて居るが、彼等既成政黨の人も金解禁の善後策として失業問題が最も重要な問題であることを認めては居る。それは濱口首相も犬養政友會總裁も善後處置とか何とか言つて騒ぎ廻つて居るが、金解禁の善後處置がそんなに重大問題と眞實考へるならば、何故もつと早く其ことを考へてやらなかつたかと責めたいのであります。(拍手)

而もこの善後處置と云ふことに就てどう云ふことを云つて居るか。彼等は屢々難かしい言葉で物を言ひます。産業の合理化、能率の増進、貿易の進行だとか、やれ規格統一だ、資本の單純化なんと云ふことを持出す。



民衆はさう云ふことを聞いても分らない。何處に自分達の生活と関係があるか、さう云ふ言葉は金融資本家の言葉であつて、断じて民衆の言葉ではないと認めるのであります。(拍手)

金解禁、産業合理化と云ふ言葉は非常に美しいが、其實は中小工業を大きなものに合同し、金融大資本家の統制の下に置き、さうして能率的にする爲に宜い機械を据着け、物を製産すると云ふのであります。

斯くして労働者の負擔を軽くし、労働賃銀を増し労働時間を短縮すると云ふのならば話は分る。だが事實は反對である。能率的なれば労働者の数は少くとも用は済む、多数の労働者は投出される、労働賃銀の切下げ、労働時間の延長と云ふことになるのであります。(拍手)

斯くして生じた所の失業者は産業の豫備軍となつて工場労働者が労働賃銀の値上げ、労働時間の短縮をしろと爭議を起した場合には、外の失業者は爭議破りをするに云ふことになる。さう云ふことをして益々工場内の労働条件を悪くする。是が産業の合理化であり、産業の合理化をやつて労働者の生活を樂にするのならば宜いが、其結果として忽ち労働賃銀の切下げ、労働時間の延長と云ふことになり、生活條件は益々悪くなるのである。

資本家の立場から見れば産業の合理化であらうが、労働者の立場から言へば不合理はより甚しきはなしと言はざるを得ないのであります。(拍手)

濱口首相は解散の日の施政方針の演説の中で斯う云ふことを言つて居られる。政府は失業救済事業を大いにやつた、所謂事業調節委員會と云ふものを設けた。六大都市に土木事業を起した。冬の間の失業救済をやつたと云うて效能を述べられたのであるが、濱口首相が何と言はれようとも、日本全国の津々浦々に失業者が満ちて、食と仕事を與へよと悲壯な叫びを上げて居るのであります。本當の失業救済をやつたと云ふならば、失業者が一人もなくなつたと云ふ具體的な事實を示して貰ひたい。

實際の状態と何等の關係のない失業救済をやつたやつたと言つて自慢した所で、我々民衆には何の足しにもならぬのであります。

如何に政府の政策が美しくとも、それが抽象的な言葉に止つて居る間は、民衆を僞瞞する力が失つて居ると断言することが出来るのであります。政府の美しい言葉に反比例して民衆一般の生活は益々苦しくなつて居るのである。今や民衆は既成政黨の力に頼ることは出来なくなつた。殊が大衆の意識の成長して居る都會に於て……我々は彼の東京の第五區に於て見る事が出来たのであります。(拍手)

我々は斯う云ふ社會状態に處して農民無産市民實際の被壓迫民衆の生活を尊重し擁護し政治的自由を獲得すると云ふスローガンの下に戦つたのであります。全大衆の生活を擁護する戦ひ



こそは、全大衆が熱烈に要求して居る所のものであることを確信するのであります。

此立場から我々是我々の政策に掲げてある通り、現實の生活から出發した所の幾多の要求がある。之を貫徹する爲に突進しなければならぬ。今日全大衆の要求を掲げて叫んでも、我々は言論、集會、結社の自由を奪はれて居る。之を獲得しなければ我々の目的を貫徹することが出来ない。此立場から我々は政治的自由を獲得しなければならぬと云ふことを政策に掲げて居るのであります。即ち言論集會出版結社の自由を得て、更に進んでは無産階級運動を妨げる凡ゆる悪法、治案維持法の如き無産階級運動の上に非常に重い衝を懸けて居るものを撤廢しなければならぬと叫んで居るのであります。それから其戦ひを非常に力強く進める所の労働組合農民組合(辯士注意)……我々は我々の闘争力を充實せしめて、更に進んで前衛の力を強め労働者、農民、小市民、殖民地大衆、凡ゆる被壓迫民衆の要求を掲げて正々堂々と戦ふのが我が労働黨の立場であると申し上げたいのであります。(拍手)

細民諸君を我々は何時も被壓迫民衆と申して居りましたが、この被壓迫民衆こそ今日の新興勢力であると云ふことを確信するのであります。(拍手)

斯くして我々は全大衆諸君と手を聯ねて戦つたが、更に纏て臨時議會は開かれるであらうが、我々の日常闘争は議會に移るのであります。我々は全大衆の自由と生活の爲の闘争を議會に進め

ることは言ふ迄もないことであります。殊に此際民衆の負擔の上から財政問題に關して諸君と共に戦はなければならぬと云ふ決心を持つて居るのであります。

日本の財政は年々膨脹して居る。大正元年の日本の一般會計に於ける歳出と云ふものは僅かに六億圓程のものであつたのでありますが、最近二三年間に於ける豫算は十八億圓にも及ぶやうになつて來た。其處に濱口内閣が現れて「緊縮々々」と叫んで、日本の財政を緊縮したと云ふ政府の豫算を見ると、名は緊縮であるけれども、十六億二千萬圓と云ふ金額を掲げて居る。其内容を見れば資本家擁護の豫算である。民衆を顧みない豫算に眞の緊縮豫算なんかある筈のものでないと斷言するのであります。

豫算の税金を見ると資本家の負擔になるものは非常に少い、資本金子税と云ふものを合算しても三億六七千萬圓、税金全體の三割五分程にしか當らない。之に反して貧乏人労働者農民が負擔すべきものが非常に多い。間接税は皆さうである。酒税二億三千万圓、織物消費税三千五百萬圓、砂糖消費税七千八百萬圓、其他清凉飲料税、關稅、是等を合算すれば六億七千万圓、税金全體の六割二分。

斯くの如く貧乏人に多く金持ちには少なくなつて居るのを見て、日本の税制には非常な階級性がある。この税制の階級性を撤廢せよと叫ぶのであります。其處で我々は殊に生活の必需品



に掛かつて居る所の間接税、消費税を撤廃せよと叫ぶのであります。(拍手)  
 民政黨は之に似寄つたことを言つて居る。生活の必需品に掛かつて居る税を軽くせよと言つて居るが、是は明かに彼等の偽瞞である。斯んなことを言つて色んなからくりで民衆の負擔を重くすることも出来るのである。事實彼等は鐵の關稅、木材の關稅を引上げて産業資本家の利益を計らうとして居る。間接税消費税の撤廢と言はずに輕減と言つて、民衆を偽瞞し關稅を引上げて資本家の利益を與へる意圖であることは明かに言へようと思ふのであります。一般の生活をよくすると云ふ口の下から斯う云ふ偽瞞をやるのであります。

政友會も減税々々と言つて居る。犬養總裁が日比谷の演壇の上から減税を叫んだ、此際五千萬圓の減税をする必要があると云ふやうなことを言つて居ります。

諸君ゴマ化されてはならない。漠然と減税と言へば、それは地主資本家の減税であるか労働者、農民の減税であるかを考へることを忘れてはならない。資本家地主の減税ならば誰が其穴を埋めるか、更に更に民衆の負擔を重くして其穴を埋めようと云ふのか、我々は之をも偽瞞政治であると斷言するのであります。

我々勞農黨のスローガンには斯う言つて居る。税金は資本家地主が負擔せよ。ときつぱり言つて居るのであります。一片の胡魔化しもない。而して日常生活を苦める間接税消費税を止め

て資本利子税と云ふものを増徴せよ。日本の税金の中に資本利子税と云ふものがある。それは資本家の儲けに掛かる税である。三井、三菱、住友、大倉など云ふ澤山の金持が寄つて集つて大きな何億圓と云ふ儲けの中から一年に一千六百萬圓と云ふ人を馬鹿にしたやうな税金しか出さないのである。

それだからこそ日本の政治は資本家の支配下にあると我々は言ふのであります。資本利子税を増徴し所得税、營業税の免稅點を引上げよと叫ぶのであります。(拍手)

所得の多い割合で税金を取れ、斯くすれば貧民の税金を撤廢しても其穴を埋めて、尙餘りありと云ふことを確信するのであります。

既成政黨は言ふかも知れない、勞農黨の言ふことは尤ものやうだが、それは口先だけのことで實行は無理であると言ふのであるが、一體、資本家地主から税を取るのと、何も持たない労働者農民から搾るのは、どつちが無理であるか、と言ひたいのであります。(拍手)

又、彼等既成政黨の政治家は勞農黨は政治の経験がないと言ふ、そうして政治はむづかしいものであると言ふが、ない所から金を取つて、ある者の利益を計らうとするからむづかしいのだ。

本當の政治と云ふものは、正しい政治でなければならぬ。筋道の立つた政治は明瞭簡單なも



のである。資本家地主と妥協しないで、無産階級の爲の政治を行ふならば、政治なんと云ふことは朝飯前の仕事であると断言するのであります。(拍手)

さう云ふ立場から臨時議會に於ては現内閣の豫算を批判しなければならぬのであります。緊縮一點張りの偽瞞を暴露しなければならぬ。緊縮々々と云うて何を緊縮したか、陸海軍の費用に何處に緊縮があるか、又大藏省費でも三億圓以上の豫算を計上して居る。文部省の費用でも非常に増して居る。一體何の爲に増えたかと言ふと、軍事教育だの教化總動員だの餘計なことをして居る。斯んな餘計なことをしないで國民の負擔を軽くした方がどれだけよいか分らないと言ひたいのであります。

第一、現政府は機密費を撤廢して居ないではないか、是こそ罪惡政治の結晶である。田中大將の三百萬圓費消事件が起つた時に、斯くも腐敗した背任があるかと言つて驚いたのに、明るい政治を宣傳して居る現政府は、此最も暗い機密費を何故撤廢しないか、と言ひたいのであります。(拍手)

諸君、政友會内閣が潰れ、濱口内閣が變つた時に、彼等は政友會の作つた昭和四年の豫算の彼方を削り此方を削り、九千萬圓の節約をしたのであります。即ち政友會の爲になりさうな事業は削減して仕舞つた。だか、機密費はどうしたか、機密費には一錢の手も着けないではない

か。曾て政友會を利益した機密費は又民政黨を利益する機密費であることは断言出来るのであります。(拍手) 是で以て何處に明るい政治があるかと思ふのであります。彼等の言ふ緊縮豫算には資本家地主の利益には緊縮した所は少しもない。我々は之をあべこべにして民衆の利益の爲に緊縮を行はなければならぬと考へるのであります。

民政黨は義務教育費の國庫負擔などと言つて地方の負擔を軽くするなどと言つて居るが、地方からの税を取つて来て又其方へ持つて行つた所でプラス・マイナス零ではないか。本當に教育を重んずるならば、義務教育の機關を完備増長せよと言ひたいと思ふのであります。

今日、富豪の子供は樂に完備したよい教育を受けて居るが、勞働者貧民の子供は不完全な教育機關の下に教育を受けて居る。之を平均して仕舞へ、さうして義務教育を完備せよと主張するのであります。

其外言ひたいことは幾らでもある。今日は失業問題が眞剣な問題となつて居る。失業救済と云ふことを言葉だけでなく、本當の救済をせよ。第一に失業保険を制定せよ。或は失業者の生活を國家で保障せよ、又簡易宿泊所等の機關設備を完備増長せよ、民衆の利益になる事業は幾らでもある。斯う云ふ事業をしないで緊縮々々と言つて居るのは彼等の胡魔化しである。民衆の利益になる事業を起して其費用を地主に負擔せしめるやうな豫算を組むならば、日本の國費



が小々位膨脹した所で我々は攻撃はしないと云ふことを断言するのであります。(拍手)  
 彼等は緊縮々々と美名を立てゝは居るが、其實は民衆の負擔を益々重くして、其負擔に依て資本家地主の利益を擁護しようとして居る。斯う云ふ豫算を作るから、絶えざる不平不満がある。我々はさう云ふ豫算に向つて断乎として戦ふのである。何處までも戦ひます。

勞農黨は微弱であつて、十分なる戦は出来ないかも知れないけれども、大衆の要求を本當に叫ぶ時には、其處には何時も熱烈なる支持應援があるのである。勞農黨は微弱なりと雖も熱烈なる大衆の支持應援の下に立つ時には、何時までも資本家地主既成政黨と戦つて、必ず民衆の勝利に迄持ち來すことが出來ると云ふ確信を持つて居るのであります。(拍手)

それであるから我々は大衆諸君の前に現れて我々の立場を訴へることを非常な喜びとして居る。勞農黨の政策は唯勞農黨だけの政策であつてはならない。大衆諸君の政策でなければならぬと確信して居るのであります。(拍手)

而して政策は必ず實行されるものでなければならぬ。幾ら美しい政策を掲けてもそれが虚構的のものであり實行が出来ないものであつてはならない。

だが或る政黨の掲げて居る政策が實行されるかされないかと云ふことの基礎は何處にあるかそれは其政黨の過去の歴史にあると思ふのであります。

此點に於ては、我勞農黨は聊か諸君の前に誇り得る過去の闘争歴史を有つて居ると思ふのであります。我々は常に口で言ふことは實踐して参りました。

勞農黨の過去三年間に於ける大彈壓の下に進んで來たことは、是は口で言ふことを實踐して來たからであると確信する次第であります。

諸君、幾ら無産黨でも未だ曾て支配階級の彈壓を受けない政黨——さう云ふ政黨は民衆諸君の嚴密な批判を受けるべきではないかと考へるのであります。(拍手)

諸君、我々は大衆諸君の前に現れる時に、昨年の議會開會中に壯烈なる最後を遂げた我々の闘士山本宣治を思出す……我々の同志は京都で山本宣治の葬ひ合戦をやつた。本當のことを言ふと山宣の葬ひ合戦は全國に亘つて永久に行ふものであると申し上げたいのであります。

彼山本宣治は、口で言ふことは必ず實行すると云ふ勞農黨の精神を具體的に代表したのである。

彼は無産大衆の爲に戦ひ倒れたのである。

彼こそは實に日本の解放運動史上輝ける不朽の記念碑を立てたのである。

我々は飽く迄も此同志の後を追うて進む確い信念を持つて居る。

私は勞農黨の一黨員として飽く迄此精神で進むことを誓ふ。



がだ諸君、私をして一個の大山として終ることなく、又單に勞農黨の大山として終ることなく、全民衆の大山として大山の立場を諒解して下さいと御願ひして置きます。我々は大眾諸君の前に大眾の利益の爲に戦ふことを誓つた。

私が大眾諸君を裏切れば私は大眾諸君の手に掛かつて殺されるであらう。

私は大眾諸君を裏切り大眾諸君の手に掛かるよりは、大眾諸君の利益を叫び支配階級の手に掛かつて鮮血に塗れることを願ふのであります。(拍手)

此決心を以て民衆の戦ひを進めます。どうか諸君の熱烈なる支持應援を希望して此壇を下ります。(拍手)

## 東京第五區の勝利は大眾の勝利だ!!

選挙戦の渦中から、私が最も多く叫んだ言葉は「大眾の壓力」「大眾の意識の生長」「大眾の時代來る」等々でした。私はさう叫ばざるを得なかつたのです。否大眾が私にさう叫ばせたのです。さうした言葉は、私においては決して抽象的概念ではなかつたのです。大眾との實際の接觸から得られた具體的事實の認識だつたのです。そして、それが今の私の確信となつてゐるのです。

私は信じてゐる、大眾の心を知るといふことは新時代の魂をつかむといふことである、と。だが、大眾の心といふものは、大眾を離れて大眾の上からのぞいてゐるは、決してわかるものではない。大眾の中に没入し、大眾と共に行き、大眾の悩みを悩み、大眾の叫びを叫び、大眾の要求を要求し、大眾の戦ひを戦つてこそ、始めて大眾の心が理解できるのです。

x

過去三年間私は絶えず大眾の波の中を泳いで來ました。初めは私は、大眾の前に立つたとき私の心にある種の戦慄を感じました。間もなく、大眾は私に親しきものとなりました。今では



私は、私自身を大衆の小さき一片として意識することが出来るやうになりました。大衆の前に立つとき私は勇み立ちます。そして、大衆の頭となり、口となり、手となることに無上の喜びを感じます。それから今度の総選挙です。今度といふ今度は、私は比較的短期間に異常の數に上る大衆に接觸しました。それは恐らく、前後を通じて十五萬人に上つたでせう。それだけの大衆に三週間にわたつて間斷なく呼びかけたのです。多い日には約一萬五千人に呼びかけました。少い日でも、二三千人には呼びかけました。私はさうした大衆と共通に心臓の鼓動を感じたのでした。そして、その大衆が私の——否、わが労働農民黨の勝利を得させてくれたのでした。それ故に私は、東京府の第五區における我々の勝利は單にわが労働農民黨だけの勝利ではなくて、全大衆の勝利だといふのです。無論私は、この大衆の勝利を此上もなく高く評價してゐます。

x

今度の総選挙では、わが労働農民黨は考へ得られる限りの不利な情勢の下において戦ひました。第一に現在のわが労働農民黨は、舊労働農民黨の戰闘的傳統の繼承者だといへ、田中内閣の手による徹底的大弾壓の後を受けて新に結黨したのが、ヤツと昨年十一月の初めでした。それから三ヶ月も経たないうちに今度の総選挙がやつて來ました。黨として候補者や立候補地を決定したのは、去る一月の十七、八日の擴大中央委員会においてあつたのです。かういふ譯で萬

事が無準備でした。なかんづく無準備中の無準備ともいふべきは、財力の一點にありました。如何に無産黨の選挙には金が要らないといつたところで、一文なしで選挙が出来る譯はありません。で、わが黨の各候補者は、この難關を克服するために、絶大な努力をしなければならなかつたのです。それに、我々は権力といふものに見離されてゐます。否、我々こそは権力による壓迫を最も強く受けてゐるのです。更に我々は、各方面からの逆宣傳の嵐の中を衝き進まなければならなかつたのです。

x

わが労働農民黨の各候補者は、かゝる不利な情勢の下に戦はねばならなかつたのです。で、我々としては、わが黨の全黨員の火の出るやうな活動以外には目覺めた大衆の熱烈なる支持應援にたよるしか、絶対に道がなかつたのです。幸ひにも、大衆に對する我々のかうした期待は、完全に酬いられました。わが黨は、よし唯一名だけの當選者を出さなかつたとはいへ、落選した候補者も皆それづくに相當數の得票を收め、殊に供託金没收の厄に會つたものが一名もなかつたといふことは、如上の事情の下において、わが労働農民黨にとつては、豫想以上の成績だつたといはねばなりません。

x



かゝる好結果は、さらに我々の前途に、一のかゞやかしき展望を開きます。我々がよつて以て立つところの無産階級は、必然に未來を支配する地位にある新興勢力です。これに反して、ブル政黨が代表してゐる資本家地主の階級は、刻々没落の道をたどりつゝある舊勢力です。従つて我々が得た一票は、ブル政黨が得た幾萬票にも匹敵するほどの歴史的意義を持つたものです。この事實への正當なる認識の下に、今や我々は勇氣まさに百倍して、益々大衆と固く腕を結んで、まつしぐらに次の闘争に突進しようと思つてゐるのです。

今度の選挙期間中に私自身の上に降りかゝつて來たありとあらゆる困難の連続については、私は一切口をつぐみます。私はたゞ、滿身火の如くあらゆる障礙を焼きつくさねばやまない意氣込みを以て活動した黨員たちに對しては、拜みたいやうな心持にさそひ込まれたことを、怪我にも書き漏らしてはならないと思ひます。

それに今一つ、底知れぬ深き精神的支持の外に、さらに多大の物質的應援をも與へてくれた無数の既知および未知の同志たちへの私の感謝の言葉をも、ぜひ附け加へねばなりません。

東京では、自由労働自治會の全員および交通労働組合、市従業員組合などの、多數の有志を始めとし、北は樺太、南は九州、それに朝鮮、臺灣の果てから、あるひは團體名義で、あるひ

は、個人名義で、あるひはしばしば無名で、わざと送られて來た寄附金が、毎日引きも切らず到着しました。かうした寄附金は、大抵は身を切るやうな思ひで作られたものに相違ないものでした。私たちは個々の場合に、到底涙なしにそれを受取ることが出来ませんでした。そしてそれを極力有効に、極力有意義に使ふことに努めることのみが、各寄附者に對する私たちの謝意を現はすせめてもの道と考へたのでした。

かうした國內及び植民地の既知未知の同志たちの、精神的物質的の支持應援は、刻々私たちの前方の行詰まつた道を開いてくれました。私たちはそこからまつしぐらに進出して、潮の湧くが如く來り集まつて私たちを待つてくれる大衆の前に現はれました。そして私たちが第一に得た印象は、大衆の意識のすばらしき成長といふことでした。

私は今、二年前の總選挙の時のことをおもひ浮かべます。あの頃は、私たちはまだ演壇の上から啓蒙的な、演説をして聞かせることを、私たちの主要任務としてゐました。またその頃の聴衆は、それを要求してゐたのでした。だが、今日の聴衆は、最早さうでなくなつてゐます。今日の聴衆は常に演壇の下から能動的に壇上の辯士を激勵して、自己の要求を叫ばしめるまでに進んで來てゐます。さらに、二年前の總選挙の折には、我々は自黨のフラクションを聴衆の



中に入れて氣勢をあけることにしてゐましたが、今日ではその必要が——少くとも東京では——全然なくなつてゐます。大衆は著るしき自己訓練を遂げました。のみならず、大衆はしばしば自律的行動にも相當の程度に熟達して來たことを自ら證明しました。かの日比谷の公會堂の各派代表者立會演説會において、大衆が示した態度の如きは、その最も立派な一例だと思ひます。

x 今日に進んだ大衆は最早、ブルジョア學界の群衆心理學者たちがいふやうな、無反省な、盲目的な自己を意識しないやうな、烏合の集團ではありません。大衆は何時までもさうしたものに止まるものと考へるのは、大衆の意識の成長といふことを見ようとしなない固定的な物の見方でありませぬ。大衆の間に鬭争慾求がメキ／＼と盛上つて來てゐる事實を無視して、ひたすら資本家、地主に對して妥協的な、全體的に非鬭争的な態度を取ることによつて大衆を引きつけることが出來るとの錯覺を今なほ懷いてゐるやうに見える社會民主主義政黨の候補者諸君の如きも矢張りかうした固定的な物の見方から一步も出てゐないのです。だから、それらの候補者諸君は今度の總選舉戦において、大衆からしゆん烈に批判されました。いはゆる「無産黨の惨敗」は必ずしも「選舉協定の不成立」から來たものばかりだとは、決していへないのです。

x また、今度の選舉期間を通じて普通世上に流布されてゐた選舉の結果に對する豫想的觀測の中にも同様の固定的な物の見方が幅を利かせてゐました。多くの場合において、ある候補者の前回の得票數が當該候補者の今回の成績の推定の基準とされてゐるやうなこともありませぬ。そのために、殊に東京府の第五區で勞農黨から、立候補した私などは、初めから終りまで、絶望的な地位にあるものとされてゐました。少くとも、さういふ風に、盛んに宣傳されてゐました。だが私は、本來流動的な社會現象に對してさうした固定的な見方を適用するのは、絶對的に誤りだと信じてゐました。私自身は、最初の二三回の選舉演説の間に、大衆の意識の成長をひし／＼と身にしめて感じるやうになつてからは益々わが勞農黨が相當程度の成績をかち得るであらうことを豫想することが出來るやうになりました。今日に進んだ大衆は、産業合理化の必然の歸結としての失業問題に對する鬭争、帝國主義戦争絶對反對の鬭争、等々々の主張にさへも熱烈なる共鳴を送るやうになつて來てゐるのです。私はそれを私自身の眼で、まさ／＼と見ることが出來たのでした。それ故に私は、かゝる大衆の要求を提けて立つとき「これに逆らふものは亡ぶ」といふ氣魄を以て、堂々と確信に満ちた戦ふことが出來たのでした。

私は過去數年間における鬭争の過程において、大衆の意識の漸次に成長する姿を、殊に東京



や大阪の如き大都市において、明かにみてきました。だが、今度の総選挙期間を通じてほど、それを息づまるやうに痛感したことはかつてありませんでした。それは一つには大衆の政治的關心が異常に高まつてゐた際だからでもあつたでせう。それにしたところで、この事實は私たちの希望をどれほど強めたか知れません。

また、かうした現象を私は東京地方における選挙闘争を通じて見たのですが、大阪のやうな大都市でもほゞ同様であつたに違ひないと思ひます。そして今日東京や大阪で現はれてゐるこの傾向がやがて明日は廣汎に全國に波及するであらうことは、期して待つべきのみだと思ひます。

さらに注意すべきことは、大衆の意識の、かくも眼ざましき成長が、田中反動内閣時代以来の支配階級の烈しき弾壓の下に遂げられたといふ一事です。金融資本の獨裁下にあつて、労働者、農民、無産市民その他一切の被壓迫民衆の生活と自由のために最も果敢な大衆行動を遂行してきた舊労働農民黨時代以来の我々の陣營は、荒れ狂ふ反動の嵐に抗して進んで來ました。しかも、我々の陣營に向けられた弾壓は、同時にまたその背後に立つ無数の大衆に向けられた弾壓を意味するものでありました。だが、資本の攻勢の強まるだけづゝ、大衆の反抗意識もま

た強まりました。権力はつひに、大衆の意識の成長を阻止するためには、全然無力であることを、自ら證明したのでした。

普選の下において言論戦が得票のために有効であるか否かは、かねてから問題にされてゐたものでしたが、我々は今度の総選挙における我々の實驗を通じて、それに肯定的に答へることが出来るやうになりました。少くとも我々は、大衆の意識の成長の程度に應じて言論戦が得票のためにも有効であることを主張することが出来るやうになりました。まことにエンゲルスがいつた通りに選挙は大衆の意識のパロメターであります。

だが私がこゝでいふ言論戦は、たゞ演壇の上で滔々懸河の辯を揮ふことだけを意味するものではないのです。壇上の演説は、過去の闘争歴史によつて裏書され、さらに將來の闘争への鋼鐵の如き決心に結びつけられることによつて、大衆に對して無條件的に説得力を持つものなればなりません。少くとも我々のいはゆる言論戦はそれだけの、條件を具へたものであることを絶対に必要とするのです。その上に雄辯や、學識や、各種の才能が加へられれば、もう鬼に金棒です。



かういふ關係から、我々はわが黨の過去の闘争歴史に觸れる必要のあつた場合には、亡き同志山宣の名をあけることを決して忘れませんでした。彼こそは、「口でいふことは必ず實踐する」ことを中心生命とする、我々の陣營の闘争精神を最も純粹に代表して、最後まで無産者の利益のために戦つて倒れた立派な階級闘士でした。で、山宣の弔ひ合戦は、單に彼の生前の選挙地盤であつた、京都府の第二區においてだけではなく、わが勞農黨によつて全国的に行はれたのです。さうして我々は大眾に向つて、山宣の如く戦ひ、山宣の如く死ぬることに努力することを誓ひました。それは我々が、この反動時代において我々の言論戦が身を以て保證されるのでなければ、畢竟空虚な言葉の遊戯に終るであらうことをおそれたからでした。

x 大眾は概念ではない。大眾は現實の存在である。今や大眾は進む。大眾の力の偉大さよ！

x 大眾は絶大なる創造力を持つてゐます。さうです、大眾は歴史を創る力です。その力は大眾の意識の生長に伴つて強まります。我々は今、大眾の意識の急速に生長してゐるのをみてゐます。大眾の力のゲン／＼のびていつてゐるのを見てゐます。

我々は久しく、この大眾を全被壓迫民衆の名を以てよびました。今や我々は、この全被壓迫

民衆こそは未來をつくる新興勢力であることを知るに至りました。

x

我々は従來、大眾こそ最も信頼すべき最後の審判者だとの確信を以て進んできました。この確信は寸毫も裏切られませんでした。今や我々は更に、この大眾の解放戦の最後の必然の勝利への動かすべからざる確信をも得るに至りました。吾々はあるひは幸ひにその日の喜びを大眾と共にすることが出来るかも知れません。あるひはその前に倒れるかも知れません。だが、よしその前に倒れようと、その時はきつと「大眾萬歳！」を叫びつゝ、歡喜に胸を躍らせつゝ、瞑目するでせう。



## ブルジョア議会の最初の印象

— 議會報告演説のための手記 —

過去幾年間、我々は無産階級解放運動の戦野に於て、資本家・地主の政府および政黨とは、濛々たる弾壓の砲火を超えてのみ、遙に相望んでゐたのであります。ところが私は、去る二月の總選挙に於て労働者諸君・農民諸君・無産市民諸君の階級的支持により、大衆闘争の一端としてブルジョア議會に送り込まれ、そして第五十八議會の開會と共に、政府とその與黨ならびに野黨の人々と、一堂に於て咫尺の間に顔を突合はせるやうになりました。考へて見れば、僅かの間に、時勢は著しく變轉したものであります。しかもかゝる時勢の變轉は、偏へに大衆の意識の成長と、その勢力の増進の度合ひを印づけてゐるものに外ならないのであります。それで私は今、私の議會進出の跡を顧みるとき、そゞろに背後から私を驅立てた、大衆の力の潮に乗つて、敵陣に乗込んだといつたやうな感じを、心の底深く懐かないで居られないのであります。

ます。

かういふ譯で、議會内に於ける私の任務はたゞ、議會外の大衆闘争との緊密なる聯關に於て、労働者・農民・無産市民・植民地民衆・その他一切の被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得のために全力的に闘争すること以外には絶對にないのであります。それが、わが黨が——およびわが黨を支持する大衆がわが黨を通じて——労働黨選出議員としての私の肩上に課した使命の全部であります。無論かゝる使命は、私の微力に比べて見るとき、餘りにも無限の重大性を帯びてゐるものであつて、私自身はそれに直面したゞけでも、すでに息詰るやうな、一種の促進感を感じないで居られない位であります。だが、私は一旦それを引受けた以上は、命にかけても、それが遂行に當らなければならぬのだ。——私はかく決心して、それさへなければ何等の牽引力をも私には持たないブルジョア議會に入込んだのであります。

工場に於て傭主と闘争する労働者。農村に於て地主と闘争する農民。街頭に於て「仕事と食を與へよ」との痛烈なる叫びを擧げる失業者。一切の悪税・重税・高い家賃・高いガス・電燈料金を對して抗争する無産市民。刻々剝奪され行く政治的自由の奪還のために支配階級に對して絶體絶命の闘争を展開する全被壓迫民衆。かゝる大衆の抑へがたき不幸・不満・要求を壇上に爆發せしめ、それらの大衆を背後の支持力として假借なき暴露戦を敢行すること。——かうした考



へのみが、餘りにも當然に、私が始めて議場の一隅にある私の議席を占めた瞬間から、絶間なく私の意識を占領しつゞけたのであります。それ故に、四月二十七日、私が始めて登壇の機会を得るや否や、私は資本家・地主の利益の擁護者たちによつて満たされた全議場を睨め廻はし、故らに厲聲一番、私が「全国の労働者・農民・無産市民・その他一切の被壓迫民衆の立場から一場の質問戦を展開しようとしてゐる」ものであることを、高らかに宣言しました。私は今でも、その階級的支持によつて私を議會に送られた大衆諸君を始めとし、わが労働黨を熱烈に聲援する全国の無数の大衆諸君が、私のその言葉を、一個不遜の表現としてとなく、徹頭徹尾私の心の底から迸しり出た、眞率なる叫びとして、無條件に寛容されるであらうことを確信するものであります。

しかし私は、本文に於て私自身の議會内に於ける態度・行動を報告するよりは、寧ろ私が第五十八議會から得た最初の印象記を書き付けようとしてゐるものであります。それは二重の意味に於て私の最初の印象記であります。第一にそれは、生れて始めて議會に足を踏入れた私の議會觀である、といふ意味に於てです。第二にそれは、今期議會の最初の數日間に於ける私の印象を述べたまでのものだ、といふ意味に於てです。第五十八議會の總決算といふやうなことは、その會期がまだ進行中の今日に於てやるべきことでありませんから、何れそれが終了して

から諸君と共同討議の上ですることとしませう。で、私は今はたゞ今期議會に對する、まだ新しい私の印象をスケッチするだけに止めようと思ひます。

## 二

私が初めて議場に入つて先づ最も痛切に感じたことは、如何にもそこに澄みたる生氣が缺けてゐるといふことでした。これは、私が從來參列して來た會議といふ會議が、殆ど例外なく、武装官憲の異常な嚴戒裡に進行するのを常とする、戰鬥的労働者農民またはその代表者たちの各種の會議であつたためかも知れません。さうした會議で常に見られる、あの一脈凄愴の氣を漂はした空氣、殊に屢々轟然として爆發する炎々たる熱火の如き意氣は、議會に於ては、どこを捜しても求められないやうであります。如何にも、議會の名物と謳はれ、傍聽者たちの興味を中心となつてゐる彌次、喧噪、小競り合ひ、演壇への驅上がり、等々は時々刻々演ぜられませんが、さうしたものは結局議場の掛引きにすぎないものであり、筋書の決まつた茶番劇のやうなものでありますから、それに参加しない連中は香氣に笑ひながら見物できる程度のもので、誰にもハラ／＼させるやうなものでは決してないのです。

私はさうした空氣の中で、正直に言ふと、一種の侮蔑感以外の何物をも感ずることが出來ま



せんでした。何時だつたか私は、——若しも私の記憶が間違ひでなければですが、——或る新聞紙上で、當時社民黨選出の一議員であつた鈴木文治君が、「議場に入ると何だか威壓されたやうに感じる」といふやうなことを述べられたと書いてあつたのを読みましたが、私は自分の経験から推して鈴木君がどうしてさういふ心持になられたかを理解するに苦しむものであります。私は緊張味のない——變な表現ですが——活ける屍のやうな全議場を見渡しながら、何時とはなしに、我々が過去に於て幾度となく経て來た彈壓の場面を髣髴として眼前に描いてゐるのに氣附いたことが、たゞ一再には止りませんでした。そこでは、彈壓を與へるものも、彈壓を受けるものも、共に眞剣そのものゝ具現のやうに見えます。まさに生死の戦ひがそこに展開されます。それは無論、階級と階級との對立が、よほどいふほど小規模にもせよ、そこに生々しき現實となつて現はれてゐるからであるに相違ありません。とにかくさうした光景に比べると、ブルジョア議會内に於ける與黨と野黨との間の刻々の衝突は、餘興以上の何物にも見えません。それは詰り、同じ階級に於ける内部的抗争は、表面上どれほど深刻なものに見えても、その解決の捌口が、制度そのものゝ中に豫めチャンと用意されてあるからでせう。もつとも、議會外の大衆運動の壓力が議會の門前に現實に迫つてゐることがブルジョア議員たちに鋭敏に感じられるやうになれば、彼等も幾分かは心の底から緊張するやうになるでせうが、しかし彼等

がそれを鋭敏に感じるやうになるのは、中々容易のことではないやうです。かういふことを見てゐると、私は今更らのやうに、「すべての政治闘争は階級闘争である」と喝破したマルクスの眞理が、ヒシ／＼身に迫つて來るのを感じるばかりです。

## 三

言ふまでもないことではありますが、ブルジョア議會も、歴史的に見れば、輝かしき過去を特つてゐます。近世紀の初頭の西ヨーロッパ諸國では、議會が新興ブルジョアジーの前衛として、封建的專制政治の打倒・民主主義革命完成のために力闘して、並ぶものなき史上の大壯觀を展開した時代もあります。かの神權説に裝はれた絶對主義を振りかざして傲然永久に全民衆に君臨しようとしたチャールス一世の專制的支配に痛快に止めを刺した一六四九年のイギリスのパーラメント。——積年の間に築きあげられた貴族・僧侶の傳統的權勢の大伽藍を根柢から顛覆して、來るべき世紀と全人類とに向つて、光彩陸離たる「人權宣言」を高らかに讀みあげた一七八九年のフランスの國民議會。等々々。

なるほど、日本の議會は、かつてさうした花々しい闘争歴史を持つたことはない。それは日本のブルジョアジーが、かつて民主主義革命の完成のために封建的殘存勢力と決定的に戦つた



ことがないといふ事實から來てゐるのは無論です。日本のブルジョアジーは、かくてその發達の歴史的特殊性の故に、その或る段階に於ては寧ろ封建的殘存勢力の庇護の下に、また或る他の段階に於ては封建的殘存勢力との反目・親善の絢ひ交ぜと言つたやうな煮切らない關係の下に、じり／＼と今日の支配的地位にまで登りつめて來たのであります。従つて、かゝる關係を政治上に反映し來つた日本の議會は、未だ曾て新時代を導き入れると言つたやうな、創造的活動を展開したことはない、といふのは事實であります。それにしたところで、日本の議會も、その四十年の短き歴史の或る期間には、或る程度に重要な政治的役割を演じたことが全然ない譯ではありません。それは少くとも、時代の潮流の尖端に立つ水先案内として動いてゐたやうに見えたこともあります。かの藩閥打破、官僚軍閥反對の闘争とか、憲政擁護運動とかの行はれた期間には、日本の議會も多少は颯爽として風雲の氣を呼ぶやうな趣きを示したのであります。しかし、さうしたことも、つまりは眞夏の夜の夢のやうに、瞬間的に行方も知らず、果敢なく消去つてしまひました。殊に金融資本が、段々と支配的地位を確立するやうになつてからは、議會は最早宿昔の議會ではなくなつて了ひました。それは依然として立法部といふ名稱を僭しながら、百パーセント執行部の附屬物となり下がりました。執行部の立法部に對する無限の優越。——それは我々の記憶の上はまだ新しい、あの數年前に若槻内閣の下に所謂三黨首

妥協の政治的喜劇の一幕が開演された時からこの方、特に顯著に眼立つて來ました。かくして議會は刻一刻、益々だらしないものになつて行きつゝあります。私が今度初めて、まのあたりにまざ／＼と見るやうになつたものは、そのだらしない議會なのです。私が議場へ入るとすぐに「何と生氣のない議會よ！」と心のうちに嘯かざるを得なかつたのは、一の歴史的必然だと、言はゞ言へることでありませう。

## 四

執行部の立法部に對する無限の優越。——議會の空氣が極度に沈滞してゐるものとして我々の眼に映するのは、決して單にそれが小川前鐵相事件、小橋前文相事件、天岡前賞勳局總裁事件、等々その他幾多の疑獄事件の温床となり來つたといふやうな外的事實のためのみではない。それはまづ第一次的に、もつと根本的な内的事實に基因してゐるのである。即ちそれは、立法部としての議會そのものが今や完全に執行部に隸屬するものとなり、執行部の專權を牽制する具として働いてゐるところか、寧ろその下に着々と進められてゐる金融獨裁の合理化のための機關として作用してゐるといふ事實——つまりそれに基因してゐるのです。現在我々が見てゐる第五十八議會の上に現はれて來る様々の具體的事實は、一つとしてその根本的事實の證



明として見られないものはありません。かくしてブルジョア議會は、その本来の歴史的使命を基點としていへば、今やその中心から腐朽しかゝつてゐるのであります。だから、多種多様の政治的罪惡の黴菌がその上に簇生したしたのは、不思議でも何でもありません。すべてが金融寡頭政治下の特徴的事相と見られるものばかりであります。

かくの如く、我々は今、完全に去勢されたる議會を眼前に見てゐます。與黨が何でもかんでも、政府が言つたことだといふと、それに絶対服従するを恥としない有様は、まるで××の姿態の活き寫しです。最近統帥權の問題で、與黨内の一部に多少政府の態度に對して反抗の氣勢をあけかけてゐたものがあつたやうですが、それもどうやら泣寝入りになりかゝつてゐます。だが、與黨も與黨ですが、野黨の野黨甲斐のなさも呆れさせます。西園寺公の鎮坐する興津の何とか莊が、與黨・野黨の共同のメッカとなつてゐるといつたやうな事實の如きも、議會を一つ目見た眼には、直ぐに「なるほど」と肯かれます。

今期議會に於ける犬養政友會總裁の演説は、野黨の攻撃力喪失の絶好の見本でありました。いかにも犬養翁は老人だからでもありませんが、その演説を聞いてゐると、何だかかう、諸行無常・寂滅爲樂の境地に誘ひ込まれさうな心細さを感じさせられます。しかしそれは唯その演説の外形からだけではありません。その内容を速記録で讀んで見ても——といふのは、翁の聲

の微弱さのために、その演説が私の議席からはよく聞き取れなかつたからです——矢張り同じ感じを受けます。たとへば、翁はロンドン軍縮會議の問題を中心として頻りに政府を糾弾してゐるやうな調子で話してゐましたが、しかし軍擴を主張してゐるのか、軍縮を主張してゐるのか、結局どちらつかずの結論に陥つてゐます。恰度春霞の中から遙かに落ちて來る雲雀の聲を聞く感じです。それは決して翁の年齢だけから來た現象ではなく、つまりは政友會も帝國主義政策支持の點に於て民政黨と一つ穴の貉であるといふ事實から來た當然の歸結であります。

## 五

與黨の絶対服従の態度、野黨の攻撃力の喪失。——かういへば、政府が獨り敢然として無人の野を行く概があるやうに見えますが、實は中々さうではありません。なるほど政府は、金融資本の支配の確立のために、勞働者・農民・無産市民・植民地民衆等の一切の利益と自由を犠牲にして顧みないやうな様々の政策を盲滅法に強行して、それらの被壓迫民衆の怨嗟と××の聲を毫も顧みないやうなところを見ると、少くとも多分の猪勇を持合はせてゐるやうに見えますが、しかしそれも皆金融資本家の指金から出て來てゐるものであることを考へると、政府もまた、結局は議會と同様に、一種の硬化した土偶的存在を持續してゐるにすぎないものであるこ



とが解ります。

金融資本の優越的地位の獲得と共に、政府が段々とその××となり了るやうになつたのは、決して一朝一夕の事ではないが、殊に昭和二年の金融恐慌以來、それが餘りにも露骨に表面に浮び出るやうになつたことは、改めていふまでもありません。あの頃十億圓近くの國庫負擔を伴ふ各種の補償法が、たゞ資本家だけの利益のために制定されて、無産大衆をして髪を逆立てしめました。それ以來、内閣は更代しても、金融資本家本位の政策は益々強硬に進められる一方です。で、今期議會に於ては、濱口内閣の緊縮政策とか、金解禁問題とか、産業合理化問題とか、呼物となり、論議の中心目標にされました。だが他方、それと相表裏する關係をなす失業対策問題などは、たゞ掛聲が大きかつたゞけで、政府も與黨も野黨も共にその前に茫然自失してゐる體たらくで、何等の解決策をも、否、その端緒をさへも、絶対に示すことが出来なかつたのです。それは、今日の失業問題の根本的解決が資本家・地主の政府の手によつては、決して望み得られないといふ根本的事實の證明以外の何物でもありません。私は私の質問演説中に、わが勞農黨が失業問題解決の應急策として建てた「失業者生活保證法案」を提出して、それに對する政府の見解を訊いてみましたところ、それが五億圓の支出を伴ふものであるといふ點が緊縮宗の本尊を驚倒せしめたものか、濱口首相はそれに對して、こんな答辯をしました。

「大山君の質問の要點は數億圓の失業手當を出す意志はないかと云ふ——ありません、斷じてない。」そして首相は、その施政方針演説の中にもあつたやうに、いはゆる「失業救濟事業補助費」として、大枚六十一萬九千ながしといふ額を追加豫算に計上したことだけで十分満足してゐるやうです。これが意氣揚々として、いはゆる「失業救濟」の根本策とか、應急策とかを説いた大宰相の大經綸(?)であります。

かういふ風に、政府は徹頭徹尾金融資本家の願使のまゝに動いてゐる内の事實を、今は公然と外的に晒け出さずにもられないやうになつて來てゐます。だが政府の頭があがらないのは、單に金融資本家の前だけではありません。軍閥に對しても多分に同様の傾向を示してゐます。今期議會に於て他の重大問題の一つとなつた統帥權問題の推移が、明白にそれを證明してゐます。その論議に際して、濱口首相が終始一貫たゞ戦々競々として、問題の核心に觸れることを避けるのに没頭して居たのは、はたの見る眼も憐れなほどでした。野黨にしてもさうです。その管々しい攻撃的質問も、結局は軍閥に反對してゐるのか、但しはそれに迎合してゐるのか少しも解らない處に落着いてゐます。何がじれつたいと言つても、それ程のことは外に滅多に例が見られない。かくして、帷帷上奏の始末とか、軍部大臣文官制とかの如きも、今日では、資本家・地主の政府・政黨の手によつて解決されさうもない永久の問題となつた觀があります。



これといふのも畢竟、日本の議會が未だ曾て民主々義革命の完成のために戦つて見たことすらないうちに、すでに早くも金融資本の支配の確立の下に、帝國主義時代に入り込んだからであります。

濱口首相の演説は、さうした煮切らない關係の下におかれてゐる政府、および議會の美事な象徴のやうに、少なくとも私の眼には映じました。濱口首相の風貌は新聞紙上ではライオンに見立てられてゐますが、私はよしそれを肯定するにしても、失禮ながら剝製のそれ以上に見積もることが出来ない。それほど、それに潑刺たる生氣が缺けてゐるやうに、私には思へるのです。また濱口首相の聲を聞いてゐると、なるほど例の『莊重な語調』といふのはこれだな、と思はせられるやうな節もないではありませんが、しかし全體の上からいふと、私には中がガラン洞の、圓味を帯びた含み聲のやうに聞えて、威壓されるやうに感じるどころでなく、たとへば名寺の寶物とか由緒ある骨董品とかを見た時によく起つて来る、あの時代錯誤が惹き起す淡き滑稽感——といったやうなものが私の胸にこみ上がつて来るのを、私はどうすることも出来ないのです。

私は、この上かういふことを長々と書きつゞける時間を持ちませんから、これで一と先づ擱筆します。たゞ最後に次の一言を附け足しておきたい。私は、今日最早全然政治上の創造力の

痕跡をさへも失つて活ける屍の如き存在を續けてゐるにすぎないブルジョア議會に向つて、今や猛然として擡頭する新興勢力としてのプロレタリアートの建設的意志に燃立つた鬪争的氣魄をたゞきつきたいといふことを、私の小さき希望の一つとしつゞ議會に入つたのです。とにかく私は、議會外の大衆にのみ信頼して、あくまで全力的に私の議會鬪争をつゞけて行く覺悟でゐます。私は私の一身を大衆のものとして活かすこと以外には、何の望みをも持つてゐないものであります。私の議會に於ける行動にしたところで、單にそのものとして見れば、何の生命も價値もないものであるには決つてゐますが、しかしそれが議會外の大衆鬪争と相互ひに脈を打つて進む時のみ、その本質以上の働きをすることが期待され得るものと思ひます。この意味に於て私は、益々固く大衆諸君と腕を結んで、わが勞農黨の旗の下に、全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張と、その政治的自由の獲得のために、かつて亡き同志山宣が歩んだ道を追うて生死を超越して階級的な正しき前進をつゞけたいと願つてゐます。



## 大衆の審判を待つ

—ひとつの議會報告演説—

—

去る二月の總選舉に於て私は、労働者諸君・農民諸君・無産市民諸君の階級的支持によつて、ブルジョア議會内に送り込まれることになりました。議會といふ處が如何なる空氣に支配されてゐる處であるかは、今更ら改めて言ふまでもありません。殊に最近かの鐵道疑獄といひ、勳章疑獄といひ、一聯の醜事實が議會を一個の温床として雨後の筍のやうに簇生し出してからといふものは、大衆は段々と當面のブルジョア議會に對して心の底から愛想をつかさやうになつて來てゐるのであります。従つて、今日では、個人的動機から議會に入りたいなど考へるやうな人は、少くとも進んだ大衆の間には一人も見當らないと言へませう。私自身もそれには全然同感であります。

だが議會は、それにも拘らず、現在階級闘争の行はれてゐる最も重要な地點であり、そして

今日の狀勢の下に於ては、無産階級の立場から見ても利用價値の非常に多い一の場面であるといふことには、毛頭疑ひがないのであります。それで私は、私が愈々當選したことが明かになりましたときには、「行かう」と心のうちで叫びました。私は、「私が大衆に送られて行く先きが、よし泥沼であらうが、地獄であらうが、私は一路直ちにそこへ猛進して、大衆から私に課せられた任務をそこでも全力的に遂行しなければならぬ」と、かう決心したのであります。

さう考へると私は、急に私の心身が異常に緊張して來るのを覺えました。忘れもせぬ一昨年の暮、かの我々の立場からは永久に記念されるべき労働者農民黨の結黨大會に於て、私は私の開會の辭のうちに厲聲一番、「我等の行く處は戰場であり墓場である」と叫びました。その氣持は、その時以來ずつと私を固く擱へて決して離したことはありません。しかも今や、わが労働黨の旗の下に展開される大衆闘争の一尖端として、愈々ブルジョア議會内に進出しようとするに際して、私は今更らのやうに、言はゞ單身敵地に乗込まうとする戰士の如く、一種別様の闘志に燃立つてゐる自分自身を見出さないではゐられなかつたのであります。

—

「大衆闘争の一尖端として。」——去る四月二十七日、私が初めて第五十八議會の演壇に立つて



議場を睨め廻した瞬間ほど、この言葉がヒシ／＼と私に迫つて来たことはかつてありません。私はわが黨が、——そしてわが黨を通じて大衆が、——私に課した任務を、極めて明瞭に私の意識に上ほすことが出来ました。しかも私は、私の微力に比して、私が帯びしめられた任務の餘りにも過大なのに、多少たぢろがざるを得なかつたのであります。だがその時私は、ふと亡き同志山本宣治の歴史的な言葉を思ひ出しました。それは彼が暗殺された日の前日に、大阪で持たれた全國農民組合の、第二回大會に於て述べた祝辭の中に見出される。彼自身の議會に於ける地位に關聯して發せられた一句なのであります。私はすでにそれを私の言論文章の中に幾度となく引用して來ましたが、こゝでも今一度それを繰返すことを許されたい。それは、かういふのであります。——

「山本宣治たゞ一人孤壘を守る。だが私は一人で淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。」

さうだ！ 背後には大衆が支持してゐるから、だ。少くとも我々が過去何年間に、或は日常闘争を通じて、或は選舉闘争を通じて、絶えず手を握り交して來た幾千、幾萬とも數へ切れぬ大衆——そして常に我々に熱烈なる共鳴を送つて來た大衆——それらの大衆は、今こそ私をして、彼等に代つて彼等の痛烈なる叫びを議會の演壇に爆發せしめようと、手ぐすね引いて熱

心に待ちかまへて呉れてゐるであらう。それらの大衆こそは、今私が持つ最も信頼すべき味方である。私は力の限りに、それらの大衆の期待を裏切ることのないやうに努めなければならぬ。私は何よりも殊に、それらの大衆の——工場に於て傭主と闘つてゐる労働者の、農村に於て地主と闘つてゐる農民の、街頭に於て重税・悪税・高い家賃・高いガス・電燈料に對して闘つてゐる無産市民の——痛切なる聲を、叫びを、その鬱勃たる不平・不満・要求を思ふ存分支配階級にたゞきつけねばならぬ。そして私が幾分なりともそれに成功すれば、それらの大衆はそれ自身たちの事として喜んで呉れるであらう。更にそれが幾分なりとも大衆闘争の今後の進展のための一の契機として役立つやうな結果にならうものならば、物の數にも足らぬ私の努力も、その本質以上の意義を得來たるであらう。もとより、かうしたことは、議會に於ける私の入門的一課程にすぎないものであるが、それにしても私は、渾身の力を以てそれに當らなければならぬ。

私がコップの水に咽喉を濕ほして口を開くまで、ほんの一分ばかりの間でありましたが、かうした考へのすべてが走馬燈のやうに次々と私の脳裡を掠めて通つたことは事實であります。議場を埋めつくしてゐる四百六十いくつの頭腦の大部分は、抑へきれぬ敵意を含んだ眼ざしを私の一舉一動の上に集中してゐるやうに見えました。そのために私は却て勇氣百倍するのを



感じました。更に私の發言中は、淺原代議士外一二名が時々拍手と激勵の言葉を送つた以外には、私の言論に對する聲援は絶対にありませんでしたが、それは却て私の心を議會外の無数の大衆に結びつけました。全議場に絶えず沸きかへる漫罵、嘲笑、怒號、叫喚、等々の妨害行爲に對してさへ、私は嵐に抗して進んでゐるやうな、一種の痛快味を十分に感ずることが出来ました。私は刻一刻、私自身の言葉の下から、同志山宣が會て私に「治安維持法改悪案上程の日には咽喉を締められても叫びます」と言つたことを回想して、彼のその覺悟を私自身の覺悟としつゝ、約一時間半に亘る私の演説を終へたのであります。

## 三

その日の私の質問演説は、いはゆる演説技巧の上からいへば私のものとしても決して「いゝ出来栄え」のものではありませんでした。さうした方面の効果は、斷じて私が狙つたものではないのです。私はたゞ場面の「氣流」の動きに應じて絶えず或る種の注意を拂つた以外には、特に技巧の工夫などは一切凝らさなかつたのです。従つて私は、その點に關する如何なる批評にも甘んじて服するものであります。たゞ私は何よりも殊に、最も眞率な態度と言葉を以て、意識の尖鋭化した労働者・農民・無産市民・植民地民衆・その他一切の被壓迫大衆の聲を叫ぶこと

に全力を傾倒しました。更にそれに附け加へて私は、金融資本家の主導下にある資本家・地主の利益の番人となり了つて一切の政治的創造力を喪失し切つて、土偶の如き硬化した存在を續けてゐるにすぎないブルジョア議會に向つて、新興勢力たるプロレタリアートの建設的意志に充たされたる闘争的氣魄を投げつけようと試みたのであります。

かゝる私の意圖が些かたりとも實現されたか、否かに就ては、私は全然それを大衆の審判に待つより外はないが、とにかくさうした立場から私は、ブルジョア政治の——特に當面濱口内閣によつて進められつゝある資本家的産業合理化政策およびそれに結びつけられてゐる所謂「失業救済策」の——欺瞞性を痛撃して、それにわが勞農黨の立案に係る「失業者生活保證法案」を鋭く對立せしめました。更に私は、濱口内閣の所謂「農村問題の解決」に關する既往の聲明が盡く掛聲だけに終つてゐる事實を暴露して、「土地を農民へ！」のスローガンの下に、土地に對する農民の熱烈なる欲求を強調し、そして農民の生活を中心として建てられたわが勞農黨の「借金（月収百五十圓以下の債務者の）支拂猶豫法案」の説明を議場にたゞきつけました。尙最後に、私は、労働者・農民・無産市民・植民地民衆・等々の政治的自由に關して、それら一切の被壓迫大衆の間に熱火の如くに渦を巻いてゐる痛烈なる要求を、聲の限りに叫び續けました。



私は私の演説の内容を、茲でこれ以上詳細に報告する時間を持ちません。その方は、四月二十八日附の官報號外に出てゐるその速記を見ていたゞきたいのです。そして、その内容によつて毫も假借する所なき峻厳なる批判を與へて下さるやう、切に諸君にお願ひしたのであります。

## 四

自分がして来たことを自分の口で語るのは、いさゝか照れ臭い感じのするものです。とにかく、それは何う見ても決して愉快な仕事ではありません。だが困つたことには、議會内に於ける勞農黨選出の議員は、たゞ私一人だけなのです。で結局、私の議會内の態度・行動の報告は、私自身でするより外に、絶対に途がないのです。

それに私は、私の議會内に於ける一言一行とても、決して私といふ一個人のものではなく、それは前にも示唆した通りに、わが黨が——およびわが黨を支持する大衆がわが黨を通じて——私の肩上に課した一の任務の遂行にすぎないものだと思つてゐるのであります。そして各重要瞬間に於てその任務が多少とも満足に遂行されたか否かは、無論私自身が決定すべきことで

はなくて、黨および大衆が厳正に批判すべきことであります。しかし私はさうした批判のため、基礎的材料を提供しなければならぬ義務を感ずるのであります。それで私は、議會に於ける私の最初の質問演説に關しては、その内容の點を速記録の方に譲つて、主としてその演説に際しての私の態度、乃至心構へと言つたやうなものを、ほんの概略ではありますが、以上の通り報告に及んだものであります。

尙また私は、私の演説に對する議場の反響、およびそれに對する私の應酬について、二三の實例を擧げて、何等かの参考に供したいと思ひます。

私は開口一番、『全國の勞働者・農民・無産市民・その他一切の被壓迫民衆の立場から濱口首相の施政方針演説に對して質問戦を展開しようとするものである』ことを叫んだ瞬間から、既に早くも全議場から猛烈に起り來る罵聲の雨を浴びました。私はそこで、議會に於ける私の地位がはつきりと決定づけられたことを痛感しました。

次で私は、私の濱口内閣に對する糺弾が、一切の資本家・地主およびその政府・政黨に對する攻撃を意味するものであることを述べて、特に政友會からの些かなりとも聲援を率直に拒絶しました。それは、よし民政黨内閣への糺弾の故にもせよ、政友會からの拍手を受けて快とするやうなことがあつては、何よりも殊に、かつて田中反動内閣の大弾壓の下に血みどろの闘争



をして来た戦闘的労働者農民大家を裏切るものだとか考へたからであります。全講場は無論、一ときりの嘲笑を以て私に酬いました。私はすかさず言葉をついで「諸君は今こそさうした嘲笑を放つてゐるが、やがてそれを悔ゆる日が来るであらう」と絶叫しました。

かういふ調子で、私の演説は緩急常ならぬ脈を打つて進行しました。そのうち私は、わが労働者生活保護法案」を持出し今日の失業問題を應急的にでも解決するためには少くとも失業者の基本数を百万人と見て、一人當り日給一圓五十錢を支給する用意を持たねばならぬことを述べると、一議席から「なまけ者製造だ」と叫んだものがありました。今日の資本家的産業合理化運動が、如何に失業者群を大量生産しつゝあるかを棚にあけておいて、しかも私がそれに對する、國家および資本家の當然の義務を強調するのを聞くと、忽ちさうした彌次を飛ばすものが出て来るなど、全くさもしい資本家根性丸出しの情景が、そこにまざくと展開されました。更に他の一議席から「百万人あつたら百五十萬圓ではないか？」と言つたやうな、意地ぎたないことを言ふものもありました。私は直ぐそれを捉へて「いや、百五十萬圓ではない、一年に五億圓の金が要るのだ。五億圓といへば、諸君には非常に大金に見えようが無産階級の眼には、ほんの僅かなものとしか映じないのだ。少くとも、政府が資本家・地主のために費してゐる各種の補償金に比較すると、九牛の一毛にもすぎないものだ」と遣返しまし

た。

更に私が、農民——年々激化する立入禁止・立毛差押・土地返還の下に悪戦苦闘して、しかも今日では約六十億圓の借金を背負はされてゐる農民——の現下の窮乏について語り、そしてそれに關聯して「月収百五十圓以下の者にして現に債務を有するものは、その債務の支拂を、昭和十年五月一日まで延期することを得。またその延期中の利息は請求することを得ず」といふことを規定してゐるわが労働者生活保護法案」に言及した後、「今農民は借金に首が廻はらなくなつてゐるのだ」と言ひました。するとブルジョア議員たちは、一齊にドツと哄笑しました。彼等は多分彼等自身の選挙費用が未だに借金になつて残つてゐることを思ひ出したのでせうが、さうした他愛もないことは、私が述べてゐたことには縁もゆかりもないことでもあります。とにかく私は「笑ふにも事にこそよれ」と考へたので、憤然として直ぐそれを引取つて「諸君は笑ひを以てこの話を迎へてゐるが、農民は涙を以てそれを聴くのだ」と喝破しました。實際「涙ぐましいことを言へば笑ひ、可笑しいことを言へば怒る——それがブルジョア議會の姿だ！」と、私は泌々と感じない譯には行かなかつたのであります。

次で私は、全被壓迫民衆の政治的自由獲得の問題を論じましたが、最後に、労働者農民の結社の自由に及び、共産黨運動の現況に觸れ、治安維持法に絶對反對の民衆の叫びを叫びまし



た。その時に、全議場が如何に喧々囂々たる怒號で沸きかへつたかは、諸君の想像に任せたいと思ふのであります。

五

私の演説に對する濱口首相の短き答辯は、おそらく民政黨の絶對多數を恃んで「鎧袖一觸」の意氣込みを以て述べられたものでありませうが、笑止千萬にも、それはたゞ金融資本家の願使のまゝに動く濱口民政黨内閣の本質を暴露したものにすぎなかつたのであります。濱口首相は丁寧にも、彼(首相)の立場が、私(大山)のそれと違ふ點を明確に述べましたが、無論私はそれに毛頭異存のある譯はありません。濱口首相はまた、私(大山)が議會の慣例に通じないから、失業問題に關する、彼(首相)の施政方針演説を物足りなく(私がその内容の貧弱さを指摘したこと)に關聯して言はれたものであらう。——大山)感じたのであらうが、特別議會には特別議會に關係のあることだけを言ふのであつて、委しいことは通常議會で言ふ、との趣旨を述べました。だが、失業問題こそは、この特別議會の中心問題そのものであつて、しかもその本質の緊急性は、来る十二月に召集されるべき普通議會までを緩々と待つてゐることを許すやうな種類のものではないのであります。かうした底の見え透いた詭辯を吐いて得々としてゐる首

相の政治的見識こそは、實に現代稀に見る不可思議千萬なものだと言はねばなりません。

また、濱口首相は、産業が振興すれば失業問題が自ら解決できる(一)といふやうなことを、實に軽々と述べましたが、しかし資本家的産業合理化を基調とする政府の産業振興策が、失業者群の大量生産に歸着するものでなくて、失業問題の根本的解決を將來するものだ、など、シラを切るやうなことは、百パーセント金融資本家の代辯者としての、彼に於てこそ初めて出来る藝當だと、私は斷言します。

更に濱口首相は、「政府は數億圓を支出して失業者手當制度を確立する意志はないか？」との私の質問に對して、「ありませぬ、斷じてない」と、傲然と言ひ放ちました。それに對するわが國の勞働者の答ひは、「よし！ 解つた！ 政府にその意志がなくとも、俺達の力で戦ひ取つて見せる！」といふのでなければならぬと思ふのであります。

最後に農民を中心とする「借金支拂猶豫法案」に對して濱口首相は、「それはその法案が日程に上つた場合に、政府の考へを述べませう、豫め述べることは致しませぬ」と明言しました。首相は、この法案が、その提出のために必要な所定の——二十人の——賛成者を得ることが出来ないであらうことを見越して、かゝる狡猾な答ひをしたのでありませう。農民はこの點で農民と共通利害關係を持つ勞働者および無産市民と緊密に協力して政府の意志に抗してその獲



得のために、果敢なる大衆運動を捲き起さなければならぬことを、私は確信するのであります。

繰返していふ、私は私の戦績の批判を、一切わが黨およびわが黨を支持する大衆に任せると。たゞ、私はこれだけのことを一言しても差支へないのではないかと思ひます。即ち、わが黨およびわが黨を支持する大衆から私に課せられた議會内に於ける一任務の遂行の手始めとして展開したあの質問戦が、萬が一にも多少の程度に於て暴露的效果を擧げ、且つ大衆闘争の今後の進展のために一の契機として用ひ得べきものを、些かなりとも提供したといへるならば、私の心は底知れぬ感謝に充たされるであらう、と。とにかく、今私は、私の小さき仕事の入門的一課程を終へたばかりのところ、私自身を黨と大衆との審判廷に置いて、心しづかにその判決の下されるのを待つてゐるものであります。

## 附 録



## 新勞農黨樹立の提案

### 前 言

親愛なる全国の同志諸君！

私等は今諸君の前に、一の重大なる提案を置かうとしてゐる。

だが、それに先だつて私等は、諸君の長期に亙る驚嘆すべき忍苦の闘争に對して、衷心から無限の感謝と敬意を表する。

同志諸君！我々は年來雨に嵐に、お互にがつしりと腕を組んで、あらゆる鐵火の試練に堪へ、測り知られぬ苦難の行進を續けて來た。殊に昨年三月十五日の大檢舉の手が突如としてわが左翼陣營に襲ひかゝつて幾百の精銳を奪ひ去り、更にその餘波が勞農黨外二團體の解散の形に於て現れてからこのかた、我々の行く手は一時暗憺たる密雲に閉されたかの觀があつた。

かゝる事態の下に於ても、諸君は曾て無産階級の前途の勝利への希望の光を見失ふことなく、一方に於ては極力私等を擁護し、他方に於てはまた諸君が心から信頼してゐる——そしてまた



心から諸君を信頼してゐる——大衆と緊密に提携しつゝ、その險惡を極めた風浪を乗切り、一圖に、陣營の回復と闘争の展開とを目指して、英雄的に行動しつゞけて来た。

その間に、かの恥知らずの「勞農」一派の指導下にたくまれた無産大衆黨の陰謀が行はれたが、諸君は敢然としてこの最も始末し難き敵をも踏み摧いて、それを一握りの無力な策士連の一團にまで打ちなした。

更に昨年末の新黨準備會の解散、その直後に起つた水谷長三郎君一派の裏切り、次で我々の毛髪を逆立たしめた同志山宣の受難、等々々。まことに我々の闘争の歴史の何れのページとして、血の滲じんでゐないものはない。しかもそれらの幾多の事件は、たゞ諸君の闘志を鋼鐵の如くに鍛上るに役立つばかりであつた。

今、私等は、かゝる難局の上に一條の血路を開いて尙も前進を續けつゝある諸君の痛ましくも雄々しき姿を眼前に髣髴するとき、敵には一滴の涙をも曾て見せたことのない我々も、そろに眼底の熱して來るのを覺えないでゐられない。それは闘争の渦中を共に腕を組んで潜つて來たものゝみが期せずして互ひに懐く感情でなくて何だ！私等はこの提案を討議しながらも、無限の感激に心を顫はせてゐる。そして同じ涙の光を諸君の眼にも見てゐるのだ。

## 二

だが、親愛なる全國の同志諸君！私等は今、かゝる當然の感情をも暫く傍に押しやつて、最も冷靜嚴肅なる態度に於て、私等の提案を諸君の前に置かなければならないやうに強要されてゐることを感じる。我々は我々の闘争の歴史に於て、現在の瞬間ほど、透徹明なる心境に於て我々の周圍の狀勢を凝視し、我々の前途を考察し、我々の當面の活動方針を確立すべき必要に迫られたことは曾てない。この際我々は、我々の階級的任務に對する、當然の熱情によつてさへも、我々の理智の眼を曇らせてはならないのだ。否、我々の階級的任務に對する熱情が高潮すればするほど、我々は一層我々の思惟の平靜を保つことに努力しなければならぬのだ。

私等がやがて諸君の批判の前に投出さうとしてゐる提案は、——もちろん多くの同志諸君から私等が聴くことを得た客觀的狀勢の觀察や、之に即する意見やを集中的に反映してゐるものに外ならぬけれども——直接には私等三人の署名者の責任に於て作られた私案である。私等はその作成に際して、私等が最も容易に近づく便宜を有してゐる二三の同志に相談を持掛けた外一切他へは及ぶことが出来なかつた。

いふまでもなく、かゝる方法は、若し我々が曾てありし日の如く、全國の同志諸君の意志を正確に反映し得るやうな具體的な政治的組織を持ち、且つその正式の決議機關を持つてゐる状態の下にあるものならば、如何なる事情があらうとも、萬々許されるべきことではない。だが、



現在に於て、我々がさうした具體的な政治的組織を、従つてその正式の決議機關を持つてゐないことは、諸君のすべてが熟知してゐる通りである。

いかにも新黨準備會解散後といへども、我々は政治的自由獲得勞農同盟の名の下に、當面喫緊の階級的必要を充たすため各種のキャンバニアを遂行し得る闘争實體として存続して来たことは事實だし、またさうした幾多のキャンバニアを全力的に遂行して来たことも事實である。だが、勞農同盟は、正確にいへば、本質上一個の鞏固なる精神的結合であるに止まつて、何等の具體的な政治的組織ではなく、従つてそれには正式の決議機關が全然缺けてゐるのだ。

一方、私等の確信によれば、この提案は現在抜き差しならぬ重要性のあるものである。しかも、他方、嚴密なる意味に於ける具體的な政治的組織を持たない我々には、その審議のためにそれを掛けることが出来る正式の決議機關が全然缺けてゐるのだ。そこへ持つて来て、當面の事態は、我々がそのことのために寸刻も躊躇してゐることを許さないのだ。

そこで私等は斷然意を決して、大膽にも私等の單獨責任に於てこの提案を作り、それを一齊に全國の同志諸君の批判の前に投出すことにしたのだ。

## 三

かゝる行き方は、常態の下に於ては明かに團體の規律に對する許すべからざる違反だ。だが、

我々にとつては、今は非常時だ。そして、この危機的瞬間に際して私等がこの擧に出ることを決したのは、一つにはさうするより外に方策が見出せないからでもあるが、また一つには、私等が年來諸君から受けた身に餘る信任——それに對しては如何なる言葉を以て感謝していかを私等は知らない——を今でも持續してゐるものと考へることが、必ずしも一片の幻想でないことを信ぜしめられてゐるからだ。

私等はこの提案が、我々の陣營内の大衆の間に立つほどの動搖を惹き起すやうなことがないであらうことを確信する。だが萬一さういふ結果が見られたならば、私等は諸君からの如何なる糺弾にも甘んじなければならぬことを十分に覺悟してゐる。

私等は私等の單獨の責任に於てこの提案を出すことを決したとはいへ、しかも私等が最後の決意に到達するに至つたまでには、私等は可能な手段の限りをつくして、出来るだけ多數の同志諸君の意向、並にそれを通じて諸君が日常緊密に接觸して行動を共にしてゐる戰闘的大衆の意向を確める努力を怠りはしなかつた。我々は我々と相互的信賴の關係にある大衆を離れては無力になり、さうした大衆と提携する時のみ、力強く進むことが出来るのだ。また、さうであればこそ、我々は茲にこの提案を出さうと決心したのだ。

最後に、この提案の趣旨を要約すれば、次の一點に歸着するのである。



我々をして、最近に於ける主體のおよび客觀的の兩方面の異常に急速なる轉換に照應して、合法政黨の形態に於ける我々の獨自の恒常的政治的組織——「新勞農黨」——を樹立し、その下に大衆的日常闘争を政治的自由獲得闘争に集中統一して強力に展開し、更にその旗じるしの下に戰闘的戰線統一を決定的に實現することを期して、當面その目標に向つて全力的に戦ひ進ましめよ！

私等は、諸君がこの提案竝にそれに伴ふ私等の意見を、階級的立場から慎重に——だが假借なく批判し検討し、寸刻も早く理論的に實踐的に正しき結論的決議に到達されるであらうことを衷心から切望して己まないものである。

### この提案が決定されるまで

一

諸君はすでに、以上の「前言」を読み了つて、私等の提案の中心點が、實際的に合法政黨組織への再進出の上に置かれてあるものであることを見た。そして私等は確信する、諸君の大多数は、それによつて、最近數ヶ月來我々の陣營に關する當面の懸案として、絶えず諸君の念頭におかれて來た一重大問題に向つて、少くとも一個の具體的解決策の試みがなされ始めたものであることを感じたであらうことを。

それにしても、多數の諸君のうちには、この提案が形式上稍々唐突に見えるところから、尙ほ幾分疑惑の餘地があるやうに考へた人たちがあつても知れない。私等は、起り得る一切の疑惑を一掃することから始めなければならぬ。殊に私等は、何故に我々がこの際勞農同盟の形態を棄て、合法政黨の獲得に進まなければならないと結論するに至つたかの根據を示さなければならぬ。

二

昨年末わが新黨準備會はその解體に際して、十五項目に互る行動綱領を掲げ、その下に無産階級の刻々の必要に適應する各種のキャンペーンを最も自由に、最も敏活に遂行し得るために、勞農同盟に轉形して行つた。それは當時の狀勢から見ても、我々としては、唯一の正しき行き方を擇んだものであつた。しかもそれは全國の戰闘的大衆の熱烈なる要求を最も正確に反映したものであつた。

かくて勞農同盟は、當時の狀勢に照應して獨自の指導部を、従つて他の一切の組織上正式の機關をも持たないところの、一種の過渡的な——いはゆる闘争の過程に於て發展的に解消して行くべきものと規定されての——變則的形態に於ける闘争實體として發程した。それ以來勞農



同盟は、ある期間に互つて、さうした形態の下に於て、大體當初豫想されたやうな各種のカンパニアを全力的に展開して來た。そしてその收穫は必ずしもその努力に伴はなかつたかも知れないが、とにかく或る程度の効果はたしかに收められた。少くとも勞農同盟の下に於て我々が行つたすべての闘争は、異常に我々の經驗を豊富にし、理解を深めたものであつた。この點を認めることは、我々の階級的義務だとさへも、私等は考へてゐる。

だが、そのうちに、我々の陣營の内外の狀勢は刻一刻、餘りにも顯著に變化して行き、特に四・一六事件を契機として、急轉直下に一大轉換を劃するに至つた。

即ち四・一六事件は、——もし私等の觀測に間違ひがなければ、——わが國の無産階級の前衛がそれまでに萬難を排して築きあげた全陣地を殆ど潰滅に歸せしめたばかりでなく、更に、わが全左翼戰線の上に容易ならざる一大打撃を蒙らしめた。そして、かゝる事態の下に於て、わが勞農同盟の活動もまた、不可避免的に、はたと行詰つた。それは現實に闘争を行つて來た同志諸君が、あまりにも切實に體驗して來たことでもあり、今もなほ現に體驗しつゝあることでもある。

以上の認識に關しては、私等は諸君の間に全然異存のないことを確信するものであるが、もし萬一それが私等の誤認であるならば、私等はそれを遠慮なく言つていたゞきたいのである。

我々は、この極度に慘ましき事實をも、大膽に直視することを恐れてはならぬ。いやしくも我々の行動が紛ぐれあたりの僥倖を狙ふが如き盲目的絶望的努力を代表するものでなく、あくまで目的意識的な勝利への行進を意味するものである限り、我々は眼前實在の事實が我々の意圖に反するかのやうに見えるからと言つて、それを直視することを回避して、觀念的見地から我々の刻々の活動方針を樹立するが如きことをしてはならぬ。さうすることは徒らに大衆の闘争的エネルギーを浪費せしめ、結局敗北への道を地ならしすることに終るからである。

### 私等は諸君の要求をかく認識してゐる

かゝる暗澹たる展望を前にして、しかも果敢なる局面打開の自信に充たされつゝ、益々斷乎たる決意を以て前進を續けようとしてゐる親愛なる全國の同志諸君！

諸君は當面、何を要求してゐるか？

「諸君は」——さうだ！ 私等は、廣い意味での「我々は」といふのと同じ心持で、「諸君は」と呼掛ける。

諸君は果して、我々の闘争組織、闘争形態、闘争方針等々に關聯して、現在の瞬間に於て如



何なる要求を持つてゐるか？ それを忌憚なく私等に打明けていたゞき度い。否、諸君の多數は既に、全国各地に於ける諸君の闘争の實踐に關する報告、もしくは質問の形に於て、よしそれを決定的に斷言しないまでも、その核心が何に觸れてゐるか、私等には十分明確に看取し得られる程度に、一再ならずそれを示唆した。しかも、かゝる示唆は、それに含まれてゐる要求が、諸君自身の要求であると同時に、諸君と相互的信頼の關係にある全國の戰闘的大衆の輿望であることを私等に考へさせるには十分であつた。

私等は無論、さうした要求の意味を、最も慎重なる態度に於て、見究めなければならなかつた。だが、私等がそこから出發して、最後に私等のこの提案を諸君の前に置くことを大膽に決心するに至つたのは、單にそれが諸君の要求であり、同時に諸君の背後の大衆の輿望であることとを確かめたからでなく、更にまた、それは實に諸君が大衆の先頭に立つて行つた、闘争の過程に於て不可抗的に湧上がつたものであり、従つてそれは我々の陣營の内外に於ける現實の狀勢を最も正しく反映してゐるものであることを確信したからである。

私等は、まづ劈頭に於て諸君に向つて、その要求を忌憚なく打明けていたゞきたいと言つたが、實は直ぐ續いて述べた根據から、諸君のその要求の何であるかに關し、ひそかに確信ある認識を持つてゐるつもりである。それを先づ、私等の筆で述べてみよう。

若し私等のその認識が誤つてゐるならば、萬事休す！ 私等のこの提案は根柢から崩れるのである。だから、もし間違つてゐたら、寸毫も假借なくそれを指摘していただゞきたいのだ。

#### 諸君は新勞農黨の樹立を要求してゐるのだ。

この表現は、或は諸君の耳には多少突飛に響くかも知れない。換言すれば、諸君の衷心の要求は、まださうした形式に於て諸君の意識の表面に浮びあがつて來てゐないかも知れない。少くとも、諸君はまだ、それをさうした形式に於て公然發表しなかつた。否、諸君はまだ、それを如何なる形式に於ても、公然發表はしてゐない。それは、私等の見るところを以てすれば、諸君が何等かの考慮のために、まだ二の足を踏んでゐるからである。そして、諸君のその態度は、一應は正當視されるべき根據をさへ持つてゐるのだ。この點に關しては、私等は尙ほ後に至つて、もつと明確にそれに論及するであらう。

だが、同志諸君！ 諸君は諸君の背後の大衆と共に、諸君の現實の闘争の進展のために努力すればするほど、當而我々の陣營の行詰りを打開し、そこに再び潑刺たる政治的自由獲得闘争を、大衆的規模に於て巻き起すことを可能ならしめるための唯一の通路として、まづ自分自身の恒常的、政治的組織への要求を痛感することはないか？ 私等は確信する。諸君は屢々、さうした要求が意識に上つて來るのを、如何ともすることが出来なかつた經驗を持つてゐること



を。

自分自身の恒常的政治的組織！同志諸君！それこそ正確に、自分自身の政黨を意味するものではないか！もしくは、我々のすべてに最も印象の深い一の歴史的聯想によつて同じことを別様に表現することが私等に許されるならば、「新勞農黨」といふのが、まさしくそれと同意語をなすものではないか？

この意味に於て、私等は大膽卒直に斷言した、「諸君は新勞農黨の樹立を要求してゐるのだ」と。

私等のこの認識は間違ひであらうか？

一一

右の一點を、次に今少し明細に展開しよう。

(一)政黨とは、組織形態上、それ自身の独自の指導部を持つところの、政治闘争のための組織である。我々は曾てかゝる意味における自分自身の政黨を持つて居た。勞働農民黨といふ政黨を。

勞働農民黨解散後は如何？

我々は新黨準備會を持つた。それはそれ自身、独自の指導部を組織の内部に持つたところの

政治闘争の爲の組織であつた。これを政黨だと規定することには、何人も異存を挾まないであらう。

たゞ新黨準備會解散以後は、我々は勞農同盟に於て、精神的結合と不十分極まる組織とを持つに止まつた。この同盟は直接の、組織上正式の、独自の指導部を持つてゐない。これはなるほど政黨ではあり得ない。

かくて我々は、新黨準備會の解體以來、舊勞農黨に屬してゐた數萬の黨員を、たゞ勞農同盟といふ一種の精神的結合のもとに包容しつゝ、我々の闘争を進めて來た。だが、最近に於ける状態の變化の下に、その形態のまゝでは、我々が最早我々の闘争をより力強く展開せしめることが出来なくなつて來たことは、全国各地の同志諸君が、身にしみて感知されてゐることである。かくて諸君は、わが同盟下における闘争の過程に於て、次第に單なる同盟以上の鞏固なる政治的組織の必要を意識して來たのであり、しかもその必要の意識は、必然的に屢々機に觸れ時に應じ、種々なる現象となつて現はれもした。

まづ普通の形式においては、或る諸地方に於ける同志諸君は、勞農同盟の名を維持しつゝも現實闘争の過程に於て、よし無意識的にもせよ、實質的には多かれ少なかれ地方政黨の或る特徴を帯びた組織を展開した。



例へば、東京市およびその附近に於ける選挙戦に際して市町村会選挙闘争同盟が組織され、次で大阪市議戦に際して、市会選挙無産團體協議會が組織され、その下に選挙闘争が進められたが、前者は選挙後直ちに解體されたから當面の問題にはならないが、後者の場合に於ては、それが選挙期間中暫定的に設けた諸機關が、選挙後直ちに解體されずに、次第に地方政黨的特徴を帯びた一個の恒常的組織にまで發展した。少くとも發展しかけたのであつた。殊にそれは單純に或る特定のカンパニアのための委員會といふには餘りにも恒常的な、しかも餘りにも廣汎な任務を帯びしめられた委員會——それは独自の指導部といへる程度にまで發展した——を持つた。また持たざるを得なかつた。然り、現實の必要がそれを持たしめたのだ。この事實は確かに重大意義を持つ。

(二)即ち、大阪市會議員の選挙後、大阪の多くの無産團體——社會民衆黨や日本大衆黨の指導下に身を置く事をいさぎよしとせず、といつてまた勞農同盟に入ることをも躊躇した多くの無産團體——は、同志小岩井淨の當選を機として、勞農同盟の指導下に大阪地方政治對策協議會を組織した。

この事實を正しく觀察しよう。

右の場合に、市會を中心に、或はそれを契機に、廣汎なる闘争を展開する必要があるといふ

ことには異論があるまい。またそれがためには一定の組織が必要であるといふことも無論である。更にその組織は出来る限り、多くの無産團體を糾合すべきだといふことも當然の主張である。さうすると、その組織は、或は市會議員の統制のための、或は様々の日常闘争を展開するための必要な諸機關として、常任委員會(これは方針を決定する)、それを廣くした協議委員會、その他、調査部、會計等の諸部門を持つことを、どうしても必要とするのである。で、大阪の同志諸君も、不完全ながら、それらの諸機關を持つた。同地方の同志諸君は、日常不斷の闘争を遂行するために、どうしても、それを持たざるを得なかつたのである。現下の難局を乗り切るためにかくまで惡戰苦闘を現實に敢行してゐる我々の同志たちの行動を、何人が暴慢にも日和見主義的傾向として漫罵し得るか!

處が、右の如き諸機關——闘争のために是非とも必要な諸機關——は、それを完備すればするほど、それ自身の指導部を持つた一の恒常的闘争組織に、即ち一の地方政黨になる必然性を持つてゐるのである。で、そこまで来て大阪の同志諸君は、たしかに重大なる理論上の疑問に逢着したのだ。そしてそれを私等に打明けた。だが私等は、その時殘念ながら、それに對して明快なる解答を與へることが出来なかつた。しかも大阪の同志諸君は、あらゆる不便を忍びつつ、最後まで我々の陣營の全國的統制を亂さなかつた。それは嘆稱すべき階級的良心の發露で